

赤松中学

緋弾のアリアX

Aria the Scarlet Ammo

禁忌の双極

MF文庫
J
あ-05-13



緋弾のアリアX

赤松中学

MF文庫
J
あ-05-13

580



9784840139694



1920193005806

ISBN978-4-8401-3969-4
C0193 ¥580E

定価：本体580円(税別)
メディアファクトリー

MF文庫
J
あ-05-13

緋弾のアリアX 禁忌の双極

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵——通称「武偵」を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった(普段は)ただの一般人・遠山キンジ。『師団』と『眷属』の争いに身を投じたアリアとキンジの二人の前に、ジーサード、ジーフォースと名乗る二人組が現れる。彼らの手によって壊滅させられたバスカービルのメンバーを救うため、現場に向かったキンジは、ジーフォースに「お兄ちゃん!」と迫られる。彼女はキンジの部屋にまで押しかけてきて……? 大スケールアクション&ラブコメディ第10弾!!

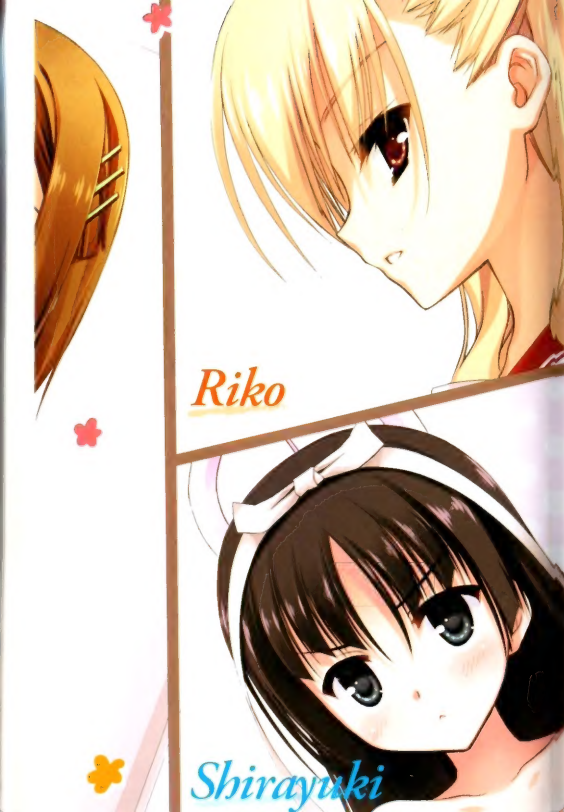
緋弾の アリアX

Aria the Scarlet Ammo

アリアの
禁
忌
の
双
銃

赤松中学





A vertical illustration featuring two anime-style characters. At the top is Riko, a blonde-haired girl with a gentle expression, looking slightly to the side. Below her is Shirayuki, a dark-haired girl with a white headband and a small bow, looking directly at the viewer with a slight smile. The background is white with some faint floral motifs.

Riko

Shirayuki

P11¹弾 クリムゾイ降りた
驚は舞い降りた

P50²弾 ドミノー会議
師団会議

P116³弾
ディープブルー
深海色の秘密

P163⁴弾 スイートフライト
背徳の三叉路

P220⁵弾
サプライズ・ローズ

P274^{Go For The NEXT!}
ベネトリング
即席姉妹

 Contents



Aria



Reki



「やっと見つけた。
お兄ちゃん。もう行くんだよ」



Riko



Shirayuki



緋弾のアリアX

アルカナム・デュオ
禁忌の双極

赤松中学

MF文庫 **J**



——ワケがわからない。

携帯の画面の中で——アリア、白雪、理子、レキ——
4人が血を流し、倒れている。

俺以外、全滅しているのだ……バスカールルの仲間たちが！

（こんなのって……！）

今まで、俺はバスカールルの仲間を守られ、あるいは守ってきた。
その日々の中で、本当の仲間といえる存在になれたつもりだった。

だから、これからも全力で守り続けよう——

そう思っていた矢先に……こんなことが、起きるなんて！

俺は震える指で携帯をマルチタスクにして、このテレビ電話を録画しようとする。

「おい！ これはどういう事だ！ そこはどこだ！」

ハイマキが運んできたレキの携帯は、俺のとはメーカーが異なる。

そのため、どうしても録画設定に手間取ってしまう。

その時間稼ぎのためにも、俺はテレビ電話の相手——ジーサードに問いかけたのだが、

1弾 鷺は舞い降りた



『今から1時間経つごとに、1人ずつ殺す』

ジーサードと名乗った男は、質問に答えない。
ジーフォースと名乗った少女の声もしない。

——それは予測できていた。さっきも俺はヤツらが何者なのか質したが、回答は『黙れ。来い。戦え』の3語だけだったからな。

だが——

(このまま通話を切られたら、マズい……ッ！)

何か、聞き出さないと。

敵の人数、目的、場所、武装、何でもいい。

何らかの情報を得ないと——こっちに、打つ手が無くなる。何もできなくなる。

そんな俺の焦りを嘲笑うように、画面に金属と防弾繊維の手甲をした指が大きく映った。

ジーサード——ヤツの指だ。通話を切ろうとしている。

「待て！ お前ら……たった2人で、アリア達4人をやったのか！」

「——ハッ。違えよ」

ジーサードが、微かに笑う声。

「じゃあ何人がかりだッ！」

『フォース1人だ』

1人……!?

フォース……ジーフォースのことか？ つまり、あの——さっき俺の妹を名乗った——

あの少女が、たった1人でアリア達を全滅させたつてのか!?

——ありえん。そんなの偽言、ハツタリに決まってる。バスカービルの女子4人を全員相手になんて、ヒステリアモードの俺でもできない。逃げる事すら覚えないだろう。

「つ、つくならもつと上手いウツをつけ！ そんなワケがないだろうッ！」

という俺の叫びを最後に——ブツッ——

通話が……切られた。

今の着信は番号非通知。コールバックもできない。

(……どうすればいいんだ……!)

真ッ青になった俺の手元で——ピッ、ピッ、ピッ——

携帯から、無機質な着信音が上がる。メールを受信したらしい。

これはレキの携帯だが、今は緊急時だ。プライバシーがどのとは言ってられない。
と、急いで開いた受信ボックスには——動画付きのメールが来ていた。

件名や本文は無い。メールアドレスは、乱数のような長い文字列。

(このタイミングで、という事は……ジーサード達か……!)

動画を再生すると——

その映像は、手にDV^{カメラ}Cを持って撮ったものではなさそうだった。

画面の揺れ方から見て、どうやらヤツらが装着していたサングラスのような装置が……
HMC^{ヘッドマウントディスプレイ}の機能を持っていて、それで撮影したものらしい。

——つまりこれは、あの2人のどちらかが見た光景なのだ。

解像度は高い。鮮明だ。日没後のようだから、ついさっきだろう。音声もついている。
場所は——都市部。ビルの上か？ いや、その壁面に張り出した何かに立っている様な
光景だ。これはどこだ。アリアたちを救出するには、まず場所を特定しないと……！

動画を注意深く見ていると、湾曲した車道が100mほど離れた所に見える。

建ち並ぶビルや無数のネオンサインも、全て曲線的——広大な円を描く様に配置されて
いるのが見えて、これがその円の内側から撮影された映像だと分かる。

まるで世界史の授業で習った、古代ローマの闘技場——それを、現代の科学力で巨大化
させたような場所だ。

続けてカメラが上方を仰ぎ、大きく円形に切り取られたような夜空が見えた。

それでようやく分かった——ここはおそらく、地下。

大地をスリパチ状に掘削して、その内面に建造された街だ。

(これは……ジオフロント……！)

ジオフロントとは、大深度地下都市の総称。

これは多分その一つ、『ジオ品川』だろう。

ハイマキが歩いて帰って来られる所にある日本のジオフロントは、そこだけだからな。
そこまで分かった時、映像——カメラが、今度は下を向いた。

足下からの青白い光で、画面がチカチカする。どうやら撮影者はネオンサインの1つ、

『S』と描かれた巨大な文字の上に立っているようだ。

さらに映像は横を向き、人間の後ろ姿が映る。

隣の文字、『O』のネオンサインの上に立つ少女——

彼女が横を向いたから分かった。さっきの、ジーフォースだ。

体の各所に鏡のようなマットブラックのプロテクターを着装しており、目には半透明の
赤いヴァイザーを掛け、左肩背部には「USLAGV」という文字が描かれている。

背には、自分の身長ほどの——1・5mはある——ギョツとするほど長い刀をナナメに
掛けている。

その刀は……日本刀や超大型のタクティカル・ナイフのようにも見えたが、違う。

鎧や槌の部分に、筋のような蛍光ブルーの発光が見られる。ただの刃物ではない感じだ。

『——剣は銃より強し』

そう呟いた……彼女の竹まいに、俺は言葉を失う。

この子は、おそらく俺より1つか2つ年下。身長・体重も年相応だろう。

なのに感じる、この超然としたムード——引力を持つかのような、存在感は……
……ああ、分かる……！ 分かってしまう。
俺は、知っている。

このオーラのようなものを、知っている。

——カナ……！

あの人に、どこか、似ているのだ……この少女は！

そう思うと、彼女が背負う刀も、どこかカナの大鎌・サソリの尾を連想させてくる。

——キユイ、キユイ——

ジーフォースの両側頭部から後ろに突き出た、ネコ科動物の耳のような形の装置が——
フレームを滑るようにして、本物のネコの耳みたいな位置へ移動した。

多分あれは、指向性のパラボラ集音器か何かだ。彼女は、何かを探している。

ポプカットの髪をふんわりと風に揺らしたジーフォースは、さっ……

まるで階段を降りるかのような気安さで、ネオンサインから虚空へと踏み出した。

撮影者——ジーサードも、続けて飛び降りる。

2人が立っていたSONYの文字が遠ざかり——ガシユンツ！

歩道にクレーターを生じさせつつ、ジーフォースが着地した。続けて、ジーサードも。
そして画面内では、空中で背中の大刀を抜いていたジーフォースが平然と歩き出す。

路地からは、ドラッグや拳銃を違法に売っていたらしい露天商が這々の体で逃げていく。

(そんな……バカな……！)

落下時間から見て、今、2人は15m——いや、20mは飛び降りたはずだ。

ワイヤーやバラシユートを、一切使用せずに……！

『お前さあ——あたしのお兄ちゃんに手を出したって？ そういうの、ありえないから』
そう言いながらジーフォースは、縦列駐車されていた車の間に入り込み——

(……レキ……！)

刀を持つのは反対の手で、レキの髪を鷲掴みにして引っ張り出してきた。

レキが抱える狙撃銃は、スコープのカバーが開いている。

車と車の間に隠れて、ネオンサインの上にいたジーフォースたちを狙っていたらしい。

その時——グルオツ！

車の下から、ハイマキが吠え声を上げつつジーフォースに飛びかかった。

『あはッ』

ゴーグルの下の目を楽しそうに見開いたジーフォースが、レキから手を放す。

そしてその手が超人的な速度の裏拳を放ち、ハイマキを払う。

ギャンツ、と声を上げたハイマキは軽々と車道まで吹っ飛ばされ——

「……！！」

今ハイマキは隣に居るものの、俺は反射的に目を閉じてしまう。
走る車が、ハイマキを撥ねたのだ。音から察して、後続車にもぶつかったらしい。

——キンッ！——という金属音に再び目を開くと——そこではレキがドラグノフの先端に銃剣を着装し、疾風のような突きをジーフォースに繰り出していた。

こんな時でも無表情なレキだが、その手つきはアリアと戦った時より俊敏だ。

「こんなタンマリ女の、どこがよかったのかなあ。お兄ちゃんも」

刀を振り上げつつ突きを躲したジーフォースは、チリッ——

微かな音を立てて、刃でレキの銃剣を軽く撫でた。

すると……ポロッ……と、レキの銃剣が銃身から外れてしまう。

いや、外れたのではない。切断されたのだ。

鋼鉄の銃剣が——今の、何の力も込もっていなかったジーフォースの、薙ぎで。

「あけかなあ、若気の至りってヤツかなあ！」

続けて繰り出されたジーフォースの蹴りが、レキを背後の自販機まで吹っ飛ばす。

続けてレキの方に軽やかにステップしたジーフォースは、くるんっ。

刀ごと、踊るように一回転した。

そこでまたチリッという甲高い音が上がリ——自販機の光が消える。

そして、斜めに切断された自販機の上部分が前に滑り落ちて……

レキを、押しつぶしてしまふ。

『はい一匹目。バイバイ』

自販機の下半分、その内部では——並んだまま全て切断された缶やペットボトルから、飲料がこぼれ出ている。

(……あのレキが……こんなに簡単に……！)

その事実には驚くヒマもなく、そこで映像が切り替わり——

俺は、新たな驚きに息を呑む。

大型拳銃の銃声が鳴り響く中、車道を走るジーフォース……その前方に、見た事もないような物体が浮遊しているのだ。

ジーフォースの速度に合わせて飛ぶそれは、長方形の、真珠色をした布のようだ。

白い光に縁取られた細長い布が2枚、X字形に合わさって浮遊し——

スクリーンやプロペラのように回転しつつ、空中を前進している。

(……何だ、これは……！)

パッ、パッ、パッ——

布は宙を舞いつつ、前から見えない何かで突かれるように何度も撓む。

『——見つけた！ お兄ちゃんのお気に入り！』

カメラが振り向くと、そこには——

（アリア……！）

歩道橋の階段をバリケードにして、その陰から銃を連射するアリアが見えた。

それで分かったが、あの布は——自律的に動いて、アリアの弾を受け止めているらしい。言わば飛びながらジーフォースを守る、空飛ぶ盾。かつて砂礫の魔女・パトラが使っていた『アメンホテプの冥盾』と似た、防弾繊維製の科学的な装置なのだろう。

だが、浮揚する事も含めて——布状の盾という発想は初めて見た。

パトラの盾のように弾丸を『弾いて逸らす』のではない。多分、形状記憶合金か何かで作った繊維維のような織物で——弾丸を包み込み、柔軟さで『力を逃がす』原理なのだ。ちようど、旗にビー玉を投げつけても、包まれて落つちてしまうように。

『あんた何者よッ！ 名前ぐらい名乗りなさい！』

アリアはガバメントに弾倉を再装填しながら、歩道橋の階段を駆け上がる。

あのX字形の白布を射撃線から外すために、二次元的に移動するつもりなのだろう『それは非合理的だよ、アリア。はいアウト！』

ジーフォースの掛け声と共に、カツツ、カツツ。ブーメランのように飛んだX形の布が上空から、ジーフォースの刀が下から、キーキでも切るかのように階段を切り取る。

>形に切られた階段はアリアを乗せたまま崩落し——
ジーフォースの刀の峰に叩かれて一瞬滞空し、滑り落ちたアリアの上に落す。

さらに舞い上がった空飛ぶ布が信号機を紙箱のように切り、その瓦礫の上に落とした。

『アリア……！』

これは映像、しかも画面内ではもうアリアは見えないが……それでも声が出てしまう。

ジーフォースに従うあの布形の機械は、ただの空飛ぶ盾ではなかったのだ。

光る外周が全て刃物のようになっている、攻防一体の兵器……！

『これで2匹目……ん？』

ジーフォースとカメラが地面を見ると、そこではマンホールの蓋が半分ほど開いており……下から、誰かの手がジーフォースの足首を掴んでいた。

その手首——武偵高の防弾制服の袖は、ヒラヒラしたフリルで飾られている。

（あれは……理子！）

それに俺が気づくと同時に——パンパンパンパン！

マンホールから突き出たワルサーP99が、足を掴まれ身動きの取れないジーフォースに何発もの銃弾を浴びせた。

だが、それらの弾は——カンカンッ、カカンッ！

彼女の体を覆うプロテクターに弾かれ、小さな火花を上げただけに終わる。

1発はプロテクターの隙間、黒いアンダーウェアの部分に命中したようだが——
ジーフォースは僅かに体を揺らしただけで、負傷していない。

その体は頭部以外、全身が防弾繊維のウェアで守られているのだ。

「これであと一匹だね」

米軍が使う、M-67手榴弾^{ミグロウ}——を出したジーフォースが、ピンを口で抜き、野球ボールのようにマンホールの中へ投げつける。

それをぶつけられた理子^{りこ}が声を上げて転落し、すぐ爆発音が続いた。

「……！」

俺^{おれ}の額から脂汗が落ち……また、画面が切り替わる。

今度の場所は、学園島にある公園だ。そこに、白雪とジーフォースがいる。

既に街灯が斬り倒され、駐車していた車が破壊——いや、切断されている。

——2人が戦い始めてから、少し時間が経っているらしい。

抜き身の日本刀を構える白雪は、あの光る刀を手にしたジーフォースから後退する。

刀同上で切り結ぶのを避けるような、妙な距離の取り方だ。ジーフォースの大^{おほ}刀の切れ味を既に目撃しており、自分の刀が破壊されるのを防^{まも}ごうとしているのだろう。

退^ひがりながら白雪は、ばらっ。

空中に、紅^{あか}い羽根つきの弾を5つ投げ上げた。

そして制服の背から、笠^{かさ}に五芒星^{ごぼうせい}——星伽^{ほろぎ}の家紋^{かもん}が描かれた羽子板^{はこいた}を取り出す。

「——伍法緋焰羽^{ごほふゑんう}！」

叫んだ白雪がペン回しのように左手で羽子板を回しつつ、カカカカカンッ！

落下してきた羽根つき弾を次々に撃ち出すと——バババツ！

3つの弾が激しく燃え上がり、ジーフォースに飛びかかる。

だが、どうも残りの2弾は不発だったらしい。ただ放物線を描いて、地面に落ちていく。

『健^{けん}気^きえー、かつわい。お前は、お兄ちゃんに好かれるの分かるよ。美人だし』

浴びせかけられた炎を物ともせず、ジーフォースは白雪めがけて飛びかかった。

『きゃあ！』

『でも——分かつてるんでしょ？ 今夜は璃璃^{りり}色金^{いろのきん}の粒子が濃い。お前たち超能力者^{スチルチス}には
良くない夜なんだよ』

地面に押し倒された白雪がイロカネアヤメを握る手を、馬乗りになったジーフォースが
ムリやり開かせようとする。

『ねえ、これ貸して』

『い、いやッ……やめて！ これは、あなたなんか持っていないものじゃない！ これが
ないと、色金は——』

『——貸せって！』

がすっ！

撮影者——ジューサードの視点からだと思えないが——いきなり叫んだジーフォースは、

白雪の顔を自分の刀の柄頭で殴ったらしい。白雪が放してしまった羽子板が、宙を舞う。
 がすっ！ ごすっ！

「ほら！ 手を開けて！ 抵抗すんなよ！ 壊したりしないからさ！ あは、あはっ！

あはは——ッ！」

笑いながらのジーフォースによる、鉄槌地獄が続く。

白雪は腕で必死に身を守っていたが、馬乗りになられた状態ではどうしようもなく——
 ついに、刀をもぎ取られてしまう。

映像が——

そこで、終わった。

「……ッ……！」

俺は——頭の中が、真っ白になってしまふ。

だが、だが、パニックに陥ってる場合じゃない。

——アリア、白雪、理子、レキ——

バスカービルの4人が、倒されたのだ。ジーフォースと名乗る少女の手にかかって。

そしてその身柄は、ジーサード・ジーフォースの手に落ちていく。

敵の2人は……俺が今まで、経験した事のないタイプだ。

ココやワトソンのような通常武器の使用に長けたテロリスト、工作員とは違う。

ジャンヌやバトラのような魔女とも異なり、ブラドやヒルダのような怪物ですらない。

この映像から見て、ジーサード・ジーフォースは……

(……科学……！)

おそらく、先端科学兵器と呼ばれる新兵器の使い手だ。

——一部の武偵や無法者は、まだ研究所で開発されているレベルの新素材・新技術を、
 企業よりも、手品師よりも、誰よりも早く手に入れる。大金を積んだり、盗んだりして。

そしてそれを武器化し、古い武装の敵を蹴散らしてしまうのだ。

彼らが使う我流の新兵器は『先端科学兵器』と総称され、テストを経ずに使われるため
 信頼性は低いものの……うまく機能されると、通常の武器では手も足も出ない事がある。

ちょうど、今のアリアたちがそんな感じだった。

——刀剣や銃、超能力ですら物ともしない、高度な科学力を用いる新たな敵。

そんな相手に、ヒステリアモードでさええない俺が1人で特攻しても——

返り討ちに遭うに、決まってる。

(いや、だが、それでも……！)

ジーサード——アイツは1時間に1人殺すと言っていた。

その発言から、もう5分は過ぎている。立ち止まってる場合じゃ無いぞ！

——ガッ！

俺は恐怖を少しでも和らげようと、自分の頬を自分で殴る。そして、僅かに震えの治まった指で衛生科のワトソンに電話をかけた。

今回の場合では、負傷者の救助が最優先事項だろう。

衛生武偵——軍隊でいえば衛生兵の助けが要る。

「トオヤマ?」

すぐに出てくれたワトソンに、俺は早口で——

自分でも把握しきれない、この緊急事態を報せる。

通話と今のメールの映像を送ると話すと、ワトソンも初めは言葉失っていたが——
「わ、分かった。映像の分析はボクが手を回す。キミは武装して、10分後に車輛科の第6ガレージに来てくれ。一緒に、アリアたちを救出するぞッ!」

持ち前の男勝りな勇敢さで、そう返してくるのだった。

俺はベレッタ、D E、それと予備弾倉を防弾制服に収め——ナイフをポケットに入れ、さらにスクラマ・サクスを背中に帯剣する。

そして傷ついたハイマキを自分の部屋に引き入れ——

「ハイマキ、良くやった。お前の主人はすぐ助けてやるからな」
鍵を開けたままにして自室を走り出ながら、救護科の宗宮つぐみにハイマキの手当てを

電話で依頼する。ほとんど話したこともないような後輩だが、獣医のスキルがある生徒は武偵高に3人しかいないからな。

そうして駆けつけた車輛科・第6ガレージからは、

「——トオヤマ、乗れッ!」

ワトソンの車、911カレラ・カプリオレがちょうど出てきた所だった。

ワトソンは行手でハンドルを回して車道に出つつ、左手で緊急車輛を指示する赤色回転灯を幌のフレームに取り付けている。改正法に従い、サイレンは省くようだ。

シナモンの香りがする車内に俺が入ると、すぐさまアクセルが踏み込まれた。

「まずはジオ品川へ行くぞ。アリアたちの所在の特定は……」

ぱつぱつしたその双眸を吊り上げるワトソンがそう言った時、車内スピーカーから——
「ワトソン、こちらジャンヌだ。遠山もそこにいるな?」

ジャンヌの、僅かに焦りを含みつつも冷静な声が聞こえてきた。

映像分析のために、ワトソンが連絡してくれたらしい。

「ああ。いま合流したところだ。お前はどこだ」

「私は秋葉原だ。中空知の実家のオーディオショップにいたのだが、そこでワトソンから連絡を受けた。この無線は彼女の協力を得て繋げている」

「お前も来れるか。ワトソンとジオ品川に向かってるんだが、2人じゃ危険そうだが、誰か、

もつと人を——」

「いや、援軍は送らない」

「何？ 何でだッ」

「敵はアリアたちを凌駕する戦闘力の持ち主だ。誰を連れていっても負傷者が増えるだけだぞ。あの映像は、そういう意味のメッセージなのだ」

それは——確かに、そうかもしれない。

必死だったからそこまで頭が回らなかったが、ヤツらがわざわざあの映像を送ってきたのは、『自分たちと戦ってもムダだ』という事を伝えるためだったのだろう。

信号を無視して台場を走る車内で、俺は小さく歯を食いしばる。

「今回は敵を刺激してはならないのだ。ヤツらが2人なら、それより多い人数で行つてはダメだ」

「それは……分かった。だが、どうすればいい」

「アリアたちの救助を最優先に考えつつ、交渉に持ち込め。あまりにも乱暴なやり方だが、ヤツらはバスカービルを襲つて——お前を呼び出した。その意図を明らかにして、取引をするのだ」

救助、交渉、取引——あまり得意な任務じゃないが、やるしかないのか。そういう所も今までの敵とは違う。やりにくい相手だぜ。

「——中空知です」

ラジオのニュース放送と聞き間違えるような、キレイな声が車内に響く。

縁あってよく力を貸してくれている、通信科2年の中空知美咲だ。

「テレビ電話の通話音声から、場所が特定できました。品川区港東1-7-32、ジオ品川7区、コリエンテ・ビル7階の屋外劇場・テアトロ・アクアと思われます」

「——ここだけはラッキーだったな、ビルまで車で直行できるよ」

伝えられた情報を、ワトソンがカーナビに入力する。

そしてアクセルが深く踏み込まれ、9-11カレラ・カプリオレは首都高に入つていった。

ジオ品川はバブル期に着工されたが、その後工費が捻出できなくなり……大地を逆円錐形に大きく掘った状態で長らく放置されていた。昔の学園島や今の空き地島と同じように、第三セクターの破綻によって出来た——巨大な、ただの穴だったのである。

後年、その内側に再開発と称して半ばムリヤリに町が造られたのだが……

「ブルックリンみたいな所だな。ニューヨーク武偵高にいた頃を思い出すよ」

車の窓から周囲を見るワトソンが言う通り——ここは空き地、廃ビル、掘削工事を中断された地下道などが多い土地柄、都内屈指の治安の悪い地区となっている。

螺旋状の車道を下りる間も、いかがわしい店の看板やネオンサインが視界のあちこちで

誘蛾灯のようにギラギラ光っていた。そしてその半分ほどが日本語の看板ではない。

「ジオフロントは『見つけりにくく逃げやすい』からな。アジアのあちこちから無法者が引越してきてるらしいぜ」

ここはハッカーや非合法無線の巢窟でもあるので、電波台風とアダ名される違法電波も渦巻いている。ジャンヌ・中空知との無線通信も雑音が酷くなり、中断せざるを得ない。スモッグ情報を示す巨大な電光掲示板は、それそのものがジオフロントに滞留する排気ガスで黒く汚れていた。下水やゴミの処理も行き届かないらしく、不衛生に見える。

そんなジオ品川を走り抜けたワトソンは――

「――ここだ、この7階だよ」

何の意味があるのか空を照らしているサーチライトのそば、さっきまでの光景とは一転して贅の限りを尽くした外装のビル前で車を止めた。

「――行くぞ」

銃をコッキングする俺に――

「熱くなつてはいけなぞ、トオヤマ。冷静に対処するんだ」

自分も比較的短気なワトソンが、そう忠告してくるのだった。

ビルは休館日らしく、正面入口が閉ざされていた。

俺とワトソンは協力して、ワイヤーで2階のテラスによじ登り――屋外劇場の明るさが分らないので――左目だけを閉じて光彩を暗闇に慣らしつつ、8階まで階段で移動する。

「ここだ、入るぞ」

マバタキ信号が使えないため、ワトソンがシアターの扉付近で囁いてくる

非常口の誘導灯が俺たちの顔に黄緑色の光を落とす中、音を立てないよう、重いドアをそつと開くと……

屋外劇場は、舞台の上だけに屋根があり――客席は、露天だった。

周囲のビルやネオンサインが発する光が差し込んでるので暗闇というわけではないが、照明は消されている。薄暗い。

俺たちが暗闇に慣らしておいた左目を開くと――

舞台の上に、見えた。アリアたちが、さっき映像で見せられたまま、倒れている。他には……誰もいない。物音一つしない。

俺はワトソンと2人で舞台へ上がり、4人のそばまで駆け寄る。

「アリア、白雪……理子、レキ………！　おい………！」

「トオヤマ、慌てるな。ボクが診る。キミは周囲を警戒しろ」

と言ったワトソンが、4人の容態を確認し始めたので……

俺はワトソンを含め、全員を守るように周囲を見回す。

「生きてるだろうな、4人とも」

と、ワトソンにかけた声に――

「殺しちゃいねえよ」

突然、客席の最前列辺りから返事があった。

「――ワシントン・コロンビア特別区法五五〇九D、上院法八八〇七――ワシントンDCよりライセンスを受得した武偵は、如何なる状況に於いても人間を殺害してはならない――まア、俺たちや附則で認められてるからいいっちゃいいんだけどな」

その声には、まるで魔獣の唸り声のような凄味がある。

「ッ……！」

振り向くと、前から2列目・中央の客席に――

さつきは間違い無く、誰の姿も無かったのに――

さつき映像で見た、ジーサードが、座っていた。

ジーサードはブーツのようなプロテクターをした足を前の座席の背に寄せ、何かの本を読んでいる。銃を持つ俺を、全く警戒してない。見てすらいない。

「気をつけろトオヤマッ……！」 近くにもう1人いるかもしれないッ」

と、ワトソンもP226Rに手を伸ばした時、

「――あたしのことッ」

今度の上――

舞台上に渡された照明用レールの上から、声がした。

「……！」

ジーフォース……！

さつきの映像の主役、たった1人でアリアたちを全滅させた少女だ。

マットブラックに塗装されたプロテクターのあちこちに、蛍光ブルーの光が見える。

「キ、キミたちは何者だッ。ジーサード、今の発言――キミはアメリカの武偵か？」

「喜べ。俺たちも、極東戦役――てめえらの遊びに付き合ってる」

質問には答えないジーサードをワトソンが、そしてジーフォースを俺が警戒する。

俺に熱い視線を落としていたジーフォースは、きゅい、きゅい。

頭部に着装している、ネコの耳みたいなセンサーを動かした。

「……あ……」

彼女の小声と連動するように、ふんわり……と……

首筋にかかるボブカットの髪、その襟足が膨らんでいく。

どうやらあの頭部に付けた装置が稼動すると、首筋の廃熱ファンから空気が排出される構造になっているらしい。

「……やっぱ、サイコー……背徳う……」

もう俺しか見えてないような集中っぷりで、ジーフォースは俺の顔に両目を向けている。蕩けた笑みがブルブルと震える様子は、狂喜して体が疼くからのようだ。

まるで、好物を近くで見せられたケダモノのように。

フォース、ヴァイザーを外せ。遠山キンジの技は多分、俺に似てる。記録に残すな」客席から声をかけたジーサードに一つ頷くと、ジーフォースは——サッ——前髪をかき上げるような手つきで、紅いサンガラスのようなH M Dを外した。薄闇に浮かぶ、彼女の素顔は——

「……ッ……」

息を呑んでしまうほどの、美少女だった。

全体的には、どこかあとけない。幼げな容貌で、やはり14、15歳に見える。

自信に満ちる目はバツチリとしており、瞳は、黒……いや、少し青みがかった深海色

してる。鼻筋はスラッとしており、ピンクの唇も可憐だ。

だが——俺を見下ろすその表情には、燃えるような欲望の色がある。

年齢よりも大人っぽい情念を含んだ顔で、俺をねめつていて。

そのアンバランスさから……

どこかダークで異常な、ある種の狂気を孕んだ雰囲気伝わってくる。

「フォース、コイツでなら——なれそうなんだな？」

「うん、うん——じゃあ、いい？」

「やってみろ」

ジーサードとジーフォースがそんな会話をした直後——

「——！」

ジーフォースが、驚のように舞い降りてきた。

——俺、めがけて！

「トオヤマッ！」

ワトソンの声と同時に、俺は転がるようにしてジーフォースの両足を避けた。

ジーフォースが着地した床が一部、破片を散らして破壊される。

やむなくベレッタを発砲しようとした俺の右膝に——

「会いたかったよ、お兄ちゃん！」

稲妻のような、ジーフォースのローキックが炸裂した。

「——うおッ！」

転倒し、舞台上に倒れた俺は——立ち上がれない。

プロテクターはジュラルミン製なのか軽量に思えたが、脚力自体が凄まじかった。

強襲科時代の訓練のおかげで骨まではやられなかったが、靱帯を痛めたかもだぞ。

「立って。ねえ、立って。単分子振動刀も磁気推進絨盾も使わないから。殺さないから、

立って。遊ぼ？」

花がほころぶような笑顔で、ジーフォースが俺の傍らに歩み寄る。

そして――

ガンッ！

身をよじった俺の足が一瞬前まであった場所に、床板をプチ抜くようなストンピングを打ち下ろす。

「弱い演技なんか、しなくていいんだよ。お兄ちゃん」

「ど、どういことだよ……！　なんだ、演技って……ッ！」

ジーフォースは笑顔のまま、据わった目でまた歩み寄ってくる。

「あたしのお兄ちゃんが、こんなに弱いわけないんだ」

「お、お前なんか妹じゃねえ！」

威嚇射撃を――

そう思っってベレッタを振り上げたが、ジーフォースは苦笑いしただけだ。

銃に、怯まない。一切。

俺が引き金を引きかけた、その時――

「もういい、フォース」

それまで舞台を静観していたジーサードが、こちららも自分に銃を向けるワトソンを無視

して立ち上がった。

「チッ……ベルセまで到達してりや、なれるかと思っただがなッ」

ジーサードは、ガリガリと後ろ頭を掻きながら独り言する。

(ベルセ……？)

ヒステリアモードの派生系――

ヒステリア・ベルセの事を言っているのか？

「えっ、もうおしまいなの？」

きよとん。

ジーフォースが大きな目を見開いて、俺とジーサードを見回す。

「そうだ。もう分かった。ソイツとは戦う価値もねえ」

「やだよサードっ。あたしはもっとお兄ちゃんと戦りたいの。お兄ちゃんを理解したい。もつと、もつと分かり合いたい！」

などと俺を指して言うジーフォースが、胸元に挿したコンバットナイフを掴んだ時――

「――フォ――スツツ！　命令に従えんのかアアッ！」

劇場全体に響く大声で、ジーサードが叫んだ。

その瞬間、俺もワトソンも目を見張る。

「……………」

こ、この雰囲気は——

分かる。これも、分かってしまう。

この、鬼か龍のような、人のレベルを遥かに超えた殺気は……………！

これはカナではない時の兄さん、そして——『静かなる鬼』と呼ばれた——

(父さん……………)

武偵制度が日本に導入される前、法務省直属の武装検事として殉職した……………俺の父親、遠山金又に、似ているのだ……………！

そのジーサードに、喝されたジーフォースは、びくうつ……………！
と、全身を震え上がらせた。

その表情は、あの映像の中でも、俺を襲う間にも、一度も見せていないもの。

明らかな——恐怖。

怯えの表情、だった。

「……………ごめん……………つ、あ、あたしは、ちょっとだけ……………いい、勢いがついちゃっただけ。それだけだよ。ご、ごめん……………」

ジーサードから後ずさるジーフォースは、冷や汗を滲ませ、膝を震わせてさえている。

(……………俺から意識が逸れた……………！)

それに気づいた瞬間、強襲科で身に染みついた習慣が俺の体を動かす。

反射的に、ベレッタの銃口をジーフォースに向けた——その時。

「よせ、トオヤマ！ もう戦うな！」

ワトソンが、掴みかかってきた。

そして右足に力が入らない俺を組み伏せるようにし、

「今の——女の方の姿勢を見ただろうッ……………！ あの男は、バスカービルをたつた1人で全滅させたこの女より——更に、強いんだ！」

耳元で、早口に言ってくる。

「抑えろトオヤマッ、この状況はジャンヌが言った通りなんだ！ あの2人は、やろうと思えばボクらを殺せる！ そうなったら、アリアたちを救ける事もできなくなるぞ！」

「……………ッ……………」

ワトソンの言う事は——正論だ。

俺たちは勝てないし、アリアたちを助けなければいけない、戦うのは間違った選択だ。だが……………ッ！

このジーサード・ジーフォースの2人には——なぜかは知らないが、理屈を超えた所で怒りが湧く。つい、熱くなってしまうんだ……………！

「分かるぜ、遠山キンジ」

USLAGII と書かれた背部プロテクターをこつちに向けつつ、1人で劇場を後にしようとするジーサード——その姿が、ジジツ……と音を立てながら……

消えて、いく。

透明になっていく。官戦会議の夜に見たのと、同じように。

「光屈折迷彩……!! じ、実用化されていたのか……っ!」

それを見たワトソンが、冷や汗をかきながら呻いた。

「遠山キンジ。おめエは、俺たちに腹を立てた。だがその裏で無意識に、こうも思った。

『ああ、良かった。戦わなくて済む』……だから、肩、腹が立った。凶星だろう?」

「何だと……?」

「なんなら撃て。まだ少しは見えるハズだ、俺がどこにいるかはよ」

ほとんど透明になったジーサードが、バスンツ! と、劇場の重いドアを蹴破り——

「フォース。キンジがレガルメンテに覚醒してねエなら、HSSに慣れさせる必要がある。お前は落ちこぼれ同士、そいつとHSSを使いこなせるようにしてこい。今から、作戦をプロセスに移す。次は——『双極兄妹』になったお前らと再合流する」

HSS……ヒステリアモードという意味の言葉を含む不可解なセリフを、ジーフォースに語っている。

そして、語り終えた頃には——

もう、その姿は影も形も無くなっていた。

消えた、のだ。いま確かに、そこにいたハズなのに……!

ジーサードが消えた後——ジーフォースは、とこ、とこ。

全く敵愾心のない足つきで、俺とワトソンの横を通り過ぎ……

倒れたままのアリアたちのそばに立ち、愛嬌たっぷりな無邪気な笑顔を向けてきた。

「——車呼んだから。お兄ちゃんについた悪い虫たち、病院に閉じ込めちゃお」

ニコニコして言うジーフォースには……

もう、戦うつもりはないようだ。

とはいえ、俺は警戒心を解くに解けない。

「だ……誰がお兄ちゃんだ。お前なんか信用するか……!」

さつき蹴られた右膝を押さえつつ、ジーフォースの背の刀を睨むと——

「んーと……じゃあ、はい」

バシユツ——

彼女のプロテクターの各所から、水蒸気のようなものが鋭く噴き出した。

次の瞬間、バラバラッ。ジーフォースの装備は、刀も含め……全て外れてしまう。

その体に残ったのは——スキー用のブーツみたいな靴と——全身にピッタリと張り付く、黒いアンダーウェアだけだ。

そのウェアは、ストッキングのように薄い最新の防弾繊維製らしく……ジーフォースの未成熟なボディーラインが、クッキリ浮き出てしまっている。

腰周りには下着の線、というかシマシマの柄までもがクッキリ見えていて、上は……つ、つけてない、みたいだぞ！

驚いて目を見開いてしまった俺の後ろから、

「……あッ、み、見るなトオヤマ！」

がばっ。

ワトソンが両目を手で覆ってきた。ナ、ナイスフォロードワトソン！

「その、トオヤマ——キミには妹がいたのか……？」

「い、いない。断じていないッ。コイツが勝手に名乗ってるだけだ！」

強く否定しながら、俺はワトソンの手から下に抜ける。

そしてジーフォースを見ないようにしつつ、倒れたアリアたちのそばに跪いた。

「じゃあ、こいつら運ば。武偵病院ってどこでいいよね？」

などと言ったジーフォースは、ぐい。

アリアとレキをネコ掴みして、両肩に担いでいる。



どうも、この子の本気で……自分で倒した4人を、自分で救助するつもりらしいな。気絶している白雪をおぶった俺に、

「……見た目ほど重傷じゃない。4人ともね」

理子を背負ったワトソンが、そう耳打ちしてくれる。

「——今夜は手抜きしたから。そうしろってサードに命令されたからね」
それが聞こえたのか、ジーフォースは愛らしいウインクをして見せた。

……どこまで強いんだ、この少女は。

戦闘時の『手抜き』は危険な行爲だ。言うのは簡単だが、実際にやるのは難しい。特に武装した者が相手の場合、よほどの実力差が無い限りまずできない。

それを……当たり前のようにやってたわけか。

「キミはジースードの命令を聞いているようだな。彼の方が、キミより強いのかい」
うまく探りを入れたワトソンに、ジーフォースは流し目するような視線を向けた。

そして、さっきの——

できれば外れていて欲しかった、俺たちの読み通りの答えを返すのだった。

「そうだよ。ずっと強い。そしてあたしは——自分より強い者には、絶対逆らわない」

ビルの車寄せにはジープのように大きな黒塗りのハマーが駐車しており、横でスーツを

着た白髪の男が深いお辞儀の姿勢をしていた。

「——フォース様、お見事で御座いましたよ」

男が……顔を上げる。その顔付きは、引きつるように歪んでいた。

背筋も伸びきらず、曲がったままだ。初老の白人だが、これは加齢による曲がり方じゃないな。どこか神経系に障害があるのかもしれない。

「ありがとう、アンガス。サードは？」

その男が開けた後部座席のドアにアリアとレキを放り込んだジーフォースは、老人……アンガスに、偉そうな口調で訊いている。

「ロカの御するグンペルト・アポロにて、ガリオンへ向かわれておりますよ」

「サード、ガリングク好きだなー」

「左様ですな。あの形を、美しいと感じられるようで。ツクモは、ウラジオストクに待機させてございます」

占めかしい日本語を話す、この老人は……今、俺たちの知らない人名を出した。

彼を含め、ジースードとジーフォースには仲間がいたらしいな。それも複数。

「遠山様と……そちらの殿方は、ご自分のお車で自宅へ戻られますか？ これより、女性のご一同を武偵病院までお送りしますが」

老人が笑みを浮かべ、こっちに話しかけ——

ワトソンが、彼とジーフォースの方に向き直った。

「もう戦う意思がない事は理解したが、ボクらはキミたちを信用したワケじゃない。ジーフォースは、ボクの車に乗れ。トオヤマ、キミはそっちの車に乗るんだ」

俺は車輦科から車を呼ぼうかとも考えていたが、帰り道で何かあったら巻き込むことになる。それに、アリアたちも急いで病院へ運ぶべきだ。

ワトソンが言う通り、丸腰のジーフォースを人質に取りつつ……この2台に分乗して行った方がいいかもしれないな。

頷いた俺の前で、サツ、サツ。ワトソンが素早く老人をボディーチェックして、それを見たジーフォースが小さく吹き出した。

「非合理的い。アンガスは武器なんか持たないのに」

「いいからキミはこっちに乘れ。言っておくがボクのボルシエは自爆できる、不審な事はしないことだ」

「まっすぐ病院へ向かうつてば。それはそうと……ワトソンつて、かわいい顔してるね。まるで女の子みたい」

ジーフォースは、じろり。

ワトソンの実際かわい顔顔を、なぜか気に入らなさそうに覗き込んだ。

「——！ しっしっしっ失敬だぞキミは！ ボクは男だ！ もう一度言う、ボクは男だ！

ボ・ク・は・男・だッー」

お、おいワトソン。

そんな、火が付いたように真ッ赤になって否定すんじゃないよ。

むしろバレルぞ。

ていうか自爆機能なんかあったのかよ、そのボルシエ。二度と乗りたくなかったな。

「あーあ。これからはお兄ちゃんの男友達も潰さなきゃダメかなあ。なんか相性よさそうだったし。いるもんねえ、そういう男同士とか」

「きッ……キミ、はっ、なんていう事を、考えるんだッ！ 変態か！」

ツバがかかるぐらいの距離でジーフォースにがなり立てているワトソンは、とりあえず放っておきつつ……俺は理子と白雪をハマーの中に運び込み、埃一つ落ちてない革張りの助手席に自分も座った。

足も悪いのか、ヒョコヒョコと回り込んで運転席に座った老人……アンガスを——

やはりまだ信用しきれず、横目でチラッと見てしまう。

「——ご心配めされるな、遠山様。私はサード様の、ただの執事にござりますよ」
首をねじるようなポーズで振り向いた彼は、どんな運転手よりも優しい手つきで——
軍用車のようなハマーを、実にソフトに出発させるのだった。

学園島に向かう老人の運転は、まるで王族でも運ぶかのように丁寧だった。道路標識も的確に守ってる。

こっそり、横顔を見ると……

臉が引きつってはいいるが、その瞳は草食動物のように穏やかなことが分かるな。

(悪人には見えないが……)

彼は、ジーサードの執事を名乗った。

そうであれば、ここで俺が何か言えばそれがジーサードに伝わり、後々不利に働くかもしれない。

そう考えた俺は沈黙を通し――

何の問題もなく到着した武偵病院の夜間人口から、アリアたちを院内に搬送した。

自らもイギリスの医師免許を持つワトソンは「警戒を怠るな」と俺に言い残して院内に入り、アンガスが丁寧なお辞儀をしてハマーで去り――

病院の車寄せには、俺と……

妙に俺のそばに立つ、ジーフォースだけが残された。

見ればジーフォースは、あのあられもないアンダーウェアの上にロングコートを重ね着していた。見覚えがあるコートだ。ワトソンの物だな。

「これで二人つきりだね、お兄ちゃん」

と言うジーフォースは……妙に、ウツトリとした目で俺の顔を見上げてる。

俺と視線が合うと、きゅつ。嬉しそうに目を細めた。14、15歳の少女らしい仕草で。

夜風に乗って、その髪からキャラメルみたいな甘い香りがしてくる。

「あ、あまり近づくな。それには俺には妹なんかない」

「いるんだよ、ここに」

「だから近づくなんてッ」

「――いいよ。お兄ちゃんがそう言うなら、一晩ぐらい別々でも。あたしいろいろな準備しなきゃいけないし」

「……準備？ 何のだ」

「ナ・イ・ショ。とりあえず今夜は――これにて、一件落着いてことで」
訝しむ俺に、フォースはいたずらっぽくウィンクした。

そしてこつちに背を向け、ゴキゲンなスキップで並木道を去っていく。

――ちぎれ雲の合間に輝く月が、その姿を不安定に照らしていた。

2弾

師団会議



深夜になって、ワトソンから電話で教えてもらったが……

アリアたちのケガは、結局のところ、大したことはなかった。

瓦礫の下敷きになったり手榴弾をくらっても軽傷で済んでいる辺りのタフさは、さすがバスカービルの女子たちだな。ちよつと咄然としちまうが、まあ、安心したよ。

とはいえ念のため、4人は1週間ほど武偵病院に入院する事になったそうだ。車に2回撥ねられたハイマキもな。

そして翌日――

息をつく暇もなく、ジャンヌから『ジーサード・ジーフォースの一件について、師団のメンバーを招集して会議をする』との連絡があった。

なお、この日は放課後にハロウィン（10月末が休日だったので、振り替えて今日やるんだそうだ）の催しがあり……何かしらそれっぽい姿で外を歩くように、と、教務科からの通達が出ていた。要はオバケとか、そういうカッコをして過ごせということだ。

とてもそんな気分にはなれない俺だが、制服で歩いているのを鬼教師に見つかったら顔がオバケになるまでボコられる。会議に参加するどころか、俺も病院送りになっちまう。

ので、仕方なく装備科から『ハーミットの衣装』なるフードつきローブを借りて、黒いオバケみたいな姿で会議に向かう。

会議場となったファミレス・ロキシは楓並木の道にオープンテラスを張り出しており、そこに――『師団』の面々が集まっていた。

歩く分には問題なかったが、ジーフォースに蹴られた右膝がやっぱり痛むな。

衣装のせいで初めから少し遅刻気味だった俺は、膝のせいで走ったり出来なかったの……約束の3時から少し遅れて、ジャンヌたちの元へ到着している。

「遅くなったな。分かんかんかもしれんが俺だ」

黒いフードをかぶったまま買ってきた烏龍茶を持ち、バスカービルの生き残りこと俺が丸テーブルにつくと……

「遅刻だぞ遠山。お前は……普段から暗いの、さらに暗い仮装をしてきたな」

イ・ウー研鑽派残党――ジャンヌ・ダルクが、コーヒーマップを手を振り返った

ジャンヌは右目の下に雪の結晶形のキラキラシールを貼り、黒いトンガリ帽子をかぶり、先つちよに星のついたステッキを持つという分かりやすすぎる魔法のコスプレをしている。ていうか、リアル魔法が魔法やるなよ。もうちよつとヒネれよな。

「おう遠山の、災難じゃったの。膝の具合はどうじゃ？」

もつとヒネリがないのは――

丸出しにしたシッポを『？』形にして聞いてくる玉藻で、これは赤いミニスカートの風和服を着ただけで化けギツネを演じている。というか演じてない。元から化けギツネなんだからな。楽しすぎだろ。

しかも普段は帽子で隠してる耳まで丸見せなのは、いかがなものか。

仮装といえるのは左右のほつぺたに3本ずつ付けた黒いハリガネのヒゲぐらいだが……糊付けが甘く、振り向いただけで1本落ちたぞ。今。

一方、リバティー・メイソンのワトソンは、

「トオヤマ。ボクも、分らないかもしれないけどボクだよ」

間違った方にヒネってしまつたらしく、ジャック・オー・ランタン……大きなカボチャの中身を削りぬいてマスクにしたものを、頭にすっぽりかぶつていて。

……カボチャ臭くないのかな。そんなのかぶつてて。

首から下は白い雨ガッパみたいなのを着てるから、確かに誰だか全く分からんぞ。喋られてようやく分かった。

『まあ皆さん、禍々しい——でも、かわいらしいですよ。ふふっ』

ふわふわした声が聞こえてきたので、テーブルに置かれたノートPCを見ると……

画面には、Skyperが何かで映像通信をしているらしいメイヤが映っていた。

彼女は極東戦役にバチカンからの使者として参戦したシスターで、カナがローマ武偵高

に留学していた頃の元後輩という人物である。

メイヤは……グダグダの仮装をした俺たちに、幼稚園児に接する保母さんみたいな笑顔に向けてくれていた。むしろ、つらい。

見ればメイヤの背後には教会の窓も映っており、外が暗かった。時差があるんだな。

『では少々性急ではあるが、師団会議を始める。先日『師団』のバスカービル——1名はウルスの兵も兼ねているが——その4人が『無所属』だったはずのジーサードと、手下のジーフォースに討たれた』

仕切り屋、というか割と仕事人間なところがあるのか……テキパキと現状を話し始めたジャンヌに、

「昨日、車で帰りながらジーフォースから聞き出したんだが——ヤツらがジオ品川を拠点にしていたのは、単にレキをそこで発見したからだぞうだ。レキを含め、アリアたちは皆襲われるまで一切ジーサードたちにコンタクトされていない。つまり、全て奇襲だ」

カボチャ人間ことワトソンが補足する。

「——いくら寡兵とはいえ、許し難いな。不意打ちとは」

碧眼を瞬かせたジャンヌが、ハードチュールとサテンのパニエで膨らませたスカートの下の足を組み替えた。

「彼らは卑怯な手を恥と思つてないんだ。勝てばそれでいいという思想の持ち主らしい」

自分の事を棚に上げつつ、カボチャのワトソンが言う。

「どうする。ジーサードとジーフォースは今、別々に動いてる。戦るか」

さっそく、俺が核心に迫ると――

ん……………

なんか、みんな、目を逸らすぞ。画面の中のメーヤまで。

何だよ、お前ら。

「……………」

一人だけ目を閉じていた玉藻が、ちゅー……メロンソーダを飲み、

「――仲間をやられて熱くなる気持ちは分かるがの。あまり儼を失望させるでない、小童。戦う？　では――遠山のお主、勝てるのか？」

そのくりつくりの目を、鋭い――人外特有の超越的な光を交えさせつつ、開いた。

「それは……………」

「さっき、ワトソンから聞いたが……バスカービルの娘たちは、ジーフォースに手も足も出なかったのじゃ。ヤツらの将、ジーサードはそれより強いとの事ではないか。それに自分なら勝てるというなら、どう勝つか申してみよ」

ふさつ、とイスの背もたれを撫でるようにしっぽを立てた玉藻に――俺は口ごもる。
「……具体的には、その……すぐ思いつく方法はないが……………」

「遠山の。掟を忘れるでない。『戦役』ではいつ何時、誰が誰に挑戦する事も許される。ヤツらの手口は汚いが、間違っではおらんのじゃ」

「じゃあ戦うなつてのかよ。仲間が卑怯な手で闇討ちされたんだぞッ」

俺が眉を寄せても、

「闇討ち？　それが何じゃ。これは戦ぞ」

玉藻は、しれつ、と返してきやがる。

「何……………」

「戦とはそういうものじゃ。フェアプレーを誉められるスポーツとは違う。それに、戦はケンカでもない。古来より、血で血を洗う争いの後に和合せねばならん事も多々あった」と、こつちを睨んだ玉藻に――俺は、何も言い返せない。

この……………化けギツネめ。

小学生、それも低学年みたいな姿をしてるくせに。高校生を論駁してきやがつて。

「遠山の。なぜお主だったのかは分からぬが――バスカービルは一人だけ無傷で残されたこれはヤツらなりの口上ぞ。『自分たちは強い』と示した上で、バスカービルに使者――ジーフォースを置いていったのじゃ」

「だがアイツらは敵だッ。敵を野放しにしているのかよ？」

「敵？　ではジーフォースは今、敵意を剥き出しにしておるのか？　ヤツは甲冑を脱ぎ、

刀を棄てたというではないか。ヤツらは今、師団に真に敵対してはおらぬ。交渉の余地を残しておるのじゃ。それをみすみす、こちらから形無しにしてはならぬ」

「それは……まあ、そうかもしれないが……」

「それに話に依れば、ヤツらは『科学』を御する。得体が知れん存在じゃ」

お前の方が得体の知れん存在だろうが。

と、喉元まで出なかった声を俺は飲み込む。

「科学の使徒と儂等——魔女や化生は、相性が悪いのじゃ。加えて、今は璃璃色金の粒子も濃いで」

ぶくう、と頬を膨らまして、玉藻は面白くなさそうに言う。

「璃璃色金……う」

それは確か、レキの故郷にあったらしい色金的一种だ。

皆、藍村のココ姉妹が新幹線に乗った時に『見えない粒子を撒いて、超能力者が弱まった』などとも言っていたな。それと何か関係があるのか？

断片的な事しか知らない俺に、ジャンヌが振り向く。

「——理解しづらい事かもしれないが、璃璃色金は超能力者の能力を弱らせる粒子を撒くことがあるのだ。ちようどチャフを撒いてレーザーを使用不能にするような事なのだが、困ったことに……それは、極めて広範囲に行われる」

「広範囲？」

「地球の表面の1/3程度には影響する。ちようど文化祭の頃か、あの時期からまたその強度が上がってな。今現在、日本もその影響下にある」

理解しづらいと前置きされたが、その通りだな。

地球規模の超能力妨害かよ。

超能力者じゃない俺には想像の範囲外の出来事。SF世界、ファンタジー世界の話だ。だが……

昨日の映像を思い出すと、確かに白雪は羽根突きみたいな鬼道術をミスっていた。

それが玉藻やジャンヌにも起きるとなると、師団の戦力は大幅にダウンするのだろう。

「つまり、今は時も悪い。戦えば儂等は全滅しかねんぞ」

「じゃあ……どうしろってんだ、玉藻」

「取り込む」

「……は？」

「まずはジーフォース、いずれはジーサードを——『師団』に取り込むのじゃ」

「何……だって……？」

「戦役」では、ヤツらのような強き『中立』や『無所属』を多く引き入れた方がよい。表の世界の戦と同じ事じゃよ」

「バ、バカ言うな。あんなヤツら、一体どう言つて仲間にするってんだ」

「取り込む方法は対話だけではない。そのために金銀財宝、権力、異性、ありとあらゆる手が使われてきた。かつてはそれを目当てに中立を謳う者もいたでの。無礼千万な諺ではあるが、『狐獲るなら油揚げで』とも言う。ジーフォースの好むものが分かれば、それをエサに師団の兵にできるやもしれん」

あいつが好むもの……？

と、首を傾げた俺の正面で、ワトソンがカボチャ頭を上げた。

「トオヤマ。それでなんだが」

「なんだよ」

「その、えつとだね……ジーフォースという女は……昨日の車でも、聞いているこつちが恥ずかしくなるほどに……キミと会えた事が嬉しくて仕方ないと語っていたんだ。つまり、どうも、キミに気を許している雰囲気がある」

「……だから何だ、寝首でもかけてのか」

「いや、違う。ボクが言いたいのは——その、つまり、ロメオだ」

「ロメオ……!?」

俺は烏龍茶のコップをひっくり返しそうになる。

ロメオとは——武偵用語の一つで、男版の、ハニートラップ。

正攻法では倒せない女のターゲットに対し、その女に好かれそうな男が近づいて……色じかけで、寝返らせたり、機密を喋らせたりする手法の隠語だ。

しかしこれはハニートラップより難易度が高く、東京武偵高には専門学科がない。確か、学科があるのは世界でもベルリンとバンコクの武偵高だけだったか。

もちろん俺も、そんな手法はビター文学んだ事はない。ヒステリアモードという身体的理由もあり、関連書籍すら読んだことがないほどだ。

そんな仕事を振つてきやがるとは。どうかしてるぜ、ワトソン。

一ふざけんなカボチャ頭。パスカービルは、ジーフォースに襲われた直接の被害者だぞ。それでなくても、あんな危なっかしいヤツ——

「じゃあ他に手はあるのかい。ボクらには今、それぐらいしか打ち手がないんだ。それに外見上とてもそうとは思えないが、実績上、キミは得意だろう。女子をたらしこむのが。アリアを始め、白雪とか、理子とか、レキとか、中空知とか、その他とか」

カボチャのワトソンがなぜかチクチクと棘のある口調で言うのと、一回は……お、おい。なんでみんなして俺を見るんだよ。

そんな、前科何犯もある犯罪者を見るような目で。

『まあ……そんなに。さすがはカナさんの弟さんですね。とても人気があるようで』
こらそこ。メーヤ。お前も感心したような声で言うな。

助けを求めるように振り向いたら、ジャンヌも完全に俺という人間を誤解したムードで「がんばれ」という目を向けてきてる。

「では遠山の。任せたぞ」

「では——って、何がなんなんだッ。俺に何をしろってんだよ！」

「ジフォースと仲睦まじくするのじゃ。可愛がってやり、仲間に取り込めるようにせよ。師団の興亡この一作戦にあり。奮励努力するのじゃぞ」

ずう、とメロンジュースの残りを啜る玉藻がそんな事を言うので——

俺が祖父ちゃん仕込みのちゃぶ台返しを見せてやろうとテーブルを掴んだ時、

「トオヤマさん。私も夕方——あつ、日本では昨日の深夜になりますが、ジフォースによる襲撃の映像を拝見しました」

メーヤの甘ったるいほんわか声に、待ったをかけられた。

「接近するにも大変危険な相手であるものと思います。そこで聖騎士団に許可をいただき、まずはアリアさんとトオヤマさん宛に支援物資の作成・送付の手配をしました」

「支援物資……?」

俺はテーブルごとひっくり返す予定だったノートPCに、聞き返す。

「はい。倒すまではできなくても、身を守る程度の御役には立てるかと」

「よかったな遠山の」

「頑張れ遠山。後で経過を詳しく報告するのだぞ。何をどこまでしたとか」

「トオヤマ、後は任せた。ボクはアリアたちを看護する」

昼みかけるようなメーヤ、玉藻、ジャンヌ、ワトソンの小芝居っぽい様子を見るに……

(こ、こいつら……)

俺が来る前に、だいたいの打ち合わせをしてやがったな。

はなっからジフォースを俺に押しつけるつもりだったらしいぞ。チクシヨウ。

心底、遅刻した事が悔やまれるぜ。

これからの人生、二度と遅刻はするまい。思えば、俺がアリアに出会っただけでこんな日々を送るハメになったのも——バスに遅刻した事から始まったんだからな。

狐に化かされた、というかハメられた感じのする会議の後……

俺は仕返しに玉藻が背負う賽銭箱を玉藻ごとひっくり返し、「ご利益ないから返せ」と先日入れた10円玉を回収し、皆の「大人げない」の声を背に武偵病院へと向かった。

入院したアリア・白雪・理子・レキは——どうしてるだろう。

ハイマキの手当てをしている宗宮に『その武偵大はレキのだから、治療費はレキに請求してくれ』と電話した時『これは犬じゃなくて狼では』と言う宗宮の言葉を遮って4人の容態も確かめてみたところ、4人とも、もう意識は戻っているとの事だった。

(会議の件はともかく、まずはお見舞いしてやらないとな)

と、ももまんやカロリーメイトを適当に買って、4人の相部屋があるという武偵病院のA棟、3階にエレベーターで上がると……

ぞ……

ぞぞ……

(……………)

ぞぞぞ……

廊下の床を……ズリズリ……と、金属製のトレーが移動してるぞ。

誰もいないのに。滑るように。

普通なら腰を抜かすところだが——

悲しいかな、最近こういった不自然な光景を見慣れてしまっているかわいそうな俺は、

『そういうのもあるのか』という僅かな驚きしか感じずにそのトレーを見下ろす。

よく磨き上げた青銅製と思われるトレーは、茨や蜘蛛の彫刻で飾られており……なんかちよつと不気味だが、高い価値のあるアンティークの工芸品と思われた。

だが、その上に載っているものは、紙パックのイチゴ牛乳、ポッキー、とんがりコーン。安っ。ていうか、どれも理子の好物だぞ？

(ん……………)

その下には、トレーより微妙に大きな黒い影が丸く落ちてゐる。これまた不自然だ。

——それでなんとなくトレーの正体が読めた俺が、

「ヒルダか？」

と声を掛けると、びくうっ、とトレーが反応した。

そして……くるり、とこつちを向き(まあ、どっちが正面なのか定かではないが)……

また元の向きに戻り、あせあせ、と廊下を早めに滑って行く。

人間が小走りする程度の速度でススッと移動したトレーは、廊下の角を曲がつていく。アリアたちの部屋がそっちにあるので、俺もトレーについていくと——

案の定、いた。

ヒルダが。

階段に逃げようとして、トレー状態では階段を移動できない事に後から気づき、影から出てきて降りようとした所で……俺が来てしまった。という流れみたいだな。見たところ、階段を一段だけ下りた所に突っ立ってる。

いろいろ分からない事に、ナース服を着たヒルダは壁に背をつけ、駝鳥の羽根で作った扇を広げて顔を隠してる。トレーはピンヒールの足元に置いたままだ。

……何……やってんの？

「おい」

と、声をかけると、

「……」

聞こえてないふりをするので、

「おい、ヒルダ」

「……ど、どなたの事かしら？ 人違いではなくて？」

「そんな悪趣味な扇子を持つてるのはヒルダ、お前しかいないだろ。体はもういいのか」と言われたヒルダは、ばし、と扇を閉じた。

「——あらまあ、トオヤマ？」

いま気づいたフリするし……

「奇遇ね。こんな所で偶然会うなんて。私は今、ちょうど階段を上がってきた所よ」

なぜそんなウソをつく。

動揺を隠しているのがバレバレな澄まし顔のヒルダがこつちに振り向くと——カッソ。足元が鳴った。

白いピンヒールをはいている。

（そもそもなぜナースのカッコなのか、そこから分かんのだが……いかなだろ、ナースがハイヒール履いちや……）

と、俺がヒルダの足元に眉を寄せると——その仕草を、足元のトレーを見つけたためと

思ったらしいヒルダは、

「あら。何かしら。ぐ、偶然こんなものが落ちてるわね。トレー？」

赤くなりつつ、焦った口調でトボけた事を言う。

コイツもアリア並に発言の解説が難しい女だな。

（……）

俺は腕組みして、少し考える。

この紫電の魔女——吸血鬼・ヒルダは、先月アリア・理子・俺の3人と戦い……瀕死の重傷を負って、この武偵病院に搬送された。

一時は出血多量で危篤状態だったが、それを理子が輸血して助けてやっている。（で、このお盆に理子の好物を載せてコソコソ運んでいたところを見るに……）

今度は理子が入院したから、要は、お礼をしてるって事か？

そしてあくまでも「トレーを運んでいたのは自分ではない」という主張をしているのは、「理子にお礼をする」という行為はヒルダにとって恥ずかしい事のようにだ。

なので、ナースの変装をして（変装としては下の下だが）、こっそり行動してたというところかな。

「落ちてるも何も、お前が持ってきたんだろ？ 理子に」

とトレーを指すと、ヒルダは今それがバレたと思っただけ——

かああああ……っ！と、赤くなった。

元々が色白、というか白人（？）だから、衝撃的なぐらいお顔がピンクになったな。

「ち、ちが」

「しかも全部、理子^{りこ}の好物じゃねえか」

「——トオヤマッ！落ちているものは誰^{たれ}のものでもないわ。お前、拾いなさいッ」
ちよつと俺^{おれ}がイジつてやろうとしただけで、ヒルダは細い眉^{まゆ}を恐ろしく吊り上げる。
こんな事でまたスタンガンとか雷球をやられたら面倒なので、

「ほら。拾ってやったぞ」

俺はトレイを持ち上げて、渡そうとする。

だが、ヒルダは受け取らない。

ぶい、とソッポを向いたぞ。

「これはお前が買ってきたことにしなさい」

「なんでだよ。自分で理子に渡せばいいだろ。素直じゃねえなあ」

「いいからそうしなさい。頼めそうな下男^{げなん}がお前しかないんだから」

「いつ俺がお前の下男になったよ」

「あと、これを与えるわ」

と、ヒルダはどこから取り出した黒いゴミみたいなものをトレイに置く。



消し炭みたいなそれは、細い鉄の串にS字形に刺さってる。

「なんだこれ」

「イモリの黒焼きよ」

「キモっ！」

「——無礼者！ 竜悻公姫ドラッキュウジからの下賜を何と心得るか！」

べち！ とヒルダは扇で俺の顔面を叩いてきやがった。

「それは私が徹登てつとうして作った万能薬。理子に飲ませなさい」

「理子って言っちゃってるぞ、お前」

「はウツ……！」

長い睫毛まつげのツリ目を大きく開いたヒルダに、俺はもう溜息しか出ない。

つきあいきれん。

アリアといいワトソンといい、貴族ってヤツらは不器用でなきゃならんルールでもあるのか。

「ト、トオヤマ。カンチガイはしない事よ。私は——その、『仕方なく』やっているの。

『戦役』のルールに従い、気高き俘虜みりよとして『仕方なく』やっているいのよ。心得なさい」

「だから……理子に礼がしたいなら、直接行けって」

「まあ、いずれね」

——礼がしたいってポイントを否定しないし、その失言に気づいた様子もない。

コイツはあれだな、探偵科たんていだったらEランクだな。

いや、その下にあり通常は格付けされないというFランクだ。

「いずれって、いつだよ。何なら俺もついていってやるから、一緒に来ればいいだろ」

「だめよ。まだ……顔を合わせられないわ。本当は会って——でも、今は、まだ……」

いやいやする子供のようにな、ヒルダは首を横に振った。

縦ロールのツインテールが、アリアのでんでん太鼓システムと同じ原理で揺れる。

バネみたいな構造のせいでアリアのより長く揺れ続けるツインテールを両手で押さえた

ヒルダは、

「——ところで、バスカービルは随分とやられたようね」

キリッとした美人顔に戻って、話題を変えてきた。

「相手が誰であろうと——私を破ったお前たちが敗れることは、私の不名誉にも繋がるわ。

トオヤマ。お前、下手人をさっちり処理するのよ？」

なんともまあ、ヒルダらしい……勝手な事を言いやがるよ。

「今日は琉璃色金のせいで不調だけれども、しばらくして調子が戻った暁には——理子が傷つけられそうになったら、私を呼びなさい。その敵を串刺しの剥製はくせいにしてやるから」

そう言っただけに背を向けたヒルダは、カッン、カッン、とヒールを鳴らして階段を降り

ていく。

去り際に――

ヒルダがナース服の背中に開けた2つの穴から、小さな黒い翼が左右にピョコツと出て
いるのが見えた。理子に切られた翼が、再生しつつあるのか。

今日はハロウィンだから仮装だと思われるんだろうが――やつぱり、人間じゃないんだ
な。アイツは。

見れば、その首の後ろ側にはワトソンが付けた十字架を提げている。

十字架を提げた吸血鬼か。現実とは違うもんだぜ。

「日没から日の出まで――夜は私に任せなさい。お前のことも、まあ気が向いたら助けて
あげなくもなくてよ」

ツンデレ的な二重否定文を言い残して去っていったヒルダに、俺は溜息をつき……
階段から、廊下に戻る。

すると、階段からは死角になっていた廊下の壁際に――

(理子……っ)

額と片腕、それと太ももに包帯を巻いた理子が、寄りかかっていた。

背には、銃身を短く切ったシヨットガン、ウインチェスター・M1887を革ベルトで
片掛けしている。

こっちへ向けた横目は――裏理子の目つきだな。

「……聞いてたのか？」

「まあね」

「じゃあ、ほら。これをくれるんだとよ、ヒルダが」

と、俺はトレレーを理子に差し出す。

理子はトレレーに載せられたイチゴ牛乳やポッキーやイモリの黒焼きを一瞥して……がさ。
手でかき寄せるようにして、反対の手でたくし上げた制服のスカートの上に移した。

「で、どうすんだ理子。ヒルダは仲直りしたいみたいだぞ」

「バカ言うな。アイツはいっぺんあたしを殺してるんだ。そう簡単に許せるかよ」
と言いつつ、もらう物はもらうあたりがとつても理子らしいな。

とはいえ、まあ……戦った後に仲良くなると、そう簡単にはできないよな。分かるぞ。
今、ジョフォース問題を抱えたこの俺にはな。

だが……

「お前だって俺にH/Sやろうとしたろ。4月。ハイジャック機の中で。あの時ナイフで
弾を切れてなかったら、今ごろ俺は武偵高の殉学名簿に載ってたんだからな」

「うるさいよキンジ。あの時は、ヒスキンなら何とかできるって分かって撃ったんだ」
イチゴ牛乳のストローをガジガジ噛みながら、ご機嫌ナナメの理子は俺を睨み上げる。

ヒスキン？ ああ、ヒステリアモードのキンジツて事か。

そんな所までアダ名付けを徹底する理子は……イモリの黒焼きをヤキトリみたいに食べ、イチゴ牛乳で流し込んでる。

毒が入ってるとか、そういう疑いは持っていないんだな。

ある意味、ヒルダの気位の高さというか、その辺は信用してるっぽい。

「……ほんとにヒマな女、ヒルダ。あいつ、何度もしろいろ持ってくるんだ。こういうの。でも、姿は見せない。ヘンなヤツ」

と言いつつ……今度は、チラツと俺の方を見たな。理子。

何か言ってるのかな。

「じゃあ……まあ、しばらく冷却期間を置け」

「……」

「ただ、アイツはどうやら師団側の手駒になった事を自分でも認めたらしい。今は戦役、つまり戦争中みたいなもんだ。あんなヤツでも戦力になるなら利用した方がいいからな。仲良くしろとまでは言わんが、むやみにケンカしたりはするなよ？」

俺が玉藻の受け売りっぽい事をヤケクソ気味に言う——

理子は俺に背を向け、じゅるうー……とイチゴ牛乳を飲みきり、こく、とうなずいた。そして、くるり。びししつ。

ブリッ子全開、表理子の顔で振り返って両手で敬礼してくる。

「——そんな事よりキーくんっ！ A病棟303号室、女子部屋にご案内します！」

「切り替えたのか」

「あややも来てるよー！」

「あやや？ ……平賀さんが？ なんだだ」

「くふふふふつ。それは来てのお楽しみい！」

お楽しみ……？

なんか、イヤな予感がするぜ。

理子の『お楽しみ』が楽しかった経験は、皆無だからな。

理子に手を引かれつつ、こわごわ303号室に入った俺の目に……

「……!?」

まず、オオカミ・コンピの姿が飛び込んできた。

白いベッドに座る、オオカミ少女。と、リアルオオカミ。

ヘッドホンの上にオオカミ耳をぴよこんとつけた制服姿のレキと、素のハイマキである。半分ほど食べたカロリメイトを手に、いつもの無表情顔でこっちを見たレキは……。太ももに包帯を巻いている以外、目立った傷はなさそう。とりあえず、よかったな。

「ふおおお何度見ても可愛いよレキユ！ コスプレキユかわいいよコスプレキユ！」
舌を噛みそうなセリフを叫びつつ、理子がレキに抱きついてる。

レキが自発的にオオカミ耳をつけたとは考えにくいので……

要はこれ、理子がレキにハロウィンの仮装をさせたって事だな。

「ほらキーくん。シッポもあるんだよ！」

ぐい、と理子がレキのスカートの中からオオカミ風の付けシッポを引っ張り出し、何のリアクションもしないレキのスカートが危険な持ち上がり方をしたので――

「そつ、そんな事より何だそれは。どこから持ってきた」

俺は目を、レキのベッドにドツカリと鎮座しているゴツい狙撃銃の方に逸らした。
できればこちらからも目を逸らし続けていたかったそれは――バレットM82

イラク戦争などで使われていた、グレネードライフル長距離狙撃銃だぞ。

「装備科の平賀さんから購入しました」

「そんなゲテモノを、なんでだよ」

「昨日の敵に対抗するためです」

レキは抑揚の無い声で、無機質に言うが……

そいつは……127mm径の大型カートリッジを使う、超ハイパワーライフル。

人間なんか、弾を掠めたただけで殺せる。命中させたらバラバラになっちまうぞ。



「そいつはアンチ・マテリアル・ライフル——対物ライフルだ。対人使用は国際法で禁じられてるからな」

「……」

はい、と、言わないな。

こくり、と首を縦に振りもしないし。ただ俺の顔をジーっと見上げてくるだけだ。

……やる気だぞ、コイツ。

「くふふふー。あれ条文よく読むと、50日径禁止とは書いてないんだよキーくん」

ふたえのお目々をニヤリと細め、理子^{りこ}が余計な事を言うので……

「それ以前の問題だろ。武偵法^{ぶくしょう}9条もある。理子^{りこ}、お前の散弾銃^{さんだんじゅう}だって武偵が持つてちゃダメな代物なんだぞ。人を殺さないように撃つ事がまずできないんだから」

と、お小言を垂れると……

理子——と、レキは、ぺら。

2人揃ってA4の紙を俺に見せてきた。

「なんだこれ？」

と、顔を近づけて見ると……

公安委員会が発行する、銃器検査登録制度——通称『銃検^{じゅうけん}』の登録証だ。

……きよ、許可されている……！ どっちも。

「そ、そんなバカな。偽造^{ごぞう}だろッ？」

「——あややの仕事に抜かりはないのだ！ 不可能な事は何もない、ですのだ！」

しやあ。

ベッドのカーテンを小さな手で開けて登場したのは——装備科^{えぶい}の平賀^{へいが}さんである。

ハロウインの衣装なのだろう、カボチャ色のシャツに黒マント、カボチャ形のズボンというかパンツというかをはいている。

髪を留めるゴム紐^{ひも}にも、プラスチックのミニカボチャがついてるよ。おかワイイこって

「今日より、あやは銃検の代理申請サービスを始めましたのだ！ ふはふははっ」

……儲^もかっている時の笑い方をしたぞ。平賀さん。

たぶんそれ……法の目をかいくぐる様な申請で、ヤバい銃をお上に認可させるサービスなんだろうな。もちろん、高額で。

「とーやまくんも、ちょうど良かったのだ！ はい！ 左手用の『オロチ』ですのだ！」

ばふ、と渡されたそれを受け取った俺は——

先日、一応、巢鴨^{すうがも}の祖父母から借りた金を平賀さんに振り込んでいる。

要は借金だ。早く返さないとな。

「あ、ああ。ありがとう」

ていうか……このオロチ、今、カボチャパンツから出さなかったかい平賀さん？

「それと、とーやまくん、いいワイヤーアンカーは無いかつてあややに聞いたのだ」
 「ああ、そうだが……あったのか？」

確かに先日、俺は学食でたまたま、緒になった平賀さんにそんな話をしている。

ワトソン戦でスカイツリーから転落しかけた反省もあり、秘匿性の高い予備ワイヤーがあるなら持つておきたいと相談したのだが……

「これ、試供品ですのだ。無保証だけど、画期的アイテムなのだ！」

内側にポケットがある事を祈るが、またカボチャパンツから平賀さんが出したのは——

ジップロックつきの小さなビニール袋に入った、銃弾だぞ。ワイヤーには見えない。

「9ミリ弾に見えるんだが」

「初速は遅いですけど、そう！これは発砲して張るワイヤー、『繊維弾』ですのだ！」

「発砲して張るワイヤー……？」

「ですのだ。この弾は銃口を飛び出ると同時に滞空弾子と前進弾子に分裂するのですのだ」

滞空弾子は外気をはらむ仕掛けで、銃口近くに2秒ほど滞空するのだ。前進弾子は前方に飛んで、着弾した場所に粘着剤つきのカーボン粒子で固定されるのですのだ」

幼児みたいにジェスチャーを交えて、平賀さんが弾の構造を説明してくれる。

「……で、それがどうしてワイヤーになるんだ？」

「弾子と弾子の間には、ワイヤーの元になる複相アラミド・リキッドが挟まっていますのだ。」

このリキッドは2つの弾子の間に糸状に伸びていくのだ。ちょうど、左右の手でおもちを引く張って伸ばしていくのと同じ感じなのだ」

へえ……

つまり、発砲すると銃口から着弾点までに化学繊維のワイヤーが張られるアイテムか。

「張力は大丈夫なのか？」

「1μ秒経時で0・2t。納豆の糸ぐらい細くなってもブラドがれますのだ。リキッドは京都繊維が開発した物だけど、銃弾に仕込んだのはあややなのだ。特許申請中ですのだ」

特許まで……！しっかりしてるなあ。平賀さん。

将来は大富豪になるかもな。この人。

「タイミング練習用に、後で何発か撃つてみるといいですのだ。滞空弾子には感圧発光塗料がついてるから、銃口の前に現れる青い光を掴むようにするといいのだ。距離は25m以内の使用を推奨するのだ。50m以上延ばすと、切れちゃうかもなののだ」

などと大ざっぱな取扱説明をしてくれた平賀さんの横から——

「あつ、キンちゃん……！！」

「し、白雪？」

今度は天使のコスプレ——ただし、ヘソ出し衣装の——をした、白雪が出てきた。

航空力学的にどう考えても飛べないミニ翼を背中につけ、縁にふわふわした飾りのある

ミニスカートの上、チューブトップからこぼれ出そうな胸だけがミニではない。

いつもの白リボンの上に、金色をした天使の輪を針金でアホっぽく増設しているが……な、なんちゅうカッコだ。

そんな色っぽい天使が天国にいてたまるか。いるとしたら地獄だぞ。俺にとつちや。へソ出しスタイルの白雪は、いかにも恥じらう乙女という仕事で、

「あ、あのね、このハロウィンの衣装はね、理子ちゃんみんなにそれぞれ、ね——」ナイロンの布地をばつばつにする、むっちりした両胸を……

持っていた銃で隠した。

（いや、先に隠すべきは胸じゃないだろ……！ いや、胸も隠して欲しいが……！）

と、白雪と己自身にツッコむべき俺の口は——

久しぶりにお目見えした、白雪の下でかい持ち銃——M60マシンガンを前に、絶句するM60——それは米陸軍が大好きな、汎用機関銃。

UZIなどの短機関銃とは呼び方が似てるだけで遥かに強力な、戦争用の銃だぞッ。

時代遅れなので欠陥はあれど、ベトナム戦争じゃ歩兵はもちろん、ヘリにもドアガンとして搭載されてたりした……この世で最も多く人の生き血を吸った機関銃の一つだ。

俺は「ゆきちゃんマジ天使！」とか言いつつケータイで写真をパシャパシャ撮る理子を押し退けつつ、



「白雪、お前それ、使うなって言つたら！ 違法なんだから！」

「でも、平賀さんが銃検取ってくれたし……イロカネアヤメ、取られちゃったし……」

白雪は機関銃で顔の下半分を隠し、目だけで『だって、だって』という感じだ。そこまでは、見ようによっては可愛かったのだが……

「……それに……あんの小娘エ……」

ギロツ！ と、我が目を疑ってしまふほど瞬時に——白雪の両眼が、三日月刀のように鋭角化した。な、なんちゆう目だ。声も一オクターブぐらい低くなつたし。

「こ、小娘？ えつと、お前を襲つたアイツ……あの、ジーフォースの事か」

「——あの子、おかしいんだもん！ 私と戦つた時……自分こそがキンちゃんとして一番近い存在だ、とか言つたんだもん！ おかしいね、おかしいよね、キンちゃん。うふ、ふふ、うふふふ。おかしいねエ」

白雪は光を失つた瞳で、機関銃を抱いたままカラカラ笑つてゐる。

ど、どういう天使だよこれ。おかしいのはこっちの方だろ。

「ねえレキ、白雪、理子、見て見て、はむう。さっきの航空便、『バステル』よ」

などと、ももまんを啜えたり食べたりしながら……

今度は、アゲハ蝶っぽいシースルーの羽を背に付けた——アリアが現れた。

「——って、キンジ？ な、何よ、来るなら来るって事前に連絡しなさいよっ」

俺と目が合ったアリアは、わたた、とワンピースの胸元を引っ張り上げてる。どうやら妖精のコスプレをさせられてるらしい。デイズニーのティンカーベルっぽい、バレイ衣装みたいなワンピースはピンク色。色を髪と合わせて用意したんだな。理子が。

まるで幼稚園のお遊戯みたいで、チビッチアリアに似合つてはいるのだが……

（……病院でも、やつぱり帯銃してやがる）
短いスカートのギザギザにカノトされた裾からは——大型拳銃が銃モロ（スカート内の

銃がモロに見えてしまつてゐること）してゐる。妖精仲間も小石とかドングリを投げこんな戦闘妖精、デイズニーも出禁にするだろう。妖精仲間も小石とかドングリを投げ

つけてくるだろうな。

なお、この妖精さん、お胸が普段よりそれはそれはなだらかで平出なご様子である。

このワンピースには肩紐が無いから、いつもの寄せて上げる偽装ブラが使えないんだな。

（にしても……まあ……）

どいつもこいつも、理子と同室になつたのが運の尽きつてことか。

ハロウィンにかこつけて、理子がみんなを着せ替え人形にしてるわけだ。

当の理子の場所と思われるベッドには、シヨットガンの実包が詰まった紙箱の横に……朝から何度も着替えたのか、オバケやら魔法少女やらの衣装が散乱していた。

本人はもう飽きちゃったんだな、ハロウィン。1人だけ制服姿だし。自由なヤツだ。

「お前も元氣そうだな、アリア。心配して損したとは言わんが、心配、3割引きぐらいに
しときゃ良かったぜ」

「なによそれ。あんたそんなに器用じゃないでしょ」

あ。アリア、今、さりげなく腕組みして胸を隠した。

「ところで……キンジ、『カクテル』届いた？ こっちは『バステル』ってセット名よ」

「カクテル？ バステル？ 何の話だ……？」

眉を寄せた俺に、アリアはクレヨンのケースみたいな箱を見せてくる。

「武偵弾倉よ。さつきバチカンから、お見舞の手紙付きで届いたの。あんたのは9ミリ弾だから、小さくて細工に時間がかかるのかもね」

と、アリアが開いたケースには……

本物のバステルみたいに色とりどりの着色をされた、45ACP弾が並んでいる

バチカンの国章の一部、「聖ペトロの鍵」のマークと並んだイタリア語は読めないが、
国際基準として義務づけられた刻印から分かる。これは——全弾、D・A・L、武偵弾だ。

武偵弾とは、拳銃弾に多様な機能を持たせた強化弾・特殊弾。

弾を見せてもらおうと——俺もイ・ウでシャーロックに使った、炸裂弾——その他にも
徹甲弾、破砕弾、飛散弾などの必殺兵器がズラリと並んでる。レキがココとの戦いで使用
した閃光弾、音響弾の45ACP版、煙幕弾、焼夷弾といった間接兵器も揃ってるぞ。

この「バステル」とは——要は、武偵弾の詰め合わせらしい。

さつきメーヤが言ってた支援物資とは、これのことだったのか。

まったく。入院患者にあげる詰め合わせはお菓子とかフルーツであるべきだろ。実弾の
詰め合わせって。

「イタリアの銃弾職人は腕がいいのだー。いっぺん留学したいのだあー」

などと、装備科の平賀さんが武偵弾をいじくってるが……

たしか、バカ高いんだよな。武偵弾って。

そんなもんを、ボンと送ってくるとは。金あるんだなあ、カトリック教会は、

「……ていうかお前ら。武装を強化したり、銃検取ったり……病院でなにやってんだよ。

ちゃんと養生しろ」

と、俺が一同に言う——

「これは強化合宿よ。やられっぱなしってワケにはいかないでしょ」

「キンちゃんが一番近い存在は私なのっ。あんな女はダメ。ダメ、絶対！」

「くふふふ。こういう女子会、面白くてさあー。理子ワクテカシちゃう」

「武偵は1発撃たれたら、1発撃ち返すものだから」

アリア・白雪・理子・レキ、それぞれの返答を総合するに……

要は、ジーフォースにこっぴどくやられたから——負けず嫌いのアリアが指揮を執り、

白雪は謎の私怨しよんにかられ、理子りこはノリで、レキはプロ意識から――

4人で、報復攻撃の準備をしてるってワケか。

(マズいな……)

俺の意思はともかく――師団しだんでは、ジーサード・ジーフォースを仲間に取り入れる事を議決ぎけつしている。

だがこの4人は、戦おうとしているのだ。思いつきり。

「キンジ、あんたも手を貸しなさい。あたしはもう一つ、平賀ひらがさんにバックバック方式のロケットブースターを――」

「ああもう……おいアリア、ちょっと来い」

ちよつと踏み込んだ話になりそうだったので――

俺はバスカービルの副リーダーこと妖精さんの羽を引つ張り、奥まったベッドの方へと引つ張り込む。

シャツ、と俺がベッドの周囲にあるカーテンを閉ざすと、

「な、な、なによつ。なにをするつもりつ、みんなもいるのよッ?」

アリアは意味不明な事を言いながら、なぜか慌てるな。

「アリア……ジーフォースにやられて悔しいのは分かるし、俺もできるもんなら逮捕してやりたいよ。だが、今回は相手が強すぎる。だからさつきジャンヌやワトソンと……」

「キンジ。敵が強い事は知ってるわ。だからこそその強化合宿なのよ」

と、アリアはベッドをハイハイするように移動して、隣……恐らく自分のベッド……にカーテンの間から手を伸ばし、何かの手紙を取ってきた。

(……っ……!)

い、今、アリアが……こつちにオシリを向けて這はつてた時……

ティンカーベルの設定に忠実な、超ミニスカートの……中。

ピンク色のブルマーみたいなのが、丸見えだったんだが。

しかしスカートと同色だったため、俺の脳はそれを下着ではなく衣装の一部と認識してくれたらしい。アリアもそう思ってる動きだったしな。血流的には大丈夫そうだ。

しかし、あー……クソッ。かわいいな。見た目だけは。本当ほんとうに。コイツ。

「ほら。バチカンからの手紙。イタリヤ語だけど、ここ――『遠山とやまキンジにもカクテルというセツト名で武偵弾倉ぶていだんぐらを送る』って書いてあるわ。もうじき来るだろうけど、あんた、オケラだからって転売しちゃダメよ?」

「し、しねえよ」

「なんで目を逸らすの。ちゃんとあたしの目を見て言いなさい」

「――そんな事よりなつ。バスカービルのリーダーとして言うが、ジーサード達たちとはもう戦うな。なんで極東戦役ごくとうせんぎに首を突つ込んできたのかは分かるが、まだヤツらは師団でも



眷属でもないんだ。だから、これはさつき玉藻たちと決めた事だが——ジーサードとジーフォースは『師団』、味方に引き入れるぞ」

「——なに言ってるのよ!? あたしたちは、あの女にいきなり襲われたのよ!」

がうつ! と犬歯を剥いて立ち上がったアリアは、火が付いたように地団駄を踏む。

ばっさばっさ!

と、アゲハ蝶みたいな羽が連動して羽ばたいてる。アリアアゲハ、荒ぶる! って感じだ。

「アイツらは敵よ! これは確定的に明らか! 風穴開けてやらなきゃ気が済まないわ!

それを味方とか、バカ! バカ! どこまでバカなのバカキンジは! ざいー!」

「お、おいつ! 痛っ、たっ、叩くな! すぐ暴力に訴えるな!」

がうがうがう! ばっさばっさばさ! ばかばこばかばこばかばこ!

羽ばたきつつハンマーパンチを連打してくるアリアから逃れようとした俺が、ベッドの

下に転げ落ちた時——

「うひゃっ!?」「きゃあ!」

カーテンの向こうにいる理子と白雪が、同時に驚愕するような声を上げた。

何か、ただ事ではない雰囲気だったので——

「——?」

俺とアリアもカーテンの内側から出て、303号室の中を見渡す。

すると、その入口に――

うおッ……………!

「ジーフォース……………」

あの女が、いる……………」

当然のように武偵高のセーラー服を着ているジーフォースは、プロテクターやアンダーウェアを着ていたイメーじとはガラッと変わり――

まるつきり、普通の女子中学生に見える。今は。

「おーおー! 飛んで火に入る夏の虫だ! やつちやおうよ、ゆきちゃん、レキユ!」

「そうだねっ。キンちゃん、下がって。跳弾とか、危ないから」

「……………」

ジャキッ、ジャキッ、ジャキッ!

理子がショットガンを、白雪がマシンガンを、レキがスナイパーライフルを――

ジーフォースめがけて、三方向から、斉に構える。

「なっ、なな何ですのっだあ? 撃ち合いはあややのいない所でやってほしいのっだあ」

ベッドの下に避難して涙声を出す平賀さんと――お、俺も同じ意見だ。

一方のジーフォースは――

まるで自分に向けられた銃口が見えていないかのように、花咲くような笑顔を見せた。

――俺に、向けて。

その表情が、その場の殺気を消し飛ばすほどに愛らしい。

まるで周囲がバツと明るくなるような、屈託の無い、純粹そのものといった感じの――見るだけで周囲の人間から戦意を、いや、心そのものを奪ってしまうような笑顔。

アリアですら銃を抜く事をためらうようなムードのジーフォースは、無邪気な少女そのものといった様子で、とことこ、と歩いてくる。

――俺の、方へ。

「やっと思つた。お兄ちゃん。もう行こうよう。おなかすいた」

そして、ぎゅ。

俺の腕を抱いて、その体を思いつきりくつつけてきた。

まるで仲の良い兄妹や、恋人のように。

「き、キーくん? どーゆーこと……………」 お兄ちゃんって……………」

「ま、まさか、キ、キキンちゃんの――キ、いも、キモうと、いもうと、妹、さん?」
理子と白雪があんぐりと口を開けて言うが、一番開いた口がふさがらないのは俺だ。

「ちッ、違う! 俺には妹なんかいないッ! コイツが昨日から勝手に――」

否認する俺の腕を、ジーフォースが自分の胸に強く抱き寄せる。

(うおッ……………!?)

柔らかいゴム鞆に腕を挟まれたような感覚にこっちが慌てた、その一瞬の隙に——素早く俺の前方に回ったジーフォースが——

「——!?」

その時、自分の身に何が起こったのか、理解できるまでに数秒かかった。

今、俺の口にはほんの一瞬、何か花弁のようなものが触れたのだ。

栗色をしたジーフォースのボブカットの髪から、ふわ。

俺の鼻腔に、甘い、キャラメルみたいな香りが忍び込んでくる——

「——これがキスカあ。でも、このぐらいじゃダメか」

俺の口から唇を離れたジーフォースが、呟く。

(……ッ……!)

みゃー! というアリアのアニメ声。

ひいひい! という白雪の悲鳴。

ふおおおっ! という理子の興奮したような息の音。

レキ……の隣ではハイマキがグオツと驚いたように小さく吼えた。

それらの音の中で——

(ど、どういう事だ……!?)

俺は、驚いていた。今ジーフォースにされた事に、だけではない。

自分の、普段と変わらないこの血流に——驚かずにはいられなかったのだ。

今のは、ヒステリアモード確定の行為だろう。

過去、アリアでも、白雪でも、理子でも、レキでもなかった。

だが、この少女との接触では——

ならなかったのだ。俺は。ヒステリアモードに。

こんな、宝石のような美少女と……してしまったというのに。

「どうりで……さつきから敵に対して友好的なことを言うと思ったわ……」

……ガルルルルル……

毎度おなじみの仔ライオンみたいな威嚇音に、俺は——恐る恐る、振り返る。

「——キンジ—— あんた、裏切ったわね!」

「……はっ……?」

ジーフォースを腕に抱きつかせたまま、慌てて周囲を見れば——

赤面済みのアリアは赤紫色の目を吊り上げ、ピンクのツインテールを震わせている。

白雪は消滅したかのもと思いきや白い床と保護色になる形で倒れて失神しており、理子はニヤニヤしてるものの苦笑い。そしてレキの目のなんと冷たいことか。

「その女が本当に妹かどうかは別として、それはあんたが敵に寝返るアキレス腱だわ!」
妖精から赤鬼へと変化したアリアが拳銃を抜き、銃口で俺を指す。

「な、なんだよアキレス腫^はって！」

「——女よ！ あ、あんたッ、そ、そそ、その子とそういうので、あれになって、それで寝返ったのね！」

むぎいー！

と、アリアは指が代名詞だらけで意味不明なセリフを喚^よきながら、激怒している。

もう……ジーフォースと俺^{おれ}を、まとめて敵認定したようなムードだぞ……！

「いやーキーくうん……それはガチで無双すぎー。敵とチューとかぶんぶんがおーだし、妹ちゃんとしようとか、sneg？ さすがの理子^{りこ}も、今のはちよつと引いたなあー」

理子は両手の人差し指で頭にツノを作ってふざけるものの、額に汗を滲^{しみ}ませている。

お色気関連では大抵のことを許容する理子でさえ、このリアクションとは……今のこれ、

『妹を名乗る女子とのキス』は、バスカービルの中で既に地に落ちていたと思われる俺の評価^{ひや}がさらに地中に潜り込むぐらいの出来事だったらしいぞ。

これはもう……俺が何を話しても、アリアも理子も100%聞く耳を持たないだろう。

そう思った俺は、助けを求めるように——

「おいレキ！ アリア達^{たち}に言^いって聞かせてやってくれ、いま俺はコイツにムリヤリ——」

「よく分かりませんが、今キンジさんとは話したくありません」

あ、あのレキが……！

ついに人間性を発揮したぞ、こんな所で。

よりによって、なんでこのタイミングで……！

「……ッ……」

アリア、理子、レキ、あとよく見たら倒れたまま前髪^{まへがみ}の間にのぞく目をカッ開いていた白雪^{しろゆき}までもが、ジーフォース——と、俺を、ギロギロ見て殺気を放^{はな}ってきている。

気のせいと思いたい……み、皆さんの銃口——

微妙に、俺の方へスライドしてきてませんか……？

(あ、ありえんッ……！)

このままここにいたら、蜂^{はち}の巣にされかねんぞ。ジーフォースごと。

「こ、この件は後で話す！」

テンパった俺はそう叫びながら、ジーフォースの背中を押して病室から逃走を図る。

病室の扉を出た、まさにその時——くるっ。

ジーフォースが、バスカービルの女子たちに振り返った。

その顔が——俺に向けていた笑顔とは180度真逆の、もののすごいイヤミだったらしい表情になっている。

「おい。チビ、カマトト、ブリッコ、ダンマリ。お前らが今まで、どんだけお兄ちゃんとラブコメしてたか知らないけどな」

俺が怒ってる時と似た口調の男喋りで、アリアたちに切り出したジーフォースは——
「妹は最強なんだ。お兄ちゃんと妹の間には、誰も入れない！ 兄妹の繋がり、絶対の繋がり。他の女とは違うんだッ！」

薙ぎ払うように手を振り、キツうーく言い放つ。

……はい……？

と思う俺と同様、アリアたちも絶句してる。

「さっき、お兄ちゃんの部屋を調べたけどな」

「おい、いつの間に——」

「お前たちの私物がいろいろあった。あたしは嗅覚が鋭いから、ニオイで分かるんだ」

二、ニオイって、警察犬かよ。

「お前ら……お兄ちゃんの部屋に住んでたんだろ！ 家に家族でもない女がいるなんて、ありえない。家においていいのは家族だけだ。だから——二度と来るな！ お兄ちゃんは、あたしが真人間にするッ！」

叫んだジーフォースは、がんつ！

303号室のドアを歪むほどの勢いで蹴り、閉めてしまふのであった。

ありえん。そんなワケがない。

これは断言できるしするのバカバカしいが、ジーフォースは、俺の妹では、ないッ。
まずジーフォースと俺は髪の色が違う。探偵科では1年でも習う判断法だが、こいつの栗色の髪が地毛であることは、眉や睫毛を見ればすぐ分かる。

肌の色も俺に比べて薄い。瞳も一見すると黒だが、よく見れば青みがかった。顔付きだつて俺よりずっと端正だ。

（それを……アリアたちめ……）

揃いも揃って、なんちゅう単純さだ。

ジーフォースの妄言をコロツと信じやがつて。

しかも、いつも通り俺の話には聞く耳持たずときた。

（……これだから、女ってヤツは……）

俺の中で「女子」そのものに対する苛立ちが——

古い記憶と共に、腹の底から湧いてくる。

中学時代、俺は女子にヒステリアモードの体質を悟られ、利用されていた時期がある。その時も、通常モードの俺が反抗的な態度を取ると……ヤツらはああいうふうに集団で俺を糾弾してきたものだ。

女子は男子より、何かあるとすぐ集団ヒステリーみたいな状態になりやすい。そして、俺を集中攻撃する手に出やすいのだ。経験上。

女性差別と言われようと、俺は実際その被害者だからな。

加えて——そういう経験を持つ俺が、努めて無視しているせいもあるが——武偵高でも女子はよく俺の陰口を叩いてるんだ。ネクラだの、昼行灯だの、たらしだのってな。

俺は……女子にハメられたり、嫌われたりしやすいパーソナリティーなのかもしれない。いや、そうなんだろう。裏付けとなるイヤな体験が腐るほどあるしな。

「——で、なんでついてくるんだ」

武偵病院から男子寮に帰るため、バス停に向かったところ——

これもまた女子であるジフフォースは、当たり前のように俺についてきている。

「だって、妹だもん」

そしてまた、俺の腕に腕を絡ませようとしてきた。

「お前なんか妹じゃねえッ！」

俺がそれを乱暴に振り払うと、ジフフォースは——「なんで？　なんでなの？」という心底傷ついたような目をして……

今度はビクビクした手つきで、そーっ……と……手を繋ごうとしてきた

パシッ、と俺がそれを手の甲で叩いて拒むと、ジフフォースは計算間違いをした子供のような顔になって、

「お兄ちゃん、どうして怒ってるの？　元氣出して。フレ、フレ、お兄ちゃんっ」

あせあせ、と俺を励ましてきた。

最後は俺の袖を振り、健気な笑顔（けんげ）をムリヤリ作って応援までしてきたぞ。な、何なんだよコイツは。

「お前なあ。自分であれだけの事をやっというて、『どうして怒ってるの』はないだろ」「やっというて……？　何を……？」

「自覚がないのかよ。バスカービルの女子をボコったり、あんなふうに宣戦布告する様なマネをしたりだ。お前が妹を自称したりするから、俺までアイツらからハブられたんだぞ。リーダーなのに、1人だけ孤立しちまったじゃねえか」

「お兄ちゃんは一人居やないよ。これからはあたしがお兄ちゃんとずっと一緒にいるから。誰よりも、近くにいるから。だって妹だもん。家族だもん。だから、さびしくないよ」などと言うジフフォースは、愛くるしい顔で俺を見上げてくる。

さっきアリアたちに向けていたエグい顔が目の錯覚だったように思えるほど、無邪気なベビーフェイスだ。

「さびしいとかそういう事を言ってるじゃねえよッ。アリアは誤解したらすぐ暴走するし、白雪（しらゆき）もよく分からんきつかけでいきなり暴れる癖がある。理子（りこ）はケンカ祭りに喜んで参加するし、レキだって独特な物の解釈の仕方をするんだ。そういう連中を、氣に敵に回して、これからどうするんだって話だよ」

俺に文句を垂れられたジーフォースは……
がーん。

という音が聞こえてきそうなくらい、えらくショックを受けた顔になった。

「……お兄ちゃん、ちょっと待ってて」

そして、くるっ。スカートを翻して、病院の方を向く。

イヤな予感がした俺は、その意外とほっそりした手首を掴んで引き止めた。

「おい。なんで病院に戻ろうとするんだ」

「お兄ちゃんが、あいつらの話をするから。あいつらがいると、お兄ちゃんはいづらの事ばかり考えるんだ。だから、やっぱり殺してくる。全部。5分だけ待ってて」

「こ、殺すって——何言ってるんだお前ッ」

——ぐいッ！と引つ張ってこつちを向かせる——

「だって！」

ジーフォースは、その大きな瞳から……涙を、こぼした。

「……!?」

泣きマネじゃない。

本当に——どうしてか、悔し泣きしているのだ。コイツは。アリアたちに対して：「お兄ちゃんがあいつらの話、するんだもん！ あいつらさえいなくなれば、お兄ちゃん

はあたしに振り向いてくれるハズなんだもん！」

——ッ……！

ホントに、なんなんだよ……コイツは……！

「お兄ちゃんが優しいから——あんなヤツらにも、愛をあげてるから！ だからあたしが愛されないんだ！ だからそれを無くしちゃえば、あたしだけが愛されるはずなの！」

ジーフォースはマジ泣きし続けながら、子供っぽい金切り声を上げる。

俺はその腕を引つ張り寄せながら、肩をつり上げた。

「そもそも俺は、お前の兄貴なんかじゃねえって言ってるだろ！」

「ちがうもん、お兄ちゃんはお兄ちゃんだもん！」

だ、ダメだ。

話を通じる相手じゃないぞ、コイツ。

「だからお兄ちゃんはあたしと、一緒に暮らして、あたしだけを愛さなきゃいけないの！ そうしなきゃ——バスカーピルの女どもを、また襲ってやるから！」

「ッ……！！」

な、なんてヤバイ女なんだ。アリア以上のヤバさだぞ。どうかしてるレベルだ。これを野放しにはできん。

「——よせて！ あいつらの所には金輪際行くな！」

俺は他人に対しては基本、それほど熱くならない性格なのだが——
 近くのコンビニの窓に映る自分自身の顔が、激しい怒りの表情になっていた。
 まるで昔、兄さんが俺を叱った時のように。

「……」

ジーフォースは……

むううううー、と頬を膨らまし、涙目でこつちを見上げている。

「じゃあ、そのかわり……1つだけ、いい？」

「……なんだよ」

「お兄ちゃんについていっても、いい？」

改めてそう言ってくるので、

「……勝手にしやがれ……！」

と言われたジーフォースは、ぐじぐじ、と自分の涙を手の甲で拭った。
 そして、ばあ、と笑顔を上げてくる。

これがまた、少女漫画のキャラみたいにかわいらしい。周囲にお花が咲いたような感じだ。

「——もう1ついい？」

「1つだけつつたら、お前」

と言うとまた病院の方に振り返ろうとするので、

「分かった、分かった。何だよ。もう1つつて」

「キャラメル買って」

……は？

という顔をする俺がまだ掴んだままのジーフォースの手が、コンビニを指す。

殺す殺さないから急に話のスケールが小さくなったので、拍子抜けしてしまいつつ……

俺はそんな事でアリアたちの命が救えるならと、ジーフォースを連れてコンビニに入り、

ミルクキャラメルを買ってやった。

「……ほれ」

ファミマのシールが貼られたキャラメルを差し出すと……

ジーフォースはエサをもらったネコみたい、すぐさまそれを受け取った。

ぺりぺりとビニールを取って、集中した指付きで1粒取り出し、包装紙を爪でカリカリ

やって開く仕草は……まるで、子供みたいだな。

いや、実際子供なんだろう。どう見ても2、3歳年下だしな。

「はい。お兄ちゃんにも1個あげる」

と、屈託のない微笑みで1粒くれるから……

俺も別に今食べたくもないキャラメルを食いながら、到着したバスに乗る。

他の生徒も大勢乗っているの、警戒しつつもジーフォースの手首を放すが——病院の

方に走ったりはしないな。俺が条件を呑んだから、言うことを聞いているのか。
(分かんねえヤツだな……)

と、振り返る俺の後ろから……どうやらバスに乗ったことがないらしいキヨドリ方で、
ジフオースもオロオロとついてくるのだった。

バスは微妙に混んでいて、俺とジフオースはつり革を手にバスに揺られていく。
なぜかジフオースが男子生徒を避けるように車内を移動したので、俺たちは出口ドア
付近、女子が集まっている所に立たざるを得なくなっている。

で、車内の、生徒たちが……うう……

見てるぞ。明らかに。ジフオースを。

それはまあ……分からなくもない。ジフオースは武偵高のセーラー服を着てる。

中学生っぽいとはいえ、こんな美少女がいたのに今まで誰も知らなかった……となると、
注目の的になるのは仕方ないだろう。

問題は、それを連れてるのが俺だということだ。

聞こえるぞ。運悪く乗ってやがった2年の女子——鷹根、早川、安根崎——俺の悪評を
迅速かつ広範囲にアナウンスする事でお馴染みの通信科トリオが……「また『たらし』が
女を変えた」「今度は中学生……」「やっぱり例の疑惑、本当っぽいね」などとヒソヒソ話し

てるのが。お前らはんと仲良いな。あと例の疑惑って何だ。

「おい、ジフオース」

俺が超小声で囁くと、ジフオースは「？」と首を傾げて形のいい耳を上げた。

「お前、なんで武偵高の制服着てるんだ。みんな転人生か何かだと思ってるじゃねえか」

「だって、バスカールの女たちがみんなこの服を着てたから……お兄ちゃん、この服が
好きなのかなー、って思ったの」

にこ、とこっちを見上げてきたジフオースは、

「そうか。転人生……かあ。それっていいアイデアだよ、お兄ちゃん。うん、そうしよう。

あたしもこの学校に通おう。お兄ちゃんの妹として、ちゃんと日本の文化を学ばなきゃ」

さらに、そんな事を言ってきた。

雉も鳴かずば打たれまい——余計な事を言っちゃったみたいだな。転人生とか。

きつとコイツは本当に入ってくるぞ。どうやってかまでは分からないが、行動力があり
そうだからな。

ざわ……

(……ん?)

ざわ……ざわ……

と、バスの中に小さなざわめきが起こってる。

「お兄ちゃん……?」「お兄ちゃんって言った」「キンジの妹がこんなに可愛いワケがない」「わけがわからないよ」「でも、確かに今、お兄ちゃんって」「妹なの?」

マズい……この……愚民ども……!!

授業とかはろくすっぽ聞いてないくせに、なんでこういう話はちゃんと聞いてんだよ! 「お、おい。みんな聞け。これはだな、その、事情があつてだな……」

などと俺がまごついていると、

「——あ、あなた、妹さんの? 遠山君の」

などと俺をスルーで、通信科の鷹根がジーフォースに突撃レポートを敢行してしまふ。

「はい。妹です」

にここに。

楚々とした笑顔で、ジーフォースが……

(言っちゃったよ……!!)

ええ——っ!!

と、車内は大混乱になる。

どいつもこいつも席を立てて、こっちに押しかけてくるぞ。

「おいッ、押すな……!!」

俺はジーフォースを隠すように、ドアに手を突いてその華奢な体を守る。

その俺の動作に一瞬、キュンとしたような目でこっちを見上げたジーフォースが……

「ど、どうしたんですか皆さん? あたしはただの、妹なんですけど」

キョトンとしてわざとらしく「妹」などと繰り返すものだから、車両後方の女子たちが

お祭り騒ぎを始めた。男子たちも前の方で盛り上がりつつ、カシヤ、ピロリ、ポポポポーン。

写メを撮りまくってやがるぞ。

鷹根たち通信科トリオも、目を爛々と輝かせて囲み取材モードだ。

「何歳なの?」「14歳です。お兄ちゃんより2つ下です」「キンジの妹なのに可愛い!」

「私のお兄ちゃんもカッコイイですよ」「色白! ハーフみたい!」「50%のデオキシリボ

核酸がコーカソイドですから」「……? えっと、趣味は?」「MLB観戦です」「好きな

言葉は?」「背徳です」

ていうかジーフォース、公共の場では敬語なのか。猫かぶりやがって。

しかし……これはある意味、先手を打たれたぞ。

遠山キンジには、妹がいる。

そういうことに、されちゃったのだ。この一瞬で。

ジーフォースも、そのつもりなんだろう。さりげなく回答の端々に『お兄ちゃん』とか

『妹』とかいう単語をこまめに交えてやがるし。

「——お名前は?」

と、女子の1人が聞いて――

「遠山じーふおもこ」

言いかけたジーフォースの口を、俺は慌てて手で塞ぐ。

――バカ！

『遠山ジーフォース』なんておかしいだろッ！ 百歩譲っても『ジーフォース遠山』だ。

いやいや。姓名の順番の問題じゃない。兄が100%日本人の名前なのに、妹が横文字の名前って事になったら――ただでさえ説明できない現状が、より説明不能になっちゃう！

「遠山君！ なんて妹さんに名乗らせてあげないの!？」

「そうだよキンジ！ 名前！ 妹ちゃんの名前は何なのッ!」

「壁新聞にも書くんだから、ちゃんと聞かせてよ!」

民衆が一揆を起こしそうなので、俺はヒステリアモードでもない頭をフル回転させる。

「こ、こ、コイツの名前は……ッ……」

何か、俺の妹らしい名前を考えないと――!

遠山兄弟は金一、金次。だから金の字を入れれば自然だろう。金子か。いや、おかしい。100年前のネーミングセンスだぞそれは。もつと考えるキンジ。

他の読み方――金。そうだ、訓読みする手法でいこう。でもカナじゃ兄さんだ。カナに何か文字を足す。だが何を？ ええつと――コイツは女だから、『女』でどうだ。

――金女――

よし。これならなんとか人名に読める!

「こ、こいつは――遠山かなめ、だッ」

「えっ?」

ジーフォースがこつちを振り仰いでくるので、俺はそのビックリ顔も手で隠す。

「遠山かなめ!」「かなめちゃん!」「かわいい!」「かなめ!」「かなめ!」「かなめ!」

かなめコールが続く、学園島巡回バスの中で――

俺の視界が、ぐにゃあ、と歪んでいく。

ど……どうなっちゃうんだよ、これ……!

逃げるように次のバス停で降りると――そこは車輻輳の立体駐車場前だった。

周囲を見回すと、人はいない。

いや、1人いた。強襲料の大柄な後輩が1人、リボルバー銃――S&WのM……29か

329か629かは遠目には分からないが――を持ったまま、ベンチでイビキをかいてる。

泥で汚れてる所を見ると……どうもケンカに負けてもして、横になって回復を図ってる内に寝ちまったらしいな。マグナム弾を使う銃をホルスターにも入れず、不用心なヤツだ。

だが……まあ、寝てるから話を聞かれる事もないだろう。

そう判断した俺は、ジーフォースをこっちに正対させる。

「お前、どういうつもりだ。さっきのでアイツらは、てつきり——」

と、お説教を始めたところで、ぎゅ

ジーフォースが、今度は……抱きついてきた。

——年下の少女特有の、甘い香り。俺の体に密着した、未成熟な胸の柔らかさ、嗅覚と触覚の2方向から攻められた俺が、たじろぐと——

「……かなめ……あたしは、かなめ……」

俺の胸に顔を埋めたジーフォースは……また、涙声だ。

それもさっきのような怒りからではなく、今度は嬉し泣きしてるらしい。感情の起伏が激しい子のようなだ。

「かなめ……って、名前だよな？ 人間の名前だよな？」

「あ、当たり前だろ。お前が、名前を付けざるを得ない状況に——」

「あたしの名前……お兄ちゃんがつけてくれた、名前。嬉しい……うれしいよ……ぐすつ

……ふえ……」

「な、何だ。何で泣くんだよ」

「うれしいから」

「何が嬉しいんだ」

「名前。人間の名前。今まで、無かったから。お兄ちゃんは……あたしに名前をくれた。

あたしを初めて、人間扱いしてくれた。よかった……よかった……ずっと夢見てた通り

……あたしのお兄ちゃんは……やっぱり、とっても優しい人だったんだね……」

「おい……」

……ジーフォース、と続けようとした俺の声が——続かない。

そう呼んではいけないような、気が……

なんとなく、してしまふ。

(クソッ、どういう事だよ……)

ざわつく心を抑えるように、俺は頭を左右に振った。

何を、泣かれたぐらいで情にほだされそうになってんだ俺は。

女の涙が……なんだッ。それで何度も面倒な事になってんだろ、今まで

コイツが泣こうと喚こうと、俺は認めないぞ。

こんなヤツ、妹なんかじゃねえ。

「お、俺が名前を付けたのは……アイツらの手前、そうしただけだッ」

いないんだ。俺には。妹なんか。

「お前なんか妹じゃない。俺は——」

「——うん。いいよ。お兄ちゃんは、すぐには認めてくれないんだ。それは、今まで……」

何度も否定されて、よく分かったから」

涙に潤む大きな目を俺に向けたジフォースは、声をしゃくり上げさせつつ……

今の俺の言葉に傷ついたのか、眉尻を悲しげに下げ……

それでも、けなげに、微笑んだ。

まるで『あたしには何を言っても構わないから、嫌わないで』と懇願するかのよう。

「あ、いや……」

なぜだ。コイツは危険なヤツだって分かってるのに……俺は……

なぜか、冷たくしきれない。

こいつがあどけない、年下の少女だからだろうか。

本気では、傷つける事をしちゃ……いけない。そんな気がしちゃう

「でも、お願い。今は1つだけでいいから、お願いを聞いて」

「……何だよ……」

「これからは『かなめ』って呼んで。もう製品名では呼ばないで……お兄ちゃんと、一緒にいる時だけでもいいから」

いや……まあ……

さっきの一件で、『かなめ』という名前は学校中に知れ渡っちゃうだろう。

それを俺だけ『ジフォース』と呼んでたら、逆に面倒な事になるかもしれないしな。

「ああ……わ、分かった」

「……!!」

ジフォース——かなめは、俺が1つそれを受け入れたただけで……

幸せいつばいの表情で俺を見つめて、全身を震わている。

そして嬉しさを噛みしめるように俺の胸をグリグリと押しつけ、

「お兄ちゃん。かなめだよ、あたしは、かなめ——かなめ、かなめだよ」

涙声で、自分の名前を繰り返して名乗ってる。

そんなに、嬉しいのかよ……俺が5秒やそこらで考えた名前なのに。

……だったら、もう少し考えてやればよかったかもしれないな。

俺をまた見上げてきたかなめの、ノドを撫でられた子猫みたいな笑顔に——俺が自分のいいかげんさを少し後悔した——その時。

「——ッ……!!」

ずるっ……と、さっき見つけた、ベンチで寝ている後輩の手元から——

拳銃がその体の上を滑り、地面に落ちるのが見えた。

「——!!」

かなめが——

人間離れた素早さで、そっちに振り返る。そして両腕を広げた、その瞬間。

——ドオンッ！

コンクリートの地面に落ちた銃が、暴発した。

銃声とほぼ同時に、どしんッ。

かなめの背が、俺の胸にぶつかってくる。

「……ッ!?」

カランッ……と、かなめの足元に、弾丸が落ちた。

「あ、えっ……? ——大丈夫ですか!」

暴発に飛び起きた後輩は、真っ青になってこっちに目を見開いている。

「あたしが、一般人だったら、過失致死罪で——良くて無期懲役でしたよ、安全装置の無いリボルバーを持つのなら、1発目は必ず抜いておくように。すぐ、この場から立ち去ってください。誰にも言いませんから」

と言うジーフォースに……

1年は何度もうなずいて、あらぬ方に転がっていたS&Wを拾いつつ逃げ去っていった。

「——お兄ちゃん、ケガはなかった? ごめんね。あたしの背中、ぶつけちゃって……」

振り返ったかなめは、被弾したセーラー服の胸部を掴むように押さえている。

痛かっただろう。防弾制服とはいえ、44マグナム弾が——しかも掠める形じゃなく、ほぼ垂直に当たったのだから。

ヘタしたら肋骨が折れたり、死んでもおかしくない程の衝撃があったはずだ。

「お、お前こそ大丈夫か」

「大丈夫だよ。この服だし、^{フオース}口径銃の対衝撃訓練ぐらい何百回もされたから」

「訓練……? ていうか、なんで分かったんだ。今の暴発。お前、背を向けてたのに」

「お兄ちゃんの眼球に、あの生徒の銃が落ちるのが映ってたから。銃口がこっちを向いた状態で撃鉄から落ちるのも見えたし。銃も占くて危険だった」

お、俺の眼に映った光景が……見えたつてののか。そんな細部まで。

いや、そこも驚きだが……もう一つ、驚きがあった。

コイツは明らかに——

自分の身を、盾にしたのだ。今。

俺を——守るために。

しかもその事を何一つ恩に着せず、自分の事を放って、俺の体の心配さえした。かなめは心底、本当に、俺を守ろうとしたのだ。

そのためなら犠牲になっても構わないという、強い意志を持って。

——俺の中で、かなめの存在がますます分からなくなる。

かなめ。

何者なんだ。お前は。一体。

3 弾

深海色の秘密



自称も公称も共に妹となつてしまった『遠山かなめ』を連れて、男子寮に帰ると――
 「……？」

白雪が文化祭の仕事で最近いなかったため、散らかつたハズの白室が……片付いてるいや、片付きすぎている。

まず下駄箱の靴が、俺の靴以外キレイに無くなつてる。

リビングや小部屋からは、アリアがソファに置いてたハート形クッションも、白雪のタンスも、天井近くまで積み上がつていた理子の積みゲー・タワーも消えてるぞ。だが……俺の私物は何一つ無くなつていない。

かつてアリアが押しかけてくる前の様子に、時間が巻き戻つたような感じだ。

「おい、その……かなめ。お前、俺の部屋に不法侵入したような事を言つてたが……」
 と言う俺の隣、洗面所で手を洗う一連の事象の容疑者は、

「ここは遠山家だもん。遠山かなめが入るのは普通通人です。家族は、住んでもいいの」
 かわかわべー、とうがいをする。

見れば、かなめが手にしているコップは、俺のと色違いのおそろいだ

どこから手に入れてきたんだよ。まるで本物の仲良し兄妹みたいだよ。これじゃあ

「何か色々、物が無くなつてるんだが……」

「あいつらの二オイがするものは、ぜんぶ箱詰めして病院に送りつけました」
 つーん、とソッポを向いて、かなめが言う。

「また火に油を注ぐようなマネをしやがって……」

「アリアの二オイがついたクッションは、ビリビリに破いて送つた。下品な黒い下着とか、エッチなゲームは――一枚ずつハサミで切つたり、手で割つたの。大変だったなあ」

「……………」

「もうすぐ着くんじやないかな。あのピンク頭ども、開けてビックリしてるんだろーねー。ふふ。考えるだけで心躍っちゃう」

ダークな顔でそんな事を言い、ネクラな笑いを浮かべるので――背筋に寒いものがある。な、なんちゅう陰湿さだ。アリアをイビる白雪の陰険さを超えてるぞ。

これは少し、注意してやらないといけないだろう。年上として。

「かなめ、お前なあ」

「？」

俺が後ろ頭をガリガリ掻きつつ、ちよつと怒つたような顔をする……

かなめは「何ですか？」という、全く罪の意識のない目でこつちを見上げてきた。

「その……アリアたちが気に喰わ^くないらしい事までは分かったが、やり方が汚いぞ。夜襲^{やせう}したり、不在時に私物を破壊したり」

「……えつ、何で怒るの……？」

「なりゆきとはいえ遠山^{とあやま}を名乗るなら、そういう卑怯^{ひきか}なマネは金輪際^{こんりんさい}やめろ。いいな？」

問答無用、というムードで俺^{おれ}が強く言うと……

かなめは俺^{おれ}の方をキョトンと見上げたまま、こくり。

ん……？ 割と素直に、うなずいたな。

「わ、分かったよ。じゃあ卑怯^{ひきか}ってどういう事か勉強して、もう卑怯な事はしないようにする」

なんだか、俺^{おれ}に嫌^{きら}われる事をひどく怖^こがっているようだ。

小さく、震えてさえるな。

「でつ、でも——そのかわり私も一つ、お兄ちゃんに注意があるよッ」

気を取り直すように頭をフルフル左右に振ったかなめは、キッ！

その意志の強そうな目で、改めて俺^{おれ}を見上げてきた。

「……なんだよ」

「お兄ちゃんは女の趣味が悪すぎます！ チビ、カマトト、ブリッコ、ダンマリ——あんなイロモノばかり飼^かつてるなんて——」

ぶりぶり怒った顔で指を折り折り言うかなめに、俺^{おれ}は少したじろぐ。

飼^かつてる、つて。動物かよ。あいつらとはいえ、一応ギリギリ人間なのに。

まあ、今の4つの蔑称^{べつしょう}で4人がしつかり思い浮かんでしまった俺^{おれ}も俺^{おれ}だな。

「いい？ お兄ちゃん是世界・ステキな男性なの。お兄ちゃんにはその自覚が足りません。女なら誰^{たれ}でもいいっていうような思想は捨てること。あんな女たち、お兄ちゃんとは釣り合いませーん！ 非・合・理・的！」

人差し指を立てて、かなめはクドクドガミガミとお説教モードだ。

どうやら俺^{おれ}の家にアリアたちが住み着いていた事実が、ほとほと腹立たしいらしい。

まあ、そこは同感^{どうかん}だけだな。俺^{おれ}もあいつらの定住^{ていじゅう}っぷりには参^まってただから。

「——あんなのがお兄ちゃんのカノジョとか、ありえないから。というか、この辺の女は全部ダメ。だから約束して」

「何をだよ」

「あたし以外の女子のことは、触^ふったり抱^かきしめたりしないって約束して」

「約束も何も、俺^{おれ}はそもそも女子を触^ふったり抱^かきしめたりしたくはないッ。誰^{たれ}がするか、そんなこと」

「——じゃあ約束して。誓^{ちか}つて。あたし以外の女には触^ふれないって」

「ああ、誓^{ちか}つてやるよッ」

「万一お兄ちゃんとベタベタしてる女を見たら、メッタ刺しにして殺してやるから」
 「お、おいッ。お前も、人を殺すとか気安く言うな。俺のそばにいる限り、何があっても
 他人への乱暴は一切禁止だ。いいな？」

俺が少し強く言う——

かなめは俺を見つめたまま、こくり。

また割と素直に、うなずいた。

まるで、本物の妹のように。

「……」

本当に分かっているのか？　と思つた俺が睨み目線で見下ろしていると——

「……あ……」

かなめは至近距離から自分を見る俺の眼を、まじまじと見上げて……

……かあ……

と、なぜか頬を赤く染めた。

「お、お兄ちゃん……」

「今度は何だよ」

俺に聞かれたかなめは、嬉しそうに、気恥ずかしそうに——

11円に何だかデレっとした笑みを浮かべたかと思うと、顔を伏せてしまった。

「か、かわいい」

「はあ？」

「かつこいい。今のそういう、鋭い顔。胸がキュッてなっちゃう。そ、それにこれから
 2人つきりだつて思つたら……なんか、もう、ヒスレちゃうかも。どうだろう。いけるの
 かな」

「……っ」

「やばい」

「何がだよ」

「本気で好き」

「お、おい……」

「好き。好き。大好き。どうしよう」

顔を伏せたかなめの耳、うなじ、髪の下にのぞく頬が赤くなっている。

赤面しているらしい。それも、激しく。

そうでない事を切に祈るが、雰囲気的には100%本気で言ってる感じだぞ。

「あ、あのなあ。そもそも矛盾してるぞ、お前は。さっきから」

「なにが？」

「俺は認めんが、お前、俺の妹を自称してるんだろ？」

「自称じゃなくて、本物の妹なんだよ」

そこは力強く、かなめは赤くしたままの顔を上げてきた。

「……そう言うんなら、好きとか言うのはおかしいだろ」

「えっ、なんで」

「心の底から不思議そうな顔になるな、妹が兄を好きとか、どこの世界で通用するんだ」

「？ ？ ？」

かなめは、本当に何が変なのか分からないという感じなので……

「だから、血が繋がった者同士だって主張するんなら、問題だ、っていう話だ」

俺は仕方なく、話すのも恥ずかしい一般常識を噛み砕いて説明するハメになる。

「血のつながりなんて些細な問題だよ」

「根本的な問題だろ！ 日本の法律をよく読めッ」

「それはこっちのセリフです。結婚は違法だけど、恋愛は合法ですよ」

この……無法者が法律を語りやがって。

なぜか言いくるめられ気味の俺が、言葉に詰まった隙に――

「――お兄ちゃんっ。好き、好き好き、大好きっ、しゅき、らいしゅきい……」

かなめは、ごろにやーん。

俺に擦り寄って、ネコみたいに甘えてきやがった。また、

なんか、酔っぱらってるみたいなたランス状態だぞ。俺はマタタビか。

「だ、抱きつくなくてッ。だいたい、そもそも、俺なんかの何が好きだったんだ」

美少女だが色々おかしいかなめに、俺は疑いの眼差しを向ける。

するとかなめは、全身の力が微妙に抜けたようにふにやふにやしつ……

「あのね、あのね、いっぱいあるけど――まず、見た目、とか……」

「見た目？ お前……眼科行った方がいいぞ。俺は女子にはネクラとか言われて引かれる

見た目してるんだ」

「そんなことないよ、かつこいいよ」

かなめの目はまた本気も本気、ガチでそう思ってるらしい。

「どこがだ。俺は――」

と言う言葉を遮って、かなめは俺に抱きついてきた。

そして、手で背中を撫でてくる。愛おしそうに。

く、くすぐったい。ゾクゾクするぞ。なんだこれ。

「それと……優しいところも大好き。お兄ちゃんは、あたしにとっても優しくしてくれた。

キラメル買ってくれたし」

「お前なあ。お菓子で誘拐される子供かよ。あんなもん、105円だったんだぞ」

「値段じゃないよ。あたし包み紙を取っておいてるもん。今日の日付を書いて、保管して

おく。一生」

「……………」

さっきの俺の「俺の何が好きなんだ」という質問は地雷だったらしく――

かなめはその後も延々と『お兄ちゃんのどこが好きか』を語り続けた。聞いてるうちにむず痒くなるほど、賞賛、礼賛、絶賛の嵐だ。もはや神を崇拝しているようなレベル。

俺が聞くのをやめてコーヒ―を淹れてる間も、ずっと真横で俺を褒め殺ししてくる。

もう、かなめの世界から想いが溢れて止まらないらしい。

ど、どうかしてるぞ。かなめは。やっぱり。

こんな俺のことが、そんなに好きだとかなら……眼科じゃなくて、脳神経外科を勧めるべきだったかな。全く。

さっき『乱暴は一切禁止』という俺の命令を了承していたものの、かなめは今イチまだ信用がおけない。

外に追い出すと、なんだかんだでアリアたちとの全面戦争になるリスクは否定できない。

なので、俺はこの奇妙な少女、かなめを……

仕方なく、心底仕方なく、自宅に置いてやる事になっている。

それにジーサードからの使者・かなめは、師団にとって客人みたいなものらしいからな。

(ロメオをやれとか、ふざけた事も言われてたけどな……)

これはかつて不知火に聞いた話だが、最初から割とストレートに『体』をチラつかせるハニートラップとは異なり、ロメオではまず相手に『好印象を持たれる』ことから始めなければいけないらしい。

だが、その第一段階は既にクリアしてると見ていいだろう。かなめは最初っからなぜか俺の事が好きで好きでたまらないらしいからな。

しかし、その後どうすればいいのか……俺は知らん。調べる気にもならん。

なので現実逃避がてら本を読んだりDVDを見てる内に――夜になってしまった。

ちなみにその間……かなめは刷り込みをされたカルガモの雛みたいに俺についてきて、

俺がトイレに入ってもドアの前で待ってる始末だ。

ソファ―に座ってテレビを見ていても、ずっと真横に座って俺をニコニコと眺めてくる。

こんな美少女が隣に座ってれば普通の男は上機嫌になるんだろが、そこは俺。気分を害したので、夕方ごろ「ジャマだからあっちへ行ってる」とキツめに言ってる。

そしたら今度は台所のカーテンドアの向こう側に立って、体と顔を半分だけ出して俺をジーッと見えた。2時間も。

薄気味悪かったので「それもやめろ」と怒ったら――

かなめは、台所の奥に引っ込んだ。

「……」

振り返ったら負けのような気がしたので、そのままテレビを見ていると……
「しゃーこ。しゃーこ……」

(……っ)

台所から、妙な音が聞こえてきたな。

「しゃーこ。しゃーこ。しゃーこ……」

30秒くらいで負けを認めた俺が振り返ると、

「うつ」

つい、声が出てしまった。

か、かなめが……うちの出刃包丁を研いでるぞ。砥石で。

セーラー服にフリフリエプロン（理子の私物化したらしい）という姿で、

「な……何やってんだ」

「お料理する準備だよ、お兄ちゃん」

——俺はお兄ちゃんじゃない。

と、繰り返すのもバカバカしくなってきたな。いいかげん。

これも根負けした形にはなるが、もうツツコむのはやめよう。

「これ、いい包丁だね」

さらに、と大きな包丁を持ち上げたかなめが、ニコツと笑みを向けてくる。

なんというか……かなめは……刃物を持った時の表情に、独特の怖さがあるな。

刃物が好きなのかもしれない。少し、人が変わる感じだ。微妙に目が据わってるよ。

「そ……それは関のブランド品らしいんだから、壊すなよ？ 白雪の私物だ」

「それはニオイで分かったけど、いい物だから鹵獲しました。このエプロンもね」

かなめは包丁を人差し指でクルッと回し、ぱしっ。

一日逆手に持って、まな板の上に置く。

「うちは兄妹2人だから、妹が料理担当なの。お兄ちゃんには、これから毎日作らたての

手料理を食べさせてあげるからね」

「なんでそんな……お前のガラじゃないだら、料理なんて。何でやりがたるんだ」

「星伽白雪の機能、あたしが取るから」

「……っ」

「神崎アリア、星伽白雪、峰理子は、家族でもないくせにこの部屋に住んだ。つまり、

お兄ちゃんにとって良い機能を持ってた女ってことでしょ？ そういう女たちのやってた

機能を全部取っちゃえば、あいつらは本当に用済みになるの。これ、合理的でしょ？」

小悪魔っぽい笑顔をしつつ、かなめは——

緋色をした、カラー・サングラスみたいなものをかけた。

あれは……見覚えがある。

確か、コイツがアリアたちと戦っていた時にかけていたものだ。

「なんだそれ。武器じゃないだろうな」

「テラナ——The Tella Net Assist system——うーん、なんて言えればいいのかな。携帯と、ネットと、放送と、軍用無線が合わさったような？ 高次の情報インターフェースだよ。

あたし側にも調整訓練が必要だったし、眼球運動で若干の操作はするんだけど——脳波のボタンを読んで、あたしが考えるのと同時にアドバイスを表示するの。今も出てる」

「表示……出てるって……なにも映ってないじゃんか」

「そっから見るとね。このヴァイザーは光学多層膜のディスプレイになってるんだよ。半透明の、マジックミラーみたいな従液晶フィルムが蒸着されてる。そこに必要な情報が表示され続けるから、思考がネットワークと直結し続けている感じになれるんだよ」

「……聞いた事ないぞそんなもの。どこの製品だよ」

「非売品。まだ評価機だから高いよ？ 1端末で2〜3千万ドルはするんじゃないかな。ペンタゴンとロスアラモスだけが使っているの。あたしにとつての、ケータイ」

2〜3千万ドル……？

1ドルが80円ぐらいだから——に、2億円ぐらいするケータイって事かよ！

と、目を丸くする俺の前で、かなめはテーブルに置いていたP.Cゲームと思われる物の

ケースをパカッと開く。

……見覚えがあるぞ、あのパッケージ。恥ずかしい事に。

昔、俺が理子にアリアの事を探らせた時に報酬として買ってやった——

いわゆる、ギャルゲー。『妹ゴスロリ少女』、略称『妹ゴス』じゃねえか。

「おい、それ……」

「ゲーム。これも峰理子の私物から鹵獲した。あのブリッコ女は、こういったゲームからお兄ちゃんに好かれる行動を勉強してたみたいだからね」

かなめはピンセットのような装置で、取り出したゲームディスクを挟む。

すると……クルルルルル……と、挟まれたディスクが回転し始めた。

H M Dの奥の目が、ちょっと動いているのが見える。どうやらディスクを読み込み、無線接続したテラナとかいうあの装置を介して内容を調べているらしいぞ。

「特にこれは、妹をテーマにした恋愛ストーリーらしいの。お兄ちゃんに好かれるために、あたしも学習してやるんだ」

「学習するなッ、そんなもん。特に、そいつはR指定だか成人指定だかの——お前の歳でやっちゃいけない内容のものなんだぞ」

「ふむ、ふむ、料理は、シンプルなものの方がいいみたいだね」

俺の小言を完全スルーで、かなめはディスクと読み取り装置をテーブルに戻し——

「それにやっぱり、妹が料理をするのは正解。兄と妹はいきなり接触するものじゃなくて、日常シーンから始めるのがいいみたい。それと、料理をする際は——こんな風に？」

と、こっちにオシリを向けてきた。

セーラー服の背、その両脇にハミ出て見えるエプロンと……背中で結ばれた白いヒモの下で、短いスカートから生つちろい太ももが伸びている。

かなめが銅や木製の長いスプーンをせっせと用意する動きに連動して、そのスカートがヒラ、ヒラ、と動く。なんとも、誘惑的な光景だ。

普通の男だったら……つい、あの辺を触ってジャマしたくなるんじゃないだろうか。

ネコジャラシに手を出してしまう、ネコみたいに。

「料理が終わるまでずっと、かわいい妹がこうやって——お兄ちゃんに、無防備な背中を晒すの。ねえ、どう？ 妹のスカートの中身に、興味湧いちゃう？」

「き、気色悪い事を言うな」

「ゲーム序盤でも、少しは触っていいみたいだよ？ 『後ろからスカートをめくる』って選択肢も出るみたいだし」

かなめは半分だけ振り返って、俺の心を読むようないやらしい目をする。

「バカ言え。俺の選択は『シカト』だ」

俺がソッポを向くと、かなめは「お兄ちゃん非合理的いー」などと言いつつ、がちや。



冷蔵庫を開け、中を眺めながら――

きゅん、きゅん。

バイザーと繋がっている、耳の後ろに伸びるセンサーのような器官を蠢かせた。

「うん、うん。この冷蔵庫の中の材料なら――カレーライスにしよう」

にこつ。と、バイザーを外しながら微笑んできたところを見るに……

どうやら今もテナとやらに接続して、中の食材で作れるメニューを調べたらしいな。

何億円もする装置で調べたのが、ギャルゲーと、あり合わせの献立かよ。

ペンタゴンだかの開発者も泣くだろうな。それ聞いたら。

「お兄ちゃん、できたよー!」

元氣いっぱいと呼ばれたので、リビングに入ると……本当にカレーが出来ていた。

うまそうな匂いがするが、俺は――応――最低限の警戒として、テーブルに置かれた皿をかなめの物と取り替えてから席につく。

「やだなあ。毒なんか入れないよ」

などと苦笑いしつつも、かなめはルンレンと俺の対面に座った。

見た目は極々普通のカレーライスだったので、食べてみると……

普通に、うまい。まあ、カレーなんて誰が作ってもうまいんだけどな

見れば、かなめもバクバクとカレーを食べ始めている。

「嬉しいな、こういうの」

「ゲームのセリフか、それも」

「違うよ。ゲームは、あくまで参考程度。これはあたしの実感。嬉しいの、今」

「何がだよ」

「これが家。これが家族なんだなあ……って。あたし、初めてだから。こういうの」

「家で飯を食うのが、か?」

「そうだよ。食糧も栄養剤とか高圧搾カリリー注射じゃない……普通のもの。おいしいね、

って自分で作って言うのもアレかあ。あはは。ねえ、お兄ちゃんは? おいしい?」

「ああ、うまいよ」

本当に普通にうまかったので、自然にそう言う……

かなめはデレデレした表情になり――俺の様子を見たり、カレーを食べたり、また俺の様子を見たり、それを繰り返した。とても、とても、楽しみに。

家でカレーを食うことで、こんなに幸せそうにするヤツは初めて見たよ。

「お前にだって家ぐらいあるだろ」

できれば帰って欲しいので、そう言う――

「家なんかないよ。住んでた所はあったけど、あんなとこ、家じゃない」

ちよつと悲しげな顔で、そう返してきた。

なんか……家出娘をかくまってるようなムードだな。

「ここがあたしの、初めての家。ここはあたしとお兄ちゃん——遠山家の、家族の家なの。この家に住んでいいのは、家族だけ。家族は、あたしとお兄ちゃんだけ。だから、家ではあたしはお兄ちゃんを一人占めできる。これ、妹の特権だねー」

「……」

かなめは少しの間、しかも半ば強制的に俺と家族ゴッコをしただけで有頂天になつてた。だが……不思議なもので……

コンビニ弁当か、白雪が作る豪華な食事か——という両極端な食生活をしてたせいもあり、こういう普通の夕食は……なんというか……

懐かしいな。悪くない、気がする。

子供だった頃、家族みんなで食べた夕食を思い出すよ。

あの時の味に、何となく似てるような感じさえ——する。

——翌朝、おたまでフライパンをカンカン鳴らす『妹目覚まし』なる行為で起こされた俺は、かなめが用意していたトーストと目玉焼きを……まあ、もう交換せずに食べた。

見れば、かなめは早起きして家事をせつせとしていたみたいだな。家中がキレイだし、

ベランダでは洗濯物がはためいている。本当に白雪みたいな働きぶりだ。

で、2人でバスに乗り、武偵高の生徒たちから再三好奇の目で見られまくった後……かなめは教務科の前で降り、そこから姿を消している。

一人で歩かせるのは不安ではあったが……一応、昨日の約束もある。

それに俺も、一応まだ武偵の端くれだ。約束の他にも、まあそれなりに予防線は張つておいた。万全とはいえない線だけどな。

(しかしアイツ、そんな簡単に転入できるあてでもあるのか?)

などと考えつつ、一般科目の授業を終え……

昼休みになったので、学食にでも行こうと俺が席を立った時。

「あの……お兄ちゃんを呼んでくれませんか? 私、遠山かなめといいます」
クラスの後ろの方のドアで、かなめの声がした。

「……ッ!？」

振り返ると、セーラー服姿の、かなめが……来てる……うちのクラスに!

女子たちはかなめを「かわいー」などと笑顔でナデナデしており、目ざとい男子たちがざわついている。

「お、おいッ……! 何しに来たんだよ!」

俺が慌ててドアの所に行くと、ゾロゾロと男子どもがついてきた。な、何だよお前ら。

「もう！ お兄ちゃん、お弁当忘れちゃダメだよ！」
 かなめはさつきまで弱々しく喋っていたのに、俺に対しては強めの口調になる。実に、リアルな妹っぽい感じだ。

そして、ぼす。

小さなバスケットに入った、サンドイッチを押しつけてきたぞ。

流れで受け取っちゃったが、弁当の話なんか一度もしてない。何のつもりだ。

「出た！ 噂の妹！」「ホントにいたのか！」「かわいいじゃねーか！」「キンジの妹とは思えん……！」

そりゃそうだろうよ。俺も思えてないんだからな。

「キンジお前、どんだけ勝ち組人生だよ！」「こんな美人の妹がいるなんて！」「羨ましすぎんだよ！」

わいわいと盛り上がる男子どもは、俺の頭をボコボコ叩いたり蹴ったりしてくる。

「よせ、なんで俺を殴るんだよっ」

美人の妹がいたところで、別に兄貴が嬉しいもんじゃないだろうッ。

いや、俺も（かなめの主張上とはいえ）兄ビギナーだから良くは分かんが。

俺は「うちの妹と取り替えてくれよおー！」などと追いつがる武藤を振り払って、男子たちを大男全統で威嚇しつつ、かなめを廊下に押し出す。

そして階段を——石壁の隅を押して早足に——がり、人けのない予備ロッカールームにかなめを連れ込み、カギをかけたところ——

（……ッ）

今のも、かなめの作戦だった事に……今さら気づく。

コイツは自分を妹だと俺が認めざるを得ないようにするために、『遠山キンジの妹』の存在を皆に印象付けているのだ。

今みたいな、リアルな妹っぽい日常の……コマを見せつけることで。

……頭がいいな。年下のくせに。

「おい、かなめッ。2年の教室には来るなッ」

「うん。もう行かないよ」

ニッコリ笑ったところを見るに、俺の読み通り、もう用事——自分の存在のアピールは済んだという事だろう。

「でも……改めて学校で会うのって、なんかドキドキするね。なんていうか、公私混同？ みたいな感じで。おうちではあたしがお兄ちゃんを独り占めしてイチヤイチヤしてるのに、ここではそれをナイシヨにしてる。これって、背徳の醍醐味だね。すっごく気持ちいいよ。きつといっぱいいいる、お兄ちゃんに片思いしてる女たち——悔しがってるんだろぅなあ。ふふっ。優越感、感じちゃう」

はにかむように頬に両手をあてて語るかなめの——今の行動・発言の至る所を俺が説教しようとした時、

「あたし、お兄ちゃんの事いろいろ聞いてちゃった。友達とか、先輩たちから」

「何……？」

「お兄ちゃんは『昔は立派な強襲武偵だった』って、いろんな人が言ってたよ。強襲科の学生は、先輩まで一目置いてたって。やっぱり、本当は強いんだね。ただ、無愛想なのは昔から変わってないらしいけど」

余計な事ばかり……聞いてきやがって。

「お前に関係ないだろ、俺の過去なんか。昔は……ちよっと、ヤンチャしてただけだ」

「お兄ちゃんのことは何でも知りたいんだもん。あつ、それとね」

そこでかなめは、イタズラっぽい笑顔を上げてくる。

「午前中の休み時間にね、知らない男子に——人けのないここに連れていかれたの」

「何……？」

「それで、手紙渡されちゃった。ラブレターだと思うよ」

ああ……そっち系の話か。

手が早いヤツもいるもんだな。

「……」

ニガテな話題なので俺が黙っていると、かなめはスカートのポケットから封筒を出してきた。

「これ。どうしようか。恋愛の練習台に——カレシにしちゃっても、いいかな？」

などと、手紙を渡してくるの——

俺は少し考えてから、一応、内容を確かめてみることにする。

どこのバカだ。かなめを見た目だけで判断しやがって。コイツは危険人物なんだぞ。

かなめもかなめだ。俺には、他の女に指一本触れるなどか言ってたくせに——

「……」

べら、と、手紙を開くと——

『ウソだよお兄ちゃん。妬いてくれた？』

と、キレイな文字で描かれており——

はたいてやる、と思つて顔を上げると、かなめはそれを防ぐように俺に抱きついてきた。

「かなめ……お前、妙なイタズラするなッ！」

「ふふっ。今のはお兄ちゃんの愛を確かめたの。イラッとした顔をしてくれて嬉しかった。お兄ちゃんは、あたしを愛し始めてる。ううん、もう愛してくれてる」

悦びに満ちた——微妙に握つた、目で——

かなめは、俺を愛おしうに見上げている。

「ちつ、違ふ。お前なんか近づく男子がいたら、そいつの身が危険だから——」
 「ふふつ。安心して。嫉妬なんていらなんだよ。もし本当にアブローチされても、話も
 しないから。男子ってニガテだもん。お兄ちゃんも、アダ名は『女嫌い』なんだってね」
 俺が女嫌いなことがなぜか嬉しいらしく、かなめは——
 「——似たもの同士だね、あたしたち」

甘えるような声で、そんな事を言ってくる。

「……まあ、そうらしいな」

コイツは昨日のバスの中でも、男子をイヤそうに避けてたしな。

俺がその点を認めてやると——

「兄妹だからね」

かなめは幸せいっぱい、といった蕩けるような笑みを浮かべ——

「ああ、どうしよう。もう嬉しすぎていっぱい。好き好きスイッチ入っちゃった。
 このままじゃ帰れないよう」

「何だよ『好き好きスイッチ』って……いいから帰れよ。どこのクラスに潜り込んだのか
 は知らんが」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん——っただけお願い。ハグして」

、ハグン

「抱きしめて、ってこと」

「なんでだよっ」

「好きだから。だから、して。ぎゅってして。ぎゅーってして。そしたら、帰るからあ」

俺の胸に頬ずりしつつ、かなめは熱に浮かれたように言ってくる。

なんか、俺の背に回した腕で……見た目以上に、しっかり俺を捕らえているぞ。

このままじゃ、俺も帰れん。

抱いてやるか。それでかなめが帰ってくれるんなら。

「……」

一応、ロッカールームに誰もおらず、ドアのカギが掛かっている事も確認した俺は——

——ぎゅ。

子供をあやしてるような気分で、かなめを抱いてやった。

「あつ……ああ……お兄ちゃん……おにい、ちゃん……」

腕の中のかなめは、切なそうな甘い吐息を漏れ出させながら、ぼた。

足下に、水滴を落とした。

な、泣いてる。嬉しさのあまり。

何というか……本当に、情緒不安定な子だな。

もしかしたら、このぐらいの歳の女子は普通こうなのかもしれないけどな。

「お、おい……大丈夫か？」

かなめに言うと、かなめは惚けたように軽く口を開けた顔を上げてくる。

「だ、大丈夫じゃないよ。もうダメ、収まり、つかない。が、我慢できないよっ」

その潤みきった瞳の奥で、抑えきれない欲望が渦巻いているのが分かる。

お人形さんみたいに整った容姿をして、学校の生徒たちの前では大人しくて礼儀正しい女の子を演じてたくせに……

今は、まるで発情期のケモノみたいなムードだ。さつきかなめ自身が前フリしてたが、俺と学校にすることで——背徳感みたいな気分が燃え上がったような様子だな。

「お兄ちゃん。そ、それ以上のことは、ことは、今日は、頼まないから——」

快感の波にあつぽあつぽと溺れるように、そう言ったかなめは……

はっ、はっ、はっ——と、キヤラメルのような甘い香りのする息を断続的についている「おねがい、おねがい、キスして——それだけで、いいから——」

お、おい……ッ。

なんで、そんな事をおねだりしてくるんだッ

手が入れば足も入る、つてヤツだな。

ちよつと譲つたら、あれもこれもちようだいって言い出すタイプか。したたかだな、

「バカ言うな 俺たち兄妹なんだろ お前の中では」

「だからだよ、だから、実現できる可能性が……おねがい、お兄ちゃんから、して……」

かなめは、もうこれ以上は喋れないほどのテンパリようだ。

そして、口を少し開けたまま、眠るように……目を瞑った。

さすがに……この行為の意味は、俺にも理解できる。

かなめは待つてるのだ。俺から、かなめに——その……する、ことを。

(……ッ……)

かなめの腕は、俺を強く抱きしめたままだ。

このままじゃ俺も帰れない、その状態が続いてる。

力尽くでも振り払うか？ いや、それはできないだろう。相手はアリアたちを凌駕する

戦闘力の持ち主だ。一方の俺は、通常モード。なんにもできない、ただの俺だ。

それにここまで——見るに堪えないほどの求め方をしたのに、それを振り払われたら、

かなめはひどく恥をかかされた気持ちになるだろう。

それで暴れ出したりしたら……手に負えないぞ、俺には、絶対、

(ど、どうすりゃいいんだ……！)

そもそも——かなめの求めている事は、俺が最も忌避する部類の行為。

だが、なぜ嫌っているのかというと……ヒステリアモードになる事を避けているからだ、

(……血流……)

さつき抱きしめる前にも確認してはいたが、俺は改めて、体の真芯を確かめる。するとやはり——こんな状況でも、熱くなつてない。穏やかなままだ。

原因は不明なもの、俺は、かなめではヒステリアモードになりにくい……

いや、ならないのかもしれない。こんなに、可愛い子なのに。

実際、この間アリアたちの病室でかなめにされた時も大丈夫だったしな。

そんな女子が存在したのか。いや、存在し得るのか。

そこは……今後の人生のためにも、確認しておいて損はないかもしれない。

……やむを得ん。

人生には、急場しのぎでやらねばならない難事もある——と、兄さんも昔言つてたしな。

俺は……声を潜めつつ、かなめの真っ赤な耳元に囁く。

「か、かなめ。したら、手を離せよ」

と言うと、こくり。

かなめは目を閉じたまま、うなずいた。

「こ……これ以上の事は絶対しないからな」

こくり。また、かなめがうなずく。

「あと、誰にも言うなよ」

こくこくこく

3回うなずいた。

俺は——清水の舞台から飛び降りる気持ちで——

「——ッ——」

してやった。

かなめに求められた通りに。

その瞬間、かなめは——歓喜にだろう、びくつ、びくびくつ、と身を震わせた。

かなめの張りのある唇から、俺の口に熱と震えが伝わってくる。

(……………)

だが、俺の方は……予想通り、前にした時と同じだ。

何も、やましい気持ちを感じない。

まるで洋画で欧米人が挨拶のキスをした時のような、身近な者に触れた感覚しかない。

——ヒステリアモードに、ならない……

などと、改めて驚いていると——

「……んッ……んうッ……!!」

喉の奥からくぐもつた声を出したかなめが、両手を俺の後頭部に回してきた。

お、おい。そんなに強く顔を押しつけるな。あと何秒するつもりだよッ。

事前に取り決めしとけばよかったな。それも。

「——ぶはっ！ 長えって！」

息苦しくなった俺は、かなめの両手を引つ張って下げつつ——
口を外して、はあ、はあ、と息継ぎをする。

俺の口には……甘い、キャラメルの味が残っていた。かなめがさつき、食べたんだな。

「……はあ、はあ……すごい、すごい……好きな人にキスされると、こ、こんなに……あつ……はあ、はあ、はあ……しゅごい……いい……」

俺に抱きついたままのかなめも、苦しげな、艶めかしい息を断続的につくので——

「お、おいかなめ。呂律が回ってないぞ。もう離れろって——」

「ハッ、はっハッ、そ、そうだね、し、心臓止まっちゃいそう——それに、分かったからなれる、きつとなれる。合理的だよ。もう1歩、ううん、2歩、進めば……」

「何の話だ。ほら、落ち着けよ」

背中をさすってやってから腕を解くと、かなめもようやく俺から腕を離し——

「あ……ありがとう……お兄ちゃん、ありがとう……抱いてくれて、キスも、そっちからしてくれて……これで、本当に……あたしたち、本物の、恋人になれた気がするよ……」
などと、浮ついた声で妙な事を言っている。

ぼろ、ぼろぼろ、と零れ続ける涙も、もう感動で止まらないような状態だ。

いろいろ突っ込みたい所はあるが、かなめが危険なぐらい興奮しているので……

抗議は置いといて、まずは宥めてやらないといけないな。

「……お前、あんなに強いの泣き虫だよな。なんで泣くんだよ」

「お、お兄ちゃんが、あたしを、受け入れてくれたから。愛して、愛してくれたから。あたし、今、幸せだよ……幸せ……幸せ、体中が、幸せでいっぱいだよ……」

見るに見かねて、手で涙を拭うようにしてやると——

俺の手を、はしっ。熱の籠もった手で、かなめが掴んできた。

「お兄ちゃん、あたしの、あたしだけの、お兄ちゃん……愛してくれて、ありがとう……これからもずっと、あたしだけを愛してね……」

ウツトリと言いかねめの……なんというか、この態度は……

これは、恋愛というものに疎い俺にもさすがに分かってきた。

本気で——恋してる乙女、の仕草だろう。

しかも今のキスで、かなめの中ではもう俺とかなめは恋人同士として完全に成立し——
その付き合ってる相手に、デレデレし始めた感じさえする。

恋が叶った喜びで、有頂天になっているみたいだ。

まあ、それはかなめの拡大解釈なのだが……

……なんだろう。この不安感は……

別に戦ったわけじゃないのに、やばい気がするぞ。今のこれは、今後。

などと不安に思っている時ほど、かなめは動きを見せず放課後の今に至るまで、姿を消している。

アリアたちも入院中なので、俺も今日は一発の発砲音も聞かされることのない、平穩な日常を過ごせた。

とはいへ、武偵憲章7条——悲観論で備え、楽観論で行動せよ。

常に物事が悪い方へと進んだケースを考え、警戒を怠つてはならないのが処世訓だ。なので——一応、『予防線』もチェックしておこう。

「風魔。おい、どこだ」

その『予防線』の名を小声で呼びながら、俺は一般校区の外れにある公園に入っていく。俺は昨日……武偵高に転入してくるといかなめの動きを、諜報科の後輩・風魔陽菜に監視するよう命じてある。

ここで、その報告を聞く約束になっているのだが……

園内を見回しても、いないな。風魔。

秋も深まり、日が暮れるのがめつきり早くなった。もうほとんど真つ暗だ。

聞えるのは、リ、リ、リ……という微かな虫の音だけ

[illegible]

なにと疑心暗鬼になつて傳説すると――

[illegible]

着うたが、聞こえてきたぞ。和風庭園つぽく造られたこの公園の、竹林から。ちくりん

演歌だな。これは……坂本冬美の『夜桜おじ』。昔風魔と潜入捜査の実習でカラオケに行った時、アイツがどや顔で熱唱してた歌だ。やたら上手かったから、覚えてる。

歌を頼りに、がさ、がさ、と竹林に入っていくと――

「師匠」

竹林の中、足元にあつたタケノコが喋つた。風魔の声で

風魔、お前……いつの間にタケノコに生まれ変わったんだ。

もしくは玉藻の『虚物変化』でタケノコに化けたのか？
いつマスターしたんだよ。

「……何やってんだよ」

「土遁術どとんゆつにござる。師匠ししょうが、バレないよう重々注意せよと仰おつこったゆえ」

真相はもっと単純だったな。穴掘って地中に潜ったのか。

タケノコは、呼吸のためのシュノーケルらしい。

（隠れるなら、もつといい方法があるだろうに……）

風魔は高名な忍者の本裔らしく、課報活動させるとそれなりに使えるのだが……ご覧の通り、いろいろ残念なヤツなのでBランク武偵に格付けされている。

そんなのしか使える後輩がいない俺も俺だが、風魔は俺のことを妙に尊敬しており、『これは修行だから』と言えど何でもタダで言う事を聞くのがいいところだ。

なので一応、報酬代わりに戦妹にも取り立ててやっている。

タケノコと会話する男子高校生というシニールな図はともかく、

「——で、どうだった。侵入ってきたか」

足元のタケノコに聞くと、

「はっ。師匠が仰った通り、妹君は——今朝、転入して来たでござる。御年は14歳という事でインスタン扱いとなり、1年C組がお預かりする事になった。此は僥倖にて、拙者と同じクラスでござった。廊下で斉藤先生と沖田先生のお話を盗ませて戴いたところ、米国武偵庁より留学依頼があったそうでござる」

米国……武偵庁……？

そういえば、かなめとジーサードのプロテクターにはUS——United Statesの頭文字が刻印されていたな。かなめも、あのヴァイザーの価格をドルで語っていた。

——アメリカ、か。

また焦臭いニオイがする話になってきたな。

「授業中はどんな感じだった」

驚として御座る。頭脳明晰にて身体健康、模範生とお見受けいたします。何れも衛星通信を

介した授業にて、マサチューセッツ工科大学を12歳で卒業なされたとか」

「マジかよ」

「マジのようにござる」

あの戦闘力に加えて、頭まで……いいのかよ。

家ではそんな素振り、ちっとも見せなかったくせに。

「他には、生徒たちからの評価は。イジメられたり、嫌われたりしてなかったか」

「級友からの評価は良好にござる。妹君は礼儀正しく、楚々とした氣立ての良い子女ゆえ、人望を集めてござる」

じ、人望……？

かなめのヤツめ。

ほんと、猫かぶりだよな。公の前では。

「ただ、親しく話されるのは女子のみでござった。男子には距離を置く向きが見られたでござる」

「ああ……それは、そうらしいな。で、女友達とはどんな事を話してた」

「妹君は、兄上——つまり師匠を賞賛されてござった。この話術が巧みの極みにて、1年C組の女子における師匠の評価も鰻登りに高くなっているでござる」

お、俺を賞賛って……やめてくれよ、ほんと。

「たとえば先月アンケートをしてみたところでは、50%の女子が師匠の『ネクラ』というアダ名を知ってござった。それほど元々キモがられ気味でござった師匠でござるが——」

おい風魔。お前は俺に敬意があるのかないのか。

勝手に余計なアンケートを採ってんじゃねーよ。

「——今やC組の女子では師匠に興味を持つ者が増え、某にまで『陽菜は遠山先輩と付き合ってるの?』などと弁えの無い質問をしてくる者もいる始末。師匠はどう思われるか」

「どうでもいい。俺の事なんか」

「師匠はどう思われるか」

「いま言つたろ。俺の評価なんかどうでもいい。だが、かなめについては——」
リー……リー……と、鈴虫の音がする中、俺は小さく溜息をつく。

「問題無し……ってことだな。掴み所がない」

かなめがそんな調子なら……まあ、他の生徒に危険を及ぼす事もないだろう。そこはまず、一安心だな。

もしかすると、かなめは素では本当にいい子なのかもな。猫かぶりとかじゃなくて。

「後は、妹君はご自分に課されたご自分のルールも語られてござった。『他人への乱暴は禁止』と『自分より強い者には、絶対逆らわない。非合理的だから』との事でござる」

それは、俺が約束させた事と——かなめが元々言つた事だな 既知の情報だ

「……まあ、了解だ。この辺にしよう。手間をかけたな」

「師匠の御役に立てて、光栄に御座る」

と言うタケノコに、背を向けると——

「……………師匠」

タケノコに呼ぶ止められへ、

「なんだよ」

「その……面目ない。実は、この土遁術には欠陥がござって……」

「欠陥?」

「1人では、出られないのでござる」

「……お前なあ……」

この未熟者め。

心の底から呆れた俺は、もうそのまま帰っちゃおうかなともちよつと本気で思ったが、それを察知したのか「このままでは即身仏になってしまうでござる。引き抜いて下され」と哀願するヒナノコ（風魔陽菜のタケノコ）の前に渋々戻った。

で、どっちが前かも分からないタケノコを適当に掴み……

「これを引っこ抜けばいいのか」

「左様に御座る。さすれば、某の手が外に出せるでござる」

「じゃあ抜くぞ」
「かたじけない」

などと遣り取りして、ぐいッ、と引く。

しかし、なかなか……し、しっかり根付いてるな。これ。本物のタケノコみたいだ。全く。何の因果で、こんな季節にタケノコ狩りをしなきゃならんのだ。しかも素手で。ぐっ……ぐいッ……ぐいッ……！ と、何度か力を込めて引いていると……

——ずぼッ！

ついにタケノコが抜けて、その下にあつた取っ手にブラダがついていた風魔——を収めた、ビニールシートが地上に露出してきた。造り、安っ！

ガサガサッ！

俺に対して背を向けた状態で出てきた風魔は、羽化するようにシートから出てくる。

同時に穴を駆け上がるようにして、勢いよく出てきやがったものだから——ドンッ！

「う、うおッ!?」

俺は風魔の背中に押され、竹の生えている方へ何歩かよろけてしまふ。

そして、竹を弓なりにするほど思いつきり寄りかかり——

びよんっ！ と、風魔の方に跳ね返ってしまった。

「レ、ビけノー——」

さっきまで風魔が埋まっていた穴に落ちるまいとして、むしろ勢いをつけて前に跳んでしまった俺は——

「——！」

「!?」

ばさあ！

風魔を背後から押しつつ、前につんのめって倒れてしまった。

「……………」

「……………」

その結果、出来上がった姿勢が——

風魔は四つん這いになっており、俺は、その上に覆いかぶさるようになってる。

強襲科にいた頃の癖で、とっさに、風魔の体を支えようとしたのだろう……俺の両腕は、セーラー服を着た風魔の胴を抱くように回されてしまっている。

なッ、なんか、俺が風魔の後ろから押し倒したような形だぞ……！

「ご丁寧（ていねい）に2人（ふたり）の下には、さっき風魔が体を巻いていたビニールシートが広がってるし。」

「——な、なななっ、なんで御座（ござ）るか師匠ッ！」

ポニーテールが直立するほどビックリして、四つん這いの風魔が慌ててる。顔だけ振り返ろうとして、自分の首の真後ろに俺の顔がある事に気付き——

びきーん！ と、むしろこの姿勢をキープするように固まってしまっている。
 (あ……ありえん……！)

マズい……！

偶発的とはいえ、これはセクハラで訴えられても仕方ないアクシデントだ。

風魔は、武偵高の徒友制度により――

俺の戦妹、つまり弟子のような位置づけになっている生徒である。

立場を利用したバワハラも兼ねた、卑劣な行為と見なされるからだ。
 その処罰に実施されるという教務科による体罰は――武偵高名物『体罰フルコース』が

オヤツに過ぎないと感じられるほどの、壮絶なものらしい。

武偵高の鬼教官どもが総動員で行う、それはそれはもう、日本が法治国家であることが信じられなくなる様な内容。30秒に1回「もう殺してくれ！」と叫ぶような暴行が、3日3晩は続くとか。魔人化は免れない。

幸か不幸かヒステリアモードにはなっていないものの――魔人化が掛かっている俺は、ヒステリアモードに匹敵する速度で考える。

どう切り抜けるんだ、このピンチを……！

し、師匠……！

う。

マズい。

風魔が――ちよつと、恥ずかしそうな声だ。

「これは、ど、どういう意味にござるか……っ？ と、殿方と結納を交わす前に、そんな事をしたら……そ、某、父上と母上に怒られてしまうでござるよう」

あ、明らかにセクシヤルな疑惑を持つてるぞ、この発言……！

俺よ……！

(……何か、思いつけ！)

黙っていたら事態が悪化する。

何でもいから、言うんだ！

「――こつ、これは――これは、修行だッ！」

苦しい紛れに、俺はボンと思いついた事をそのまま叫ぶ。

「しゅ、修行……!? また唐突な……！」

「と、唐突な事態にも即応できるべきだろ、武偵は！」

もう仕方ないッ……

言っちゃったからには、これで押すしかないぞ。

ある意味、もう押し倒してるけど。

「な、な、何の修行にござるかッ、そ、某はこんな術を存ぜぬッ」

「いや、その、これはこういう姿勢に耐える修行だ」

「こ、この姿勢にござるか？ し、しかしこれではまるで——そ、その、男女の——」

「四の五の言うなッ。これはこれで、筋力が鍛えられる。腕立て伏せとか、しろ」

「ししししかも上下動せよと仰るか！」

「慌てるなッ、上下動の何が悪い！ だから、これはその、すぐそうやって精神が揺らぐ

お前の欠点も直せる一石二鳥の修行なんだ」

「某の……欠点……ッ！」

「お前は昔、俺と徒手格闘の訓練とかをした時に集中力が乱れる事がよくあった。実戦で集中力が途切れたら、討ち取られるぞ。今後俺に何をされても、平常心を失うなッ」

「わ、分かったでござる」

え、分かつちゃうの？

我ながら苦しい理屈を並べ立てたのに……すんなり受け入れたぞ、風魔。

よ、よかった。うちの戦妹がアホで

「た、たしかに——組み手の訓練より、このように師匠に抱きつかれた方が精神が揺らぐものにござる。さすがは師匠」

さ、さすがだろう」



「で……では、う、動くでござる。師匠、お手柔らかに」

風魔は恥ずかしそうに顔を俯かせたまま……ぐっ、ぐっ、と、言われた通りに変則的な腕立て伏せを始めた。その動きで、ゆっさ、ゆっさ、と、俺の体も上下動する。

しかし、子亀みたいに俺を乗せたままではやはり大変なのか、

「……んッ、はッ、ふッ、んッ……」

風魔の息遣いは、少し荒い。辛そうだな。

だがそこはさすが忍の末裔。耐え忍んでいるよ。俺にのしかかれたまま。

うう……夜の公園、それも茂みの奥で男女が密着して、ゆさゆさ動いてるとかって……誰かに見られたら、絶対誤解されるぞ。さつき風魔が上下動にビビってたのは、これだから。ちよつと、形を変えよう。

そう思った俺は両手の位置を風魔の腰の辺りに持ち変えて、自分の上体だけは起こす。

俺の体の位置が動いたのを感じた風魔は、

「……こ、これは、ほ、本当に修行に御座るか？ 師匠？」

2人の新たな姿勢に、テンパったような声を上げた。心底、恥ずかしそうだな。

そりゃそうだろうな。四つん這いで、膝をついた男子に腰を持たれ、背後から見下ろされたら。俺が女子でも怖いよこんなの。

かか……は魔人化か……

……

「——本当だッ——」

「わ、分かったでござる」

また分かつちゃうコイツも、ある意味、俺が戦兄で良かったな。

俺は外したのを見た事があるが、風魔は口元を隠すスカーフを外すと、なにげに冴えた感じのする美人のタマゴ。

これに悪意ある戦兄がついてたら、かわいそうな事になってたかもしれない。ヘンな事を強要されても、『修行』と言われたら——言われるままに、させてしまいかねんからな。

いや、今まさにそれに近い状況なんだが。俺に悪意がないだけで。

(将来、詐欺師とかに引つかからないように見張っておいてやらんとな……)

などと考える……その『修行』が続く間、俺は汗ばむ風魔の首筋を見たり、顔の方に垂れた(風魔曰く「髪」の)ポニーテールを握って背中に戻してやつたり、飽きてきたので空の月を眺めたりしていた。

そして、5分ほど経ったので——「よしッ。これでお前の精神力と筋力は鍛えられた。

済んだから帰っていいぞ」と我ながら無責任に言い放ち、これまた罪悪感を感じる事に「師匠による修行、有難く存じる」などと言って帰った風魔を見送り……

(な、なんとか切り抜けた……)

と、安堵の息をついた時。

……ガサッ、メキメキッ……バキッ……

「……？」

遠くの竹藪で、音がした。

まさか、見られたのか……？　とはいえ、ここからだとかうは暗くてよく分からない。という事は向こうも同じだろう。別のカッパルでもいたのかな。

一応、拳銃の安全装置を外し——足音を殺しつつ、音源の方に向かうと……
……誰もない。

「……？」

だが、妙だ。

この辺りの竹が、何本かメチャクチャになってる。

しかも……囁んだり、素手で折った跡がある。血も、ついてるぞ。

菌形は人間、それも比較的小さいので、女のものだと分かるが……何をやってんだ、ソイツは。まさか、竹を食ってたのか？　パンダじゃあるまいし。

……リー、リー……

という虫の音以外、聞こえるものは何もない。今は。

4弾 背徳の三叉路



翌日の放課後——

かなめと一緒に映画を見たいと言ってきかず、妙に焦るような態度で俺を引っ張るので、俺は仕方なしにかなめと会場へ行った。

会場に着いた俺が、シネマメディアージュでアクション映画の券を買おうとしたら……かなめのヤツ、既にラプストリーリーのチケットを2枚持っていてやがった。

それを捨てるのも勿体なかったので、俺は果てしなく見る気の起きない甘い恋愛映画を……薄暗い映画館の中で、自称・妹と並んで見るハメになる。

しかも、かなめは男女がくつきそうなシーンになるたびに俺の手を握ってきやがる。振り払っても振り払っても握ってくるので、最後は手を繋いだまま映画を見させられるという拷問タイムが続いた。

かなめのヤツ、指で俺の手の甲をコチコチコチコチ撫でてくるし、何なんだよ。で、映画の後、俺たちは——

「面白かったね——」

「……まあ、シナリオの造りはしっかりしてたな」

そばにあったマックで、コーヒー片手に一休みする。

俺は、かなめに先日ロックカールムで入ったというナントカ・スイッチが入って、あの発情じみたモードにならないかと心配していたが……今日は、大丈夫みたいだな。

「特にあの夕焼け空のシーン、あれどうやって撮ったんだろ」

「レールじゃなかった。低空飛行での空撮だろ。鳥はCGだったけどな」

「えっ、ばくなかったね」

「逆光で影にして、ごまかしてたんだ。確かにあそこは上手かったな。ストーリーと関係ない環境映像を挟んで、気持ち切り替えさせる手法だ」

「へえ……確かに、あたしもあのシーンでホッとしたよ。自然の映像っていいよねえ」

「どうやら映画が好きらしいかなめと、話していると……」

かなめは、俺と感性が似通ってるらしい事に気付かされる。試しに俺の好きなアクション映画の話振っても、かなめはテンションを上げて楽しんでいく。ハラハラした映画や笑った映画も、ビックリするほど俺と同じだぞ。

……正直、こういう『趣味の話』が合う女子なんて生まれて初めてだ。

アリアはお子様向けの動物モノ、白雪はお年寄りが見るような古くて渋い邦画、理子は感性だけで作られたようなオシヤレな映画と、バスカービルの女子はみんな映画の趣味が偏ってるからな。レキは映画を見たことないとか言うし

……とところで……

さつき映画館で手を繋ぎながら気づいたが、キャッキヤツとはしゃぐかなめの指には——かなめの肌と全く同色の、薄い絆創膏が貼られてるな。それも、何カ所も。

それを指摘すると、

「あつ、これはね……昨日、お兄ちゃんにプレゼント作ってたから。その時ちよつと力が入り過ぎちゃって、針でケガしちゃったの」

「プレゼント？」

「これだよ。はいっ」

と、かなめは……武偵高指定の防弾カバンから、真っ赤な『LOVE』の文字が無数に書かれた紙袋を取り出した。

当然印刷されたものかと思いきや、LOVEの字は全部手書き。

袋の段階でもう恐ろしいそれを、かなめは両手で前に差し出してきて『開けて開けて』という顔をするので……

やむなく封になっているハート形のシール（このシールも手作りらしい）を剥がして、ガサガサ、と中身を取り出すと……

「……」

手作りの……

スイグルミ、だぞ……

「俺」……の。

デIFOオルメされてはいるが、遠山・キンジの人形だ、これは。

左胸のところに『おにいちゃん』って書かれたミニ名札がついてますしね。

「人形作るのなんて初めてだったから、苦戦しちゃった」

てへ、とペロを出して笑うかなめだが……こ、これ……あちこちに血がついてるぞ。

ゴシゴシ拭った跡もあって、ホラー映画の小道具みたいになってるじゃねえか。

というか、針でケガしたというか——これは『元々ケガをした手』で作ったような出血量に思えるんだが……

「……？」

俺が袋から『キンジ人形』の全身をこわごわ引つ張り出すと……もう1体……

キンジ人形の右手に繋がった、『かなめ人形』がついてきた。

2体の手と手は、幾重にも幾重にも、真っ赤な糸で縫いつけられてる。嚴重に。

誰がどんなに2人を引き裂こうとしても、絶対、永遠に取れないカンジだ。

「お兄ちゃん、嬉しい？」

嬉しいワケねえだろ！ 血のりのついた人形なんか！ なんだよこのイヤガラセは！

という言葉が三連発、喉元まで出かかったが……

かなめは「誉めて誉めて」という目で、ニッコニコして俺を見てる。

拒絶したら自殺しかねんムードだ。コイツはなぜか、俺の事が異常に好きらしいし。

かといって大げさに喜ぶと、今度は等身大人形を作られかねん。かなめ人形つきで。

なので俺は微妙な表情で、

「あ、ああ。まあ……」

と答えつつ、震える手で2体をハート柄の袋に戻した。

「えーっと、これは何のプレゼントなんだよ」

「お兄ちゃんと、恋人になれた記念だよ」

「……は？」

「お兄ちゃんはあたしを抱いた。あたしにキスした。プライベートでは家に入れてくれて、オフィシャルには学校で喋ってくれた。それは公私ともに、愛を表現してくれたってこと。それに、約束してくれた。あたし以外の女には指・本触れないし——あたし以外の女を、絶対愛さないって」

「……」

なんか、こないだ約束した内容から少し文言が増えてるような気がするんだが……

「——お兄ちゃん、あたしは、ちゃんと約束守ってるよ？」

この人形をどこに捨てようかと悩む俺に、かなめは張り付けたような笑顔で何やら唐突

にそんな事を言ってきた。

「……ん……？」

「あたしはちゃんと約束を守って、人に乱暴したりしてないよ。だからお兄ちゃんも女を触ったり、抱きしめたりしてないよね？」

爽やかな笑顔でそう言われて——昨日の風魔とのハプニングが頭をよぎるが——
まあコイツが見てない所での事だし、々々報告する義務もないだろう。

あれはあくまで、事故なんだしな。

「ああ」

と答えた俺に——

「へえ」

かなめはさつきから眉一つ動かさない、凍り付いたようなニコニコ顔を向け続けていた。

「あたし、同じクラスの子とも仲良くするからね。殺したりしない。安心して」

「当たり前だろ」

何の念押しだよ。

「お兄ちゃん——この間、あたし、嬉しかったよ」

「何がだ」

バスの中で、あたしを守ってくれたこと

……

ああ、武偵病院から帰る時……バスの中でみんなが詰め寄ってきた時、俺が壁になって

やった時のことか。よく覚えてんな、そんなこと。

あれを『守ってくれた』とかつて。大げさな。

「だから、あたしもお兄ちゃんを守るよ。悪い女から。もしお兄ちゃんをヘンな所に呼び出してヘンな事しようとする悪い女がいたら、相談してね。1人で悩みを抱え込むことはないんだからね」

正直、俺が一番誰かに守ってほしいと思うのは、お前の危険性からなんだが……

「あたし、今日は——確かめたかったの」

「何をだよ」

「お兄ちゃんが、あたしを愛してるかどうか。でも今日デートしてもらえて、よく分かったよ。あたしは、お兄ちゃんに愛されてる。映画見てる時も、お兄ちゃんはあたしを受け入れて——その人形みたいに、手を繋いでくれたし。あたし、とっても嬉しかったんだよ。この時間が永遠に続けばいいって思った。今でも思ってる」

「……え、永遠に……」

「あたしはお兄ちゃんをずっと愛してる。お兄ちゃんも、あたしだけを愛してくれてる。あたしたちは愛し合ってる、永遠に——」

と、かなめは焦点の微妙に定まっていな目で見つめたまま——
傷ついた自分の手を、薄笑いしつつ撫でている。

数日後の夕方——アリアたちが退院した、との連絡がワトソンから入った。

元々ピンピンしてたから、病院には『強化合宿』とやらで居座ってたんだろな。
俺が師団の作戦上かなめを預かっている事は、ワトソンが説明してくれたらしいが……
かなめはアイツらの目の前で、俺との関係を誤解させるような行動をしている。

(その状態のまま、明日から一般教科の授業でアリアたちと顔を合わせるとなると……)
危険だろう、これは。どう考えても。

特にアリアは挨拶代わりに銃撃してきかねん。

というわけでまずは、ご主人様のご機嫌伺いをしなければ。

と、ドレイこと俺が電話をかけると、「あたしも話したい事があるから来なさい」とのご命令を賜った。

で、どこに居るのかと聞いたら……

「SSRの屋上にいるから」

との事だ

福祉力調査研究室

ああ……またしてもイヤな予感がするぜ。胃潰瘍になりそうだな。

あまりお邪魔したくないSSR棟にお邪魔して、なぜか手すりの柱がトータムボールになつてる階段を上り、なぜか魔法陣が描かれたドアを開け、屋上へ出ると……

夕陽の中に、何やら難しい顔をして目を閉じ、あぐらをかいているアリアと——

その傍らに立つ、SSR3年・時任ジュリア先輩がいた。

周囲のフェンスには、カモメが何羽かとまって羽を休めている。

「……」

クォーターのアリアよりずっと外国人っぽい、ハーフの時任先輩は——

白魚のような右手の五指を開き、アリアの頭に乗せている。

先輩は俺が来た事に気付いたらしく、瞳孔のハッキリ見える薄青の瞳をこっちに向けた。

「あ、えーっと……俺は2年の遠山です。その神崎アリアと同じクラスの……」

「静かにしなさい」

クールにそう返してきた時任先輩は、SSRの首席候補で——来年は、モスクワ大学に旧ソビエト時代からあるという超心理学科へ推薦入学する事が決まっている。

触れれば切れるような恰憫ないイメージのある人で、一般教科の成績も優秀なのだが……
ある理由により、みんなから避けられている人でもある。

「あつ、キンジ」

こっちはいま俺^{われ}に気づいたらしいアリアが、座ったまま目を開ける。

だからお前は……女子制服姿で、あぐらとかかくなよ。

短いスカートの中身が影になって助かったぜ。逆光じゃなかったらアウトだった。

「こら、集中しなさい」

先輩が女にしては低い声で命じると、アリアは再び目を閉じて何かを念じるような顔になる。

……珍しいな。あのアリアが文句を言わず、人の言うことを聞いてるとは、しばらく、俺が黙って立っていると……

はるか上空を飛ぶジェット機の音だろうか……キーン……と、耳鳴りのように小さな音が聞こえてくるような気がする。

「……神崎。元々ダメだったのがもっとダメになったよ。前頭葉正中部からFmθ波に近い脳波まで漏らして……好きな男子が来たぐらいで、そんなに心を乱してはいけない」
「は、はいッ？」

犬歯丸見せで大口を開け、先輩の方を見上げたアリアは——ぎゅいッ！
夕陽の中でも分かるほど、真っ赤になった。マバタキするほどの間に、

——俺の方を見て、先輩の方を見て、また俺の方を見て、目をアメーバ形にするほど

わぐわぐさせてる。あれは、アリアが声も出ないほどビックリした時の顔だな。

「——お前、そいつに抱かれるのが夢なのか」

先輩の言葉に——

ぎゃほんっ！ アリアはさらにもう一段階、赤面レベルを高めた。

まるでヒルダの三段変身（？）みたいだな。あの赤面癖。

（俺に……抱かれる？）

なんだそれ。

お姫様抱っこならした事があるだろうに。ヒステリアモード時の俺が、だけど。

あと取っ組み合いになった時は、よくアリアを抱えて投げ技を試みてるぞ。まあ毎回、返し技で投げられたり、噛みつかれたり、目突きされたりで不発に終わってるがな。

「~~~~~」

ほん、ほん、と、あぐらの姿勢のままジャンプして異議申し立ての意思を示そうとして
いる（が、やはり声は出ないらしい）アリアに、

「外見は子供っぽいのに、随分……ませた事を考える。視てる私まで恥ずかしくなるよ。そういう思念は、もっと成熟してから持ちなさい。そんな小さな体でそんな事したら、お前、壊れちゃうよ」

時任先輩が、呆れたように溜息をついた。

「ま、が、えつ、あたしは！ そんな！ 違う！ ハズレ！ ハズレ！ ハズレもハズレ、大ハズレですそれは！ それはそれはハズレ！」

ようやく声が出たアリアは、ばたん！

真後ろに倒れ込み、両手両足をジタバタさせ、ダダツ子モードで先輩を大否定してる。

これが……時任先輩が人に避けられる理由である。

幼い頃から超能力少女として故郷でテレビにも出ていた時任先輩は、脳波計と呼ばれる超能力——接触した人間の脳波から思考までをも読む能力を最も得意としている。

で、読み取った内容が本人に少しでも危険を及ぼす事（ちよつとでもケガをするとか）だった場合、その本人に注意をする自分ルールがあるらしいのだ。彼女には。

しかし、今のアリア同様——

時任先輩に思考を読まれた人は、よく「そんなことは考えてない！」と怒るらしい。

なので、彼女は嫌われ者の日陰者。SSRしか居場所がない、孤独な先輩なのだ。

「——今日は終了だ。神崎。お前、遠山が来てから——雑念が酷くて、視ちゃいられない。の律動を指標にアルファ脳波も視てたけど、ムカーブの極小から戻ってこない。つまり、まさに『心ここにない』状態だよ」

「いや、あのっ、ののっ、ノー！ ノー・ウェーイー」

タタ、イートムから立ち上がりかうとしたアリアは、こけっ！

起きようとしてミスリ、そのまま後ろにダイブするみたいに転倒してる。

何をそんなに慌ててんだよ。常軌を逸した転び方しやがって。

フェンスにとまってるカモメたちも、アリアを見てちよつと引いてるぞ。

「いいか、神崎。さっきも言ったが……お前がやりたいという心技は、強く念じればいいつてもものじゃない。対象物を自分の体の一部だと思って、手足を動かすようなイメージをするんだ」

「体の一部……？ えつと、じゃあ、それが実際に体の一部だったらどうなんですか？」
がば、と上体を起こして質問するアリアに、先輩は、

「より動かしやすいはずだよ。2年の星伽が使う鬼道術にも、それを応用して体の動きをアシストしている感じがあった」

「じゃ、じゃあ、体の一部……たとえば、髪の毛はどうですか？」

「髪の毛？ ああ。お前のその髪型だったら、そうだな——腕がもう2本あったり、翼が生えた人間をイメージしなさい。そのイメージはリアルであるほどいい。天使の像とか、仏像とかを見学して鍛えるのが伝統的なやり方で——」

「わ、分かりました。そういうイメージは既にリアルに持ってます。理子とヒルダの事を思い出せばいいんだわ」

「？」

「あ、いえ、こっちの話です」

「……この後は、食べたくなったものを食べることに。お前はまだまだ暖味な雷。何を原動力に力が花開くのかは分からない。だが、一種または混成型Ⅳ種の超能力者だった場合は——意識的であれ無意識にであれ——能力を使うと、体から何かを消費するものだよ。そして消費したものを摂取したくなる。どう？　今、何か食べたいか？」

「え、えつと……もまん……」

それはいつも食べたがつてるだろ。お前。

「もまん……饅頭か？　だとしたら糖分系かもね、神崎は」

と言うと時任先輩はアリアに背を向け、屋上のドア——俺の方を向く。

薄青い瞳の中で点みたく見える瞳孔が、水平二連銃のように俺を見据えた。

「君。失礼とは思わないから、どきなさい。私は男子の心なんか視ないし、視たくもないけれど——もし触れてしまつて、視たと思われたら不愉快だから」

時任先輩がそう言うので……俺は、迂回するようにアリアの方へ歩く。

彼女の能力がどの程度精密なのかは置いておくとしても……

ちよつと、かわいそうだな。時任先輩は。あれじゃあ日常生活もままならないだろう。そうして、出ていった先輩と入れ違いになる形で残つた俺は——

……いや、いや、いや、いや、先輩が口つたのはハズレだからね。あああたしは、やらしい

事なんか考えてない。やまれてこの力、考えた事もないんだからね。ハズレよ、ハズレ」

ハズレ、ハズレ、と繰り返しながら立ち上がったアリアの横に立つ。

そもそもアリアの頭の中なんかどうでもいい。

問題は、そこじゃなくてだな——

「——おいアリア。お前、何してたんだ。今の」

「思念動の練習よ。でも全然できないの」

……やつぱりか……！

ちよつと目を離してた隙に、俺が秘かに怖れていた事に手を出しやがつたな。

すでに打撃・斬撃・銃撃と品揃え豊富なこの攻撃のデパート娘が……さらに超能力まで入荷したら、攻撃の楽天市場になつちまうぞ。

ちなみにこないだ表を付けて数えてみたんだが、コイツは敵より俺に発砲した回数の方が多いんだからな。これ以上アリアに余計なスキルがついたら、命に関わるんだ。俺の。

よせよそんなの、と言つてもよすアリアじゃない事は知っていたが——

「よせよそんなの」

「と言つてよすあたしじゃないって事、知ってるでしょ？」

思つた通りのセリフが返つてきて、俺はうなだれる。

もう、俺にできることは……自分の戒名を準備しとく事ぐらいだな。遺影も撮つとこう。

「何で……そんな事に精を出してんだよ」

「キンジには教えない」

「おい、とアリアがソッポを向くので、俺は少し単刀直人に聞く事にする。

「かなめに仕返すするためか」

「……かもめ？」

アリアは何を勘違いしたのか、フェンスの上のカモメの方を見てる。

「カモメじゃない。かなめだ。ジーフォースの事だ」

と説明してやると、アリアは元々ツリ気味の目でギロリとこつちを睨み、

「へえー日本名を付けてあげたの。やつさしいのねエ、随分とお気に入りなのねエ、あのかつわいい中学生が。このロリコンっ！」

げし！

俺の靴を踏んできやがった。

「い、痛えなっ。しょうがなかったんだよッ。アイツは俺の妹を自称してるし、武偵高にまで通い始めたんだから。それがジーフォースなんて名乗ったら——」

「——ワトソンにも言っておいたけどね。アイツは、あたしたちを奇襲して、負傷させた。明確な敵よ。て、き！ それを、あんたらつたら……！」

ざろっ、とアリアは私怨龍（ミズノリウ）もりまくりのムードで赤紫色の瞳（ひとみ）を向けてくる

「聞けよアリア。かなめは、ジーサードが置いてった使者みたいな存在なんだ。お前たちを襲った後だって——武装解除して、お前たちを病院まで搬送するのを手伝いすらしたんだよ。ヤツらはまだ眷属（ブラス）でも師団でもない。それを師団に取り込むには——って、痛ッ！ 痛え！ よせって！ 腹パンすんな！」

ばかばこばかばこ！

「うるさいうるさいうるさい！ この裏切り者！」

と、アリアは俺の肝臓（かんぞう）やら胃袋（いぶくろ）やら狙いでショートフックをつるべ打ちしてくる

なので頭（かしら）を掴んで押しのけると、ぶんっ！ と、今度はミニおててのアッパークットが俺の顎（あご）スレスレで空振った。こうすると、リーチ差でアリアの拳（こぶし）は俺に届かなくなるんだ。

恒例のやり方でパンチを封じられたアリアは、フグみたいにはっぺたを膨らます。

「ふんっ。まあ、あんたはすういぶうんあの子（こ）がお気に入りみたいだし、ワトソンたちもすっかり怯えてるみたいだし——敵か味方かの議論は、するだけ平行線だわっ。もう繰り返さない。あたしたちは、あたしたちで判断して動くから、ベエーだ！」

「この、分（わか）らず屋（や）め……」

「それはあんたでしょッ！」

俺はアニメ声で返してきたアリアと、しばし睨み合う。

「ところで……あの子、いまだここに住んでるの」

「俺の部屋だ。流れで、俺が監視してる」

「やつつぱりねえエエ」

下あごを突き出すようにして、アリアはものすごい不機嫌な声を上げた。

「ジフオース——かなめ？　かな・め・ちゃん？　あのかつわいい妹さんがいる間、あたし、あんたの部屋には行かないからね！　敵とルームシェアなんてゴメンだわ！」

「なんでそんなイヤミしたらしく言うんだよ。ていうかそもそもあそこはお前の部屋じゃねえだろ。俺だって、かなめと一対一で暮らすのは不安なんだぞ。むしろバスカービルの誰かを、護衛に——」

そう俺が言った時、ばさつ、と一羽のカモメがフェンスから飛び立つのが見えた。

東京湾岸に生息するカモメは大きいので羽音も大きいから、俺とアリアは一日そっちを見てしまう。

まるで何か、危険を察知して逃げ出したようなカンジだったな。

これから……急に天気でも変わるのだろうか？

「キンジっ」

ぐい、と耳を引っ張られて、俺はアリアに向き直らされた。

「あ、あんたまさか、あの子にまで、へ、ヘンなことしたりしてないでしょうね」というアリアは赤面しつつ、犬歯を剥いている

「は、はあ？」

「してたら風穴じゃ済まさないわよつ。イギリス空軍に頼んで男子寮ごと空爆してもらからね！」

「日英戦争になるだろそんなことしたらッ！　あのなあ、アイツは——」

「だだだだってキキキキスしてたじゃない！　このド変態！　あ、あれはさすがに本気で引いたわ！　呆れるのを通り越してちよつと尊敬しそうなくらいよこの女つたらし！」

アリアは、ロー、ミドル、ハイ！　と、今度はキックを繰り返してやる。

いたつ、いたつ！

アリアめ、パンチは封じられると見て蹴り技に切り替えやがったな。

「あれはムリヤリ、いきなりされたんだ！　目の前で見てただろお前も！　それに——」

「あの理子でさえ『妹ととかキーくんマジ人間離れ人間』って言ってたわよ！」

なんだよ『人間離れ人間』って。

理子語はホントに分からねえな。

「ほらほらどうなのよ！　あたしにも、あたしにもしたくせに！　白雪とか理子とかレキとか、もう！　このキス魔！　あのあと、妹ちゃんとしてないでしょうねッ！」

だん、だだん！　と地団駄を踏んでキックの威嚇をしてくるアリアに、俺は……

「そ、それは……」

こ、困った。しちやってるんだよな。これが。
だが、あれはかなめに腕で拘束されていたから仕方なくした行為だし——
妙な気分にも、ならなかったんだ。

欧米人がするみたいに、親愛の情を示したような感じだった。少なくとも俺の方は。
まるっきり無罪とは言えないかもしれないが……釈明の余地はあるだろう。これなら。
アリアの胴回し回転蹴り刑、その後の風穴刑を回避するためにも、きちんと話そう。
「そのだな。してなくはないが、それはその、イギリス育ちのお前なら分かってもらえる
と思うんだが——」

「あ、あんた……！ ちょっと！ 出会って一週間で、どんだけ熱愛してんのよ！」

「最後まで聞けよ！ いつもの事ながら！」

「し、しかも、じ、じ、自分の、い、妹と……！」

びしい！ と震える指をこっちに向けて、腰を抜きそうになっているアリアに——

「だから、かなめは——あんなヤツ、妹じゃねえって言っただろ！ 俺はワケの分からん
自称妹に付きまとわれて、迷惑してんだよッ！」

俺が、そう叫んだ時。

——バキッ！

という物音が、屋上にある大型ラジエーターの裏側から上がり——

——バサッ！ バサバサバサッ——！

カモメたちが、今度は一斉に飛び立った。

何羽かは混乱するように俺たちのそばを掠めて飛んでいったので——

「——ひゃうっ!!」

アリアはビビって、びょん！ 俺の方に飛びついてきた。

がしゃ。前から抱きつかれた俺は、フェンスに背中をつける所まで後退する。

（……何だ、今の物音……？）

そう思って音源の方を見るが——

ボロいラジエーターには、別に何の異変もない。しばらく見ていても、何も起きない。
内側が壊れていて、異音がしただけみたいだな。

「お、おいアリア。離れろよ」

前にアリア、後ろにフェンス。これでは身動きができないのでそう言うが……

アリアは、俺の胸に顔を埋めたまま離れない。

この間のかなめの時と姿勢は似ているが、あの時よりしつかり捕まった感じだ。

「ちがう……」

アリアが、自分に言い聞かせるように呟く。

「……あたしが、悪いのかも。キンジは誕生日に指輪までくれて、あんなにハッキリ——」

あたしに、伝えてくれたのに……どうすればいいのか分からない、あたしが悪いんだわ」
「アリア……」

独り言してるので、俺が顔を覗き込むようにすると――

アリアは、少し気持ちを切り替えたように顔を上げてきた。

その表情は――マジメなものだ。

さっきまでの怒りを抑え、不安げな目で俺を見ている。

「……あの子……本当に、妹じゃないの？」

「なんで……お前までそんなこと言うんだよ」

俺が不機嫌そうに言うと、アリアは――

「キンジ。昔、地下倉庫でジャンヌと戦った時のこと……覚えてる？」

「……？」

「あの時――あんたは約束してくれた。『生涯、アリアを信じる』って」

「あ、ああ……覚えてるよ」

ヒステリアモードの俺が言った、死ぬほど恥ずかしいセリフだけだな。

「って、何で今その話なんだよアリア」

「あたしがこれから言うことに、なんの根拠もないからよ。ただの、直感だからよ」

「直感……？」

「あたし――あの子とキンジの間に……何か、強い繋がりのようなものを感じるの。この感じは、昔、カナに感じた気持ちと似てるのよ。あんなキレイな先輩があんたの……その、お兄さん？　だなんて、あたし、ちよつと未だに半信半疑なんだけど……でも、直感では納得がいつてるの。それと似た直感が、あたしに囁くのよ。ジーフォース――かなめは、本当に妹なのかもしれない――って」

バカ言え、と、笑に付したいところだが……

俺は、それができない。

探偵科の教科書に載っていたイメージとは大違いなので普段は忘れがちだが……

この神崎・H・アリアは――シャーロック・ホームズの曾孫。

イ・ウーで俺と戦った……そのシャーロックは、超人的な『推理』の能力ばかりが有名だが……実は、その推理のきつかけとなる『直感』に於いても卓越した人間だったのだ。

そして、俺は今までの経験で知っているが――

まず間違い無く、その『直感』は、アリアに遺伝している。

そのアリアが言うのだ。

かなめは、本当に俺の妹なのかもしれない――と。

「でも、カナと……かなめでは、あんたとの関係性が違うような感じがするの。あたし、自分の感じた事を論理的には説明できないんだけど……カナとキンジは、図形にするなら

大小の『相似形』みたいな感じだわ。同じ形だけど、組み合わせるものじゃない—

それは……まあ、なんとなくだが分かる。

兄さんは俺の能力を全体的に、そして遥かにレベルアップさせたような人だからな。

「でも、かなめ——あの子とキンジは、図形にするなら2つのコンマ型——巴形トキマタみたいに、組み合わせる事で正しい形になりそうな予感があるの」

「二つ巴——組み合わせる事で円を描く、不完全な形同上。」

俺とかなめが、そういう関係性……だったのか。

確かに論理的な話ではないが、アリアの話には……

何の根拠もないのに——なぜだろう。変な説得力がある。

なので少し考え込んでしまった俺の胸元を、アリアが掴んできた。

「——好きなの？ あの子のこと」

「あ……ありえん。そんなワケないだろ」

「じゃあ……」

「……？」

「じゃあ……このまま少し……このままでいて……」

アリアは俺に抱きついたまま、また、伏せるように俺の胸におでこをつけた。

なんだか拒絶するにできないムードだったので、俺はアリアから香る——甘酸っぱい、

クチナシのような香りを避けるように空を仰いだ。

夕焼け空では、上昇気流を捕らえて旋回しながら飛ぶカモメが舞っている。

「あたしも……少し、ハッキリさせる」

「……ハッキリ？」

また眩くらいたアリアに、俺が聞き直すと——

「し、し、下向きなさい。あ、あたしの頭に顔つけるくらい下」

何か、妙な命令をしてきたな。

「なんだよ。イヤだよ、お前の頭はいい……」

香りがするから、ヒスリかねないんだよ。と失言しかけた俺は、むしろ上を向く。

「あ、いや、人の頭に顔なんかつけたくないだろ。誰でも」

「……いいからっ、下向けー、下っ！」

右向け右！ みたいに言うが、こうなりや俺も意地だ。上を向いたままでいてやる。

「……」

「……」

そのまま、黙っていると——

「じゃあ……キ、キンジ」

少し震えるような声でアリアが言うので、目だけで下を見ると……

ぶる、ぶるぶる、と、アリアは実際に震えている。

どうしたんだ。伏せてるから見えないが、顔もまた赤くなってるみたいだぞ。耳とか、首の裏、後れ毛の辺りがカーッと赤熱してるし。

「じゃ、じゃあ、く、くつ、くつ」

「……？」

「くつひも、ほどこてるよ」

ものすごい棒読みで言われたアリアのセリフに、つい俺が下を覗き込むように顔を下げてしまった時――

アリアが、がばっ！

ぎゅーっ、と目を閉じたまま顔を上げてきて――背伸びして、その勢いで――

「……！」

「……！」

真っ赤な顔の、小さな口を――

俺の口に、押し当てた。

いつの間にか激しく興奮していたらしいアリアの、激しいほどに熱い体温が唇から伝わってきた……これも……



(キス……)

されてる。のか。

それが、後から分かった。

分かった時には、アリアはツインテールを翻^{ひるがえ}して俺^{おれ}に背を向けており——
100m走のような勢いで、屋上をドアの方に駆けていた。

「アリア！」

——どういう意味だよ！

追いかけようと踏み出すが、アリアは鉄砲玉のような速度でドアをくぐり、そのまま、
だだだだだ——

なぜか自分の左胸を押さえつつ、全力疾走で階段の向こうへと消えてしまった。

あの速さじゃ、追うに追えない。そもそも俺は、右膝^{みぎひざ}が痛くて走るのが遅いしな。

「……」

俺は口を手で押さえるようにしつつ、自分の心拍を確かめる。

アリアは俺の口を目視で確認せず、顔を顔面にぶつけるような形で不器用にキスして
きたので……いい、痛かったぞ。今のは。がちっ、って歯と歯がぶつかる音したし。

その痛みのせいもあり、数拍遅れたが——

……来た——来たぞ

あの、血の流れが

——ヒステリアモード——

やはり、アリアではなるのか。それも容易^{たやす}く、しかも強く。

パキパキと頭の中に知性の結晶が形作られていくような、脳全体が覚醒^{かくせい}していくような
感じがして……自分の五感が鋭敏になっていくのが分かる。

その中で更に目覚める、第六感のようなものが——伝えてくる。

——違和感がする、と。

さつき、カメメたちが逃げた物音……あの物音の事を、確認しなければいけないような
気がする。本当に、ただの故障音だったのかどうか。

そう思った俺は、自分でもいつの間にか分からない内に抜いていた拳銃^{べんじゅう}を手に……
屋上を歩き、ラジエーターの裏側に回り込んでいく。不測の事態に、警戒しながら。

「……」

だが、そこには人影はおろか猫の子一匹いなかった。

しかし……見つけた。異変を。

本来均等な髪形^{ひがた}の格子を描いているフェンスが、あちこち不均等になっている。
大きな菱形、小さな菱形、三角形のようになった所など……

何者かが、素手でフェンスを何度も何度も握るようになって歪^{ゆが}めたように見える。

これは明らかに人為的なもので、その行為者は、既に逃げている。
 こんなイタズラは俺も子供の頃にやった事があるが——回数が尋常じゃないな、これは。
 50箇所ぐらい、あちこち執拗に歪めている。正常な神経では繰り返せない回数だ。
 ……？

さらに、俺のヒステリアモードの目が——

その現場、足元、自分の影の下にもう一つの違和感を見つけ出した。

片膝をつき、指でコンクリートの床をなぞると……

不規則に……いや、そう見えて規則的に、あちこち削れているぞ。何だこれは。

何か器具を使って削ったようにも思えたが、違う。

恐らくこれは、人間が、床を——爪で削ったのだ。猛烈な力を込めて。

その削りクズとなったコンクリートの砂の様子から見て、つい今さっきやったようだな。
 ちよど俺とアリアが抱き合っていた頃から、アリアが逃げ出す頃まで——ずっと爪で
 描いていたのだろう。同じものを。何度も、何度も、繰り返し。

(文字だぞ、カタカナだな)

ウ……………？ キ？ リ……………？

自分の影のせいで判別がつかないので移動すると、血のような夕陽が床に広がっていく。
 照らされた文字が、床と——壁にも、無数に見えてくる。

ウラギリモノ ウラギリモノ ウラギリモノ ウラギリモノ ウラギリモノ

(何だ……これは？)

薄気味悪いな。誰だ。誰かが呪いの儀式でもやったのだろうか。

そうだな——そのセンかもな。

なんといっても、ここはSSR。そういう事をやりそうなヤツらの巣窟なんだからな。

不気味な光景を見たせいか、ヒステリアモードは比較的早めに解けてしまい……

男子寮に帰ると、かなめが衛星放送の野球を見ていた。

アナウンスが、英語だ。MLBのポストシーズン・マッチを観戦してるみたいだな。

「あーあ、ツ・ア・ウトだ。非合理的……包丁でハラワタ引きずり出しちゃいたい……」
 などと、こつちに背中を向けて妙な事をブツブツ呟いてるので……

「おい、帰ったぞ」

声をかけると、くるつ。

かなめは笑顔で振り返ってくる。

「あっお兄ちゃん、おかえりなさい！ ゴハン、できてるよ」

見ればガラスのテーブルの上には、キャラメルを大量に食べたあとがあった。

このあいだ俺がコンビニで買ってやったやつと同じキャラメルだな。

なんか、ヤケ食いでもしたような感じだ。そんなに野球がつまらなかつたのか？

「おい、かなめ。メシ前なのに……こんなものばかり食べるなよ」

「えっ、どうして？」

「どうしてって、体に悪いだろ。こんなに大量に食べたなら」

「ジャケットを脱ぎながらそう言い、俺が振り返ると――」

かなめは、うるうる……と、感動したような目でこつちを見ていた。

「な、なんだよ今度は」

「うれしいの。やっぱり愛はここにあるって感じたの。そうだよ、あたしが一番いいのは間違いないんだ。一番若いし。お兄ちゃんは絶対、誰よりあたしを愛してくれてるはず」

何やら半ば自分に言い聞かせるようにして、妙な結論に至っているかなめに……

「いや……何がどうして今そうなったんだ。お前の中で」

「だって、あたしの体を氣遣ってくれたから」

そんな些細な事をまた拡大解釈しているらしいかなめは……

もじもじ、とソファアの背を揉むように指先を動かしている。

その指先には、また青創膏が貼られてるな。今度は爪という爪、全部に

「おい 指 どうしたんだ」

「あつ、あつ、これはね」

かなめはそこで一旦、俺から目を逸らし――

「お……お料理してるときに、ケガしちゃったんだよ」

「料理で、指先をそんなにケガしたのか？ 大丈夫かよ」

「うん、大した事ないから。あはは。平気だよ。平気だってば」

照れくさそうに笑いながら、かなめはばたばたと手を振る。

ほんと、器用なんだか不器用なんだか分からないヤツだな。

で……

帰ってきた時にニオイで分かっていたが、晩メシはまたカレーだった。

かなめはしょっちゅうカレーを作るので、

「お前、カレーが好きなのか？」

と、一緒に食べながら聞いてみると……

「嫌いじゃないよ」

「そういうレベルか？ 2日に1回は作るだろ。それも毎回、同じ味だよな」

「うん。だって、最初に作った時――お兄ちゃんが『うまいよ』って言ってくれたから」

「そ、それでかよ。俺のセリフなんか、よく覚えてたな」

「お兄ちゃんが言った事とか、した事は、聞いたり見たりしたら、ぜーんぶ覚えてるよ」
かなめは幸せいっぱい、といった感じでカレー皿に目を落とし……

「あの時の言葉、とっても嬉しかったから……だからあの時と完全に同じ味を、同じ具材とルーで再現してるの。1gの誤差も無いように作ってるからね」

さりげなく、凄（すご）い事を言ってるな。

「1gの誤差もって……よく出来るな」

「あたし、絶対、忘れないタイプだから」

そして顔を俯（うつむ）かせたまま、栗色（くりいろ）の前髪の間から上目遣いでこつちを見てきた。

その日は——前髪の陰（かげ）になって、少し、睨（にら）むような感じでもあるな。なんで睨むよ？

まあ、かなめは情緒不安定な子だからな。いちいち気にしてもしょうがないか。

俺（おれ）は「へえ」と一言だけ答えて、確かにうまいカレーを食べ続けるのだった。

武偵（ぶてい）高（こう）での一般教科の授業は、普通の高校より微妙にレベルが低い。

これは通ってる生徒の頭脳がアレなせいもあるが、そもそも武偵という職業においては『何でもできる』ゼネラリストより『何かが突出している』スペシャリストの方が流（なが）になりやすいためだ。なので専門教科に重点を置いた教育が行われる結果、そうなる。

流（なが）って、武偵高に3年間どつぷり浸（ひた）かれば……普通じゃない人間（にんげん）のできあがり。流（なが）し

効かない米（こめ）が約束（よそ）される。例えばアリアやレキは武偵としては流（なが）たが、将来、普通の会社でOLなんかやらせてみる。うまくいかないに決まってるよ。

普通の大人を目指す俺（おれ）が転校したい理由は、その辺に因（よ）るところも大きい。

（レベルはともかく、一般科目はちゃんと出来るようにしておかないとな……）

などと比較的マジメに受けていた、英語の授業中……

——びんっ、ころころ。

それをジャマするように後方の席から何かが飛んできて、俺（おれ）の机の上に転がった。

「？」

つまみ上げてみると、小さく丸めた紙（かみ）だな。

この手触りは……

武偵が機密を簡易（かんい）に遣（は）り取りする時に使う、アルカリ処理をした水溶性ペーパーだぞ。

そいつをコッソリ広げてみると——

「3の正体が割れた 情報共有するから17時に美術準備室へ来てくれ

P.S. Cごいにリハビリをやらないか。」

Psychiatron

などと書いてあったので、ワトソンの席の方を振り返ると「バカ、前を向いていろ」と

いう感じに眉を寄せてきやがる。

ちなみにワトソンが紙を投げてきたときアリアは鼻をかんでおり、理子は寝てた。ので、2人ともこの遣り取りには気づいていなかったが……

ワトソンお前、なんで紙で連絡してくるんだよ。メールしてくればいいのに。

と、カーテンを閉め切った薄暗い美術準備室でワトソンに文句を言ったところ、
「キミはボクのメールをよく無視するだろう」

ちよつとむくれて、ぼす。

ワトソンは女子制服の入った紙袋で、俺の脚を叩いてきた。

コイツ。みんなの前ではエリートぶってキリツとしてるくせに、俺と2人きりになると妙にガキっぽいんだよな。こういう動作。

俺に対してはなあなあというか、馴れ合いの雰囲気を感じるぞ。ナメやがって。

「特にリハビリの文字があると、キミは必ず逃げるからな」

ちよつと頬をピンクに染めて怒るワトソンの言う通り……

ワトソンは俺をこの「リハビル」なる行為にしつこくメールで誘っており、俺はそれを何度もスルーしてきている。

リハビルとは……女子でありながら男子として武偵高に通う「転学生」のワトソンが、

いずれ皆に自分が女子であることをカミングアウトするためにわう社会復帰訓練みたいなものだ。ワトソン曰く、あまりにも女というものに対して無知すぎる俺が女子を理解するための訓練も兼ねてゐるらしい。

で、何をさせられるのかというと……

この部屋に2人っきりで閉じこもって、ワトソンは女の子らしくする『女の子訓練』、俺は男の子らしくする『男の子訓練』をする。

要は、低レベルなロールプレイ。オママゴトだ。高2にもなつて。

そもそも、正直なところ――

俺はこんな狭くて薄暗い密室で、女子と2人っきりになんかなりたくない。

だから一生懸命スルーしてきたのに。空気読めよワトソン。

しかしワトソンはこのリハビル行為になぜ異常に高いモチベーションを持っており、メールで誘っても逃げられると悟って以降、あの手この手で俺をムリヤリこへ連れ込むようになった。今回みたく、別の用事を組み合わせたりしてな。

そういった形で、俺はかれこれ5、6回はこのリハビルに付き合わされている。

「リハビルするのは分かったから、情報共有を先にしろ。さっきの紙、数字の『3』ってのはサード――ジーサードの事だろ――」

「そうだ。じゃあ、後でちゃんとリハビルに付き合うんだぞ。ボクはずっと楽しみにして

「ただからな」

俺に釘を刺したワトソンは、鞆に手を突っ込んだ。

そして、A4のファイルを取り出して来る。

「キミが預かっているジーフォース——かなめの方はともかく、ジーサードの方は正体かは判明したんだ」

「情報科にでも聞いたのか」

「いや。ボクに聞き覚えがあつたんだ。それでリバティ・メイソンのロンドン本部、グランド・ロッジに問い合わせしてみた。そうしたらアメリカ支部の『非翼賛者名簿』——

『リバティ・メイソンのエージェントが勧誘したものの、会員にならなかった人物』のリストに、ジーサードの名があつたんだよ。彼は比較的、アメリカの武偵業界では有名人らしくて、詳細も準機密扱い程度だった」

「有名人……？」

「うちの支部でも、すぐ資料を出せるほどにね。これはその一部だよ」

と、ワトソンが見せてきた写真には——

ジーサードと思われる男が映っていた。

黒いスーツを着てサングラスをかけているが、この風体は間違い無くアイツだ。

……えっ、おい……これ、冗談だろ……っ

だが俺が目を見張ったのは、ジーサードの姿ではない。

その横で、黒塗りのロールスロイスに乗り込もうとしている人物にである。

これは……アメリカ合衆国、第44代大統領……バラク・オバマ。その人だぞ。

さりげなく彼の頭部と左胸を守っている立ち位置から考えて、ジーサードは、彼を警護しているのだ。この写真の中で。

「ウソじゃない。アイツは元々、アメリカの武偵だったんだ。それもSランクより上の、Rランクに格付けされていた」

「R……ランク？」

「知らないのかい？ 日本人も1人いるから、知ってるものと思つてたのに。いるんだよ。世界に7人だけ、『R』にランク付けされた武偵が。たいてい各国の首脳や王族が自分の専属武偵にしてしまうから、Rの頭文字を取ってRランクと呼ばれている」

Sランクよりも上の——Rランク武偵。

そんなヤツが、いるのか。この世には。

しかし、世界に7人だけ……どんだだけだよ。

Sランクだって、世界中の武偵を合わせても712人しかないんだぞ。

「Sランクとは特殊部隊1個中隊を相手にできるという評価だが、Rランクは1個大隊と戦えるという評価になるんだ。極小さな国なら1人で制圧でき——」

「あー、もうカンペンしてくれ。空恐ろしい説明なんかされなくても何となく分かつてる。ジーサードが強いって事は。チクショウ……なんでそんな強いヤツがいるんだよ……」

ゲンナリする俺の前で、ワトソンは英文の資料をめくる。

「詳細は不明だが、ジーサードは人工天才——人工的に作り出された天才なんだそうだ」「人工的に……天才？　おい、なんだそれ。それじゃあまるで……」

——聞き覚えのある話じゃねえか。

という俺の表情に気づいたらしく、ワトソンは一つうなずく。

「イ・ウー——二次大戦後、潜水艦としてのイ・ウーは逃亡したが、その思想は計画書と共にドイツから連合国に渡ったんだよ。それが今なお、アメリカで研究されているんだ。彼らは『ロスアラモス・エリート』と銘打って、科学的な手法で天才を作ろうとしてる」

イ・ウーのアイデアを……踏襲したような機関か。

それも比較的オカルト寄りだったイ・ウーとは色違いの、科学的なアプローチで。

「だけど、ロスアラモス・エリートの成功例は少ない。というか、ゼロらしい」

「ゼロ？　サードは成功例じゃないのか？」

「初めは成功とされたんだ。IQは290。ロスアラモスの研究機関では、教員を生徒にしてしまうほどの学習能力を見せたそうだよ。運動神経も超人的で、非公式記録とはいえずオリンピック記録を幾つも塗り替えたらしい。それも、十代前半で——」

「大成功……ねえか。大成功……って秘めんなら？　エリート中のエリートだ」

「その辺まではね。だが、ある時——急に、おかしくなったらしい」

「……おかしく？」

「資料では『発狂した』って書いてあったけどね。生まれ育った研究所から脱走したんだ。厳重に警戒していた完全武装の軍人たちを、素手で全員戦闘不能にさせてね」

武装軍人を、素手で……って。

なんちゅうヤツだ。

しかも頭がおかしいのか。難物中の難物だな。

「その後、サードにはアメリカ政府から一流の暗殺者が向けられた。何人もね。だが彼らでさえ、ほとんど全員、サードの居場所すら掴めなかった。何人かはサードまで辿り着いたんだが、そっちは1人も帰ってこなかったらしい」

「……殺られたのか」

「いや。全員、サードの手下になってしまったんだ。彼にはある種のカリスマ性というか、人を惹きつける不思議な魅力があるんだ。そこは少し、キミに似ているかもしれないね」

「一緒にすんなよ。俺にそんな性質はない」

級も言ってたが、たまにされるんだよな。そういう勘違い。俺、友達すら少ないのに。

「——ジオ品川から武偵高に帰る際に車を運転していた男も、サード側に寝返った1人だ。」

だから、暗殺者を送り続けてたらサードに仲間が増えるだけ……と気づいたアメリカは、暗殺計画を中断して、交渉・説得しようとしているそうだよ。今も、なお」

アメリカでさえ手に負えない、『人上天才』……か……

そんなの、偏差値すら平均以下の俺たちの手に負えるワケがないぞ。

確かに玉藻たちの言う通り、正面から戦うのは良くないな。ヤツらとは。

今さらながら、ようやく腑に落ちたぜ。

「ジフォース——かなめは、サードが研究所から脱走した時、一緒に逃げた人工天才の1人らしい。ただ……まだ育成中だったらしくて、社会的な記録はなかった」

まあ、なんとなくそんな所だろうとは思ってたけどな。名前の共通性から。

「……なんでそんなヤツらが『極東戦役』に首を突っ込んできてんだ」

「そこまでは分からない。目下、調査中だよ」

「……」

「情報共有は以上だ。というわけで……じゃあ、リハビリに移ってもいいかい」

「……」

「リハビリに移っても、い・い・か？」

ボール遊びをしてくれない飼い主に怒る仔犬みたいな態度になったワトソンに、

「あ、ああ」

少し考え込んでしまっていた俺は、顔を上げる。

まあ……情報ももらったわけだし、俺もホイホイここまで来てしまったわけだし……

今日は、リハビリに付き合ってやるとするか。

「おほんつ。では今日のプレイだが、部活動もので——ボクが女子マネージャー、キミが選手という設定はどうか。シナリオはちゃんとノートに書いてきたんだ。セリフもね」

「やる気ありすぎだろお前……というかロールプレイって言えよ、ちゃんと。プレイとか略すと何かヘンな感じに聞こえるだろ」

という俺の抗議は、やる気満々のワトソンには聞こえない様子である。

「トオヤマは何部がいい。ここはベタに乗馬部にしておこうか」

「どこがベタなんだ。何部でもいいから、さっさとやるぞ」

「よし。じゃあトオヤマ。ドアの方を向いていろ。着替えるから」

と、言つて紙袋からセーラー服を出すワトソンちゃん君に背を向けると……
しゅる、しゅる。

ワトソンが、服を脱ぎ始める音が聞こえてくる。

一度こいつの暴力に屈して見てしまったから知っているが、ワトソンは男子制服の下に下半身だけ女ものの下着をつけている。

なので、今は……その……それが、丸出しなんだろうな。

この薄暗い部屋の中でも眩しいほどに白かった、あの——
 (い、いかん……ッ)

妙な記憶が甦ってしまいそうだ。

いわゆる『思い出しヒス』で、自家発電的にヒステリアモード化したらバカバカしい。なんとかして——気を紛らわそう。

ドアの汚れとか、鍵穴を観察するんだ。意味は無くても。

と、俺が何の特徴もないドアを見ると……

(……ん?)

鍵穴から漏れ入る光が、今、微妙に揺れたような……

そしてさらに——ギリギリ……

という、菌ざしりみたいな音も微かに聞こえたような気がする。ドアの向こうから。

(誰か、ドアの前にいるのか……?)

そう思った俺は腰を落とし、鍵穴から廊下の方を見た。

穴は狭く、廊下全体の様子は分からないものの……

少なくとも、ドアの前には誰もいない。ただ、誰かが通っただけかもしれない。

とはいえ気配がした事は確かなので、リハビリは早く済ませたいところだ。

もういいか?

そう背中越しに聞くと、ワトソンは——

「ま、まだまだよ。スカーフをしてたら、下着のホックが外れたつ。アンラッキーだ」

よ、余計な実況中継をすんじゃないやねえよ。

「……よし、もういいよ。んん……足元がスースーして落ち着かないね、スカートは」
 ようやくそう言ってきたので——

だるまさんが転んだ状態の俺が振り返ると、ワトソンはセーラー服で女装していた。

正確に言うとうんた女子なので普段男装してるわけなのだが、感覚的には逆に思える。

(しかし……改めて見ると、ホントに女子だなあ……)

その健康的な脚線美。普段スポンで隠してるのが勿体なくらいだよ。

「……なんでジロジロ見るんだ、トオヤマ。あつ、いや、いいんだ。ジロジロ見てくれ。ボクは女子なんだから、そういう視線にも戸惑ってはいけない。キミはボクを好きなんだからね。表には出してないけど、内心は」

「な、なんだよそれ」

「シナリオ上そうなってるんだ」

ワトソンはそんな事を言いつつ、ばし、とノートを指で弾く。

「なってるも何も、お前が書いてるんだろそれ。なんでよりによってそんな事を書く」
 「いい、いいだろう別に! プレイ内容ぐらいボクの好きなように書かせろっ!」

と言うワトソンちゃん君の足元は、微妙にボクシングの姿勢に近くなっている。
殴られたらたまらない。ここは唯々諸々と従っておこう。

「……で、何をする。今日は」

「まずはいつも通り、スモールステップ訓練をしよう」

スモールステップ訓練とは、恐怖症を克服するための心理学的手法を元にしたもので……苦手な物や行為に少しずつ、段階的に近づいていく訓練のことだ。

ワトソンの場合、女子としての自分の姿を近くから見られても焦らないようにするのがその目的である。

最初は1mぐらいの距離で俺と普通に会話できるようにする訓練だったが、回を重ねるごとにその距離を75cm、50cm、30cmと段階的に縮めている。

「この前は靴先と靴先が5cmの所まで女子として近づけたから——今日は靴をくつつける。そこまでいければ、ボクも相当なものだろう」

何がどう相なんだろうな。

まあいいか。好きにさせとこう。早く終わらせるためにも。

「じゃあ、ほら。来いワトソン」

「う、うん。逃げるなよ？ あつ、じゃなくて——じゃあ、そこで立っててね、トオヤマ……くん」

「……女喋りしただけで、ワトソンは頬をピンクにしつつ……」

地雷原でも歩くかのような足つきで、1歩、2歩と、俺に近づいてくる。

ゆら、ゆら、と臍脂色のスカートが揺れて……

見れば、その靴も少しブラウンがかった女子用の学校指定靴に履き替えているな。

「……い、行くよ、トオヤマくん」

黙って立っていると、俺の真ん前まで距離を詰めてきたワトソンは……

最後に、意を決したようにもう一歩踏み出し——

俺と靴を接触させる、というか微妙に足を踏むぐらいのところまで詰め寄ってきた。

「……」

「……」

俺より背の低いワトソンの頭は、俺の顎の辺りにあるので——ショートカットの髪から、高まつたらしい体温に乗った……シナモンのような香りがする。

(……う……)

これがワトソンの危険なところだ。

普段男子だと認識しているせいで、こういう女子らしさを感じさせられると……

異常に、可愛く感じてしまう。

たとえば理子と比較すると——あいつは普段から120%女子女子しているから、出現

した段階から俺も身構える。その身構えがあるから、仮に近寄られても我慢ができるのだ。そうして、ヒステリアモードに繋げないという対処手順が身についている。悲しい事に。

だがワトソンに対しては、その身構えるタイミングが掴めない。

普段男として暮らすワトソンには、俺の方に油断が生じてしまう。どうしても。

そこに、ふとした瞬間に女らしさを感じさせられると――

今みたいに、いきなり、体内の血流が危険域を掠めるハメになるんだ。

「……トオヤマ、くん。こんにちは。今日は馬たちが元氣だね」

黙って俺の真ん前でモジモジするワトソンが、挨拶してくる。

このモジモジ感がまた、女の子らしくてかわいい。ヤバイ感じだぞ。

突飛な行為で奇をてらうエンターティナー・理子と違い、いかにも年相応の女子っぽい。

落ち着け……落ち着けよ、キンジ。

ここではいっぺんヒスってるんだ。同じ轍を二度踏むな。

「いや、その……大丈夫か、ワトソン。やつぱりゼロ距離はキツくないか」

「大丈夫だよ。な、なんだか気持ちいいぐらい。あ、あと、前言ったけど、この姿の時は

……『エル』って、呼んでよ」

「あ、ああ。すまん、エル」

「きよ、今日はボク、いけそうな気がするよ　がんばる」

「俺も頑張ってる」

ヒステリアモードにならないように、な。

深呼吸して心を落ち着けよう、と思い、すう――と息を吸ったら……

ああ逆効果だッ。ワトソンの甘い香りを胸一杯に吸い込んだ。何やってんだ俺は。

今の自爆で、甘くだが……ヒ、ヒステリアモードに……

「よし――今日は、するよ、トオヤマ」

「なにをだッ」

「安心してッ！」

「は!？」

「頬――ほっぺたにするからッ。リ、リ、リップにはしないッ。それは次回ッ」

「だから何を――」

と再び訊いた俺の頬に、真っ赤になった顔を上げたワトソンが――チュッ――

と、小さく、唇をつけた。

………

二度ある事は三度ある、ってヤツか、これ。

かなめ、アリアと来て――微妙に変化球ではあるものの――ワトソンにまでされた。

今月、もう3人目だぞ。どんだけ大物なんだ俺は。

「……ッ……！」

「で、で、できた！」

ワトソンは心から嬉しそうに、俺に抱きついてきた。

やはり女子であるワトソンの、柔らかな腕や胸、腰が俺の体に密着してくる。

「できたよトオヤマッ。やっぱりキミとリハビリして、正解だった。実際初めてしてみて分かったけど、こ、これはなんというか……こ、心がフワッと、幸せになる行為なんだね。女子らしさを身につける、大きな鍵だよ。もつと——もつとしよう」

などとまた、頬に口を付けてきやがる。チュッ、チュッ、と、何度も。

「よ、よセッ、1回でいいだろッ」

「もつと、もつとだよ。トオヤマ、好き、好き——って、シナリオに書いたから言う」

こ、こんな部活があつてたまるか。馬はどこ行つたんだ。

理子や白雪のような色っぽいムードではない、子供っぽい感じはするもの——逆に、そんなワトソンが妙に可愛いくて、俺は——

ワトソンを抱きつかせたまま、甘ヒス——

甘くだが、ヒステリアモードに、なっちまった。

——その時。

やや鋭敏になつた俺の聴覚が——

——ギリギリギリギリ——

また、さっきの歯ざしりのような音を捕らえた。ドアの向こうから。

それに振り返ると——鍵穴に、誰かの目が——！

「——待て、エル——エルッ」

「トオヤマ、トオヤマ」

「違う、今のは呼んだんじゃない。落ち着け、リハビリの成果が出て嬉しいのは分かったから」

「……？」

俺はワトソンを、ぐいつ。お姫様抱っこして、ヴィーナス像の陰まで連れていく。バレないように横目で見ると、鍵穴の日はまだ室内を覗いてるぞ。

ギリギリ……という謎の音も、また聞こえた。やはり歯ざしりのようだ。

あの穴からだとも内部の様子は完全には分からないと信じたいが、少なくとも男女が逢ひ引きしているようなこの光景は認識されてしまっただろう。

きよんとしているワトソンの耳元に、俺は無声音で——

「誰かが覗いているッ。リハビリは中断だ、すぐ着替えろ」

「——な、何だって!？」

ぽふんっ！と頭頂部から噴火するように赤面したワトソンは——

わたわたわた、と、さつき自分の男子制服を入れていた紙袋を引っ張りよせた。

「——急げッ。速やかに廊下を確認するぞ」

「と、とと、トオヤマッ。手伝つて、て、て、手が震えて、着替えられないよう」

半ベソで言うので、俺はできるだけワトソンの体を見ないようにしつつ——紙袋に入っていた、男子制服のワイシャツを出してやる。

慌てるワトソンがセーラー服のブラウスをモゴモゴと脱ごうとする間に、顔を背けつドアの方を改めて確認すると……

向こうもこっちが気づいた事に気づいたらしく、鍵穴から覗く目は消えていた。俺の耳が、渡り廊下の方へ——誰かが駆けていく微かな足音を捉える。逃げたな。

(悪趣味なヤツめ……)

何にせよ、男女が物陰でコソコソと何かやってるのを見つけたら……

普通は見えて見ぬフリをして、そっとしておいてやるのがマナーでもんだろう。

詳しく説明はしてやれないが——俺たちは病人みたいなもので、その病を克服しようといらしくリハビリしてたとこなんだぞ。それをジロジロ覗きやがって。

「すぐ退却するぞワトソン。いまノゾキ魔はいないみたいだが、誰か呼ばれたら面倒だ」

「あ、う、うん」

ワトソンは、ほぼ男子の制服に着替え終えたようだったので——

俺はワトソンが脱いだスカートを紙袋に突っ込み、震えているワトソンの手を引っ張り上げてドアの方に向かう。

そして大急ぎでドアを解錠し、ガラッ、と開く。

その際、ワトソンが少し出るのに抵抗するような動きをした。

「何やってんだ、行くぞ」

「ま、待つてくれ、トオヤマ。ボク、まだ襟が整ってない……!」

左手で男子制服の襟首を整えつつのワトソンは——ワイシャツもズボンの下に半分しか入れていない、乱れた姿だ。しかし背に腹は代えられん。

そう思つて、美術準備室からワトソンを強引に引っ張り出した時——

「えっ、遠山君……と、ワトソン君?」

ちようど今、階段を上つてきた所らしい——俺たちのクラスメート——

強襲科のイケメン男子、不知火と……ハチ合わせ、しちまつた。

不知火は——

思いつきりビククリした目で、こっちを見てる。

美術を選択している不知火は、エッチング用の銅版を何枚か抱えていた。先生に頼まれ、教材を運んでいるところだったらしい。

不知火に気づいたワトソンは、本能的に……小さく見せる下着とサラシみたいな布で

（アリアと逆の）偽装をした平たい胸を、さらに腕で隠すような仕草をする。その服装は、さっきまで脱いでたのがバレバレな状態だ。

言葉が出ない俺と、半泣きで俺の陰に隠れようとするワトソンを見て……不知火は……えーっと……

この状況が何なのか——それを聞いてもいいのかどうか、迷う顔をした。

「……ッ……」

俺は石膏像のように固まりつつ、甘ヒス状態の頭で考える。

さっきのノゾキ魔は渡り廊下の方に逃げていったから、コイツではないんだろうが——（これはこれで、重大な問題に発展しかねんぞ……！）

その時、俺の脳内に——

和服を着た不知火名人と遠山竜王が、将棋を指しているイメージが浮かんだ。

盤上は既に、不知火の大攻勢。攻めの不知火・受けの遠山といった状況だ。

現実の俺が助けを求めるようにワトソンに振り向くと、ワトソンは俺の背に額をつけるようにして顔を隠そうとしていた。どうやらコイツはパニックになると電源を切ったみたいなんだまわりモードになって、人に物事を任せる傾向があるらしい。ズルい女だ。

（お、俺とワトソンの状況を客観的に見ると、マズい。マズすぎる……！）

さきほど不知火から見えた光景は、こうである。

人けのない選択教科棟、その狭苦しい美術準備室から……

美術を選択していない——つまり、ここに正當な用があるハズのない俺とワトソンが、2人で出てきた。

しかもワトソンは、どうやら中で服を脱いでいたらしい。

この時点で、将棋でいえば俺の飛車・角は不知火の手に落ちている。

いや、現実の事実……俺が準備室に隠れて『女子の服を脱がせて、何かやっていた』。それだけなら百歩、いや、千歩譲れば——成立しない話ではないだろう。

断じてそんな事はしたくないが、いわゆる男女の密会みたいな行為としてなら、成り立つ。ごまかしが効く。

——しかし。しかしである。

不知火は、ワトソンが女である事を知らない。

男だと思っているのだ。

つ、つまり、俺は美術準備室で——『男子の服を脱がせて、何かやっていた』。ってことになっちゃうのだ！ 不知火から見れば！

（詰んでるだろ……これはッ……！）

俺の脳内将棋で、金将・銀将が全て不知火に取られてしまふ。

ワトソンの美少年っぷりは有名だ。文化祭の変装食堂でコイツがセーラー服を着たとき

なんか、多くの男子生徒が狂喜乱舞した。いわば、男子にモテる男子（実体は女子）。

それにいち早く手を出したのは、『たらし』の悪名高い、この俺。つまり遠山キンジは、高2にして早くも女に飽き、美少年まで味見し始めた——

——こういう筋書きなら、合点がいつてしまっただろう。不知火の中では、脳内で、俺の桂馬・香車が消えていく。

さらにワトソンは俺に手を引かれて仲良く出てきた。これはつまり2人の行為が同意の上に行われていたと解釈できる。そしてワトソンの制服が着崩れているのは、その行為がハードな内容に及んでいたからだとも見える。

つ、ついに、俺の歩までもが全部無くなったぞ。将棋盤から。
(な、何か言い訳しないと——)

玉将1枚になってそれでも逃げ回る見苦しい遠山竜王は、甘ヒスの頭で——『俺は来年から美術を選択する。その予習として人体のデッサンをしていた。ワトソンはモデル役』とかいう作り話を苦し紛れに考え出す。

いや、これは苦しすぎるだろ。我ながら。だが甘ヒスだとこの程度しか思いつかん。

風魔の時もこんなレベルの作り話をしたもんだが、あれは風魔がアホだから話を通ったんだ。不知火は頭がいい。通らんぞ。こんな話。

だが何の手も打たない時間が長いと、それこそ時間切れ負けになる。

い——言うんだ俺よ！ 男は度胸、何でも試してみるのさ！

「し、不知火っ。聞けっ、なぜ男同士でこんな所にいたのか説明するとだな——」

テンパった俺が切り出すと——

不知火は銅板を抱えたまま、スッ——

片方の手のひらを、俺の方に向けた。その先は言わなくていいよ、と言うように。

そして武偵高には珍しい人格者らしい気遣いっぷりで……なんと……

「大丈夫。ポビュラーじゃない事だし——誰にも言わないよ。約束する」

頬を引きつらせつつも、ニコッ、と……

微笑んで、くれた。

完全に、俺とワトソンの関係を誤解しつつも……禁断の道を行く2人を、海よりも広い心で受け入れてあげようという、優しい笑顔である。

まあ、引いてるのは隠しきれておらず、その指先は小さく震えてるけどな。

俺の脳内で、遠山竜王が完全に逃げ場を失い——「ありません」の一言と共に頭を下げ、投了するイメージが流れた。

「ト、トオヤマ、行こう」

今さらようやく喋ったワトソンに、背中を押されつつ……

真っ白になった俺は、選択教科棟を後にするのだった。

5弾 サプライズ・ローズ



ワトソンのボルシェで男子寮に帰る間、俺とワトソンは気まずくずつと無言だった。実際にクラスメートに逢い引きを目撃されたカップルも、こんな感じになるのかな。ちなみにワトソンは立ち直りが早く、ゲツソリする俺に「シラヌイは誰にも言わないと約束してくれた。だから心配いらないよ」などと慰めてくれてさえない。

まあ、それには同意だけだな。不知火は口が硬いし。

しかし……これから俺、不知火にどんな顔して会えばいいんだよ。あいつは数少ない、マトモな友人の1人なんだぞ。あとは武藤ぐらしいしくないんだ。ていうか今後、武藤と俺が仲良くしてたら、それを見た不知火はあらぬ心配をするだろうよ。ハハハ。

などと自分を嗤いつつ、男子寮の前で車から下ろしてもらい――

5階の自室に辿り着くまでに5回ほど倒れはしたものの、なんとか、玄関に入る。買い物にでも行ったのか、かなめはいなかったの……

俺は這ってソファまで行き、拳銃をいじくりつつ『これで死のうと思えば死ねちゃうんだよなあ』などと危険な事を考えているところ……

心が現実逃避しようとしたのか、眠くなってきたな。甘ヒスになった後の眠気もあるの

かもしれない。終わると、眠くなる事が間々あるからな。ヒステリアモードは。

――まだ6時だが、少し寝るか。もう起きてるのもしんどいよ。

……スリーアウト……

……トン・トン・トン・トン……

という声と、まな板の上で何かを切る音で……目が覚める。

(……?)

少し頭を起こして台所を見れば、かなめが帰ってきていた。

カレーのニオイがする。料理をしてるんだな。

時計は……7時。1時間ほど寝ちまってたらしい。

「……あつ、お兄ちゃん。ごめんね、起こしちゃった?」

千切りにしていたニンジンサラダに盛りつけつつ、かなめが申し訳なさそうにこつちを向く。

「いや、いいんだ。ヘンな時間に寝ちまった俺が悪い」

寝た事で少しは気分転換できた俺が、体を起こすと――

かなめは包丁をまな板に置き、手を洗って……こつちに歩いてきた。

そして、ぽふ。俺の隣に座って、えへへー、と笑顔でこつちを見上げてくる。

「……なんだよ」

「ちよっと、お喋りしてもいい？　かわいい妹との会話タイムだよ」

「かわいい妹って……自分で言うか？」

「この部屋、お兄ちゃんの新オイがする場所を全部探ったんだけどね」

「俺の発言をスルーすんなよ。しかも真顔でサラッと気色悪いこと言いやがるし……」

「その、お兄ちゃんは……エッチな本とか、持っていないの？　全然無いんだけど」

な……何だよッ。

唐突に、妙な事を聞いてきやがるな。こっちは心が疲れてるんだ。勘弁してくれよ。

「持ってねえよ」

誰が所有するか。そんな空恐ろしいアイテム。

なんでわざわざ自分から、ヒステリアモード地雷を自宅に設置する必要があるってんだ。

「——そんなのおかしいよ、お兄ちゃん」

「おかしいのはお前の方だ。なんでそんな物を探す」

「だって、お兄ちゃんの好みを知りたいんだもん。見たところ、お兄ちゃんは女の好みに統一性がないみたいだから」

「そもそも好みなんか無い。好きじゃない物に好みなんか、ありえんだろ」
でも、でもお——

かなめが、すがりつくように俺の袖を掴んでくる。

「お兄ちゃんがどういうことで興奮するか、2人で暮らす中で把握したいの。そうして、お兄ちゃん好みの妹になりたいんだよ」

「なる意味が分からん。ならんでもいいから、おとなしくしてろ」

俺がシッシツと手でかなめを払うと——

かなめは『解せない』という表情でソファアに片膝を上げ、こっちを向いてきた。

その動きで、やたら白い太ももが制服のミニスカートからほとんど全て露出してしまふ。
(……ッ……)

かなめではなにくいとはいえ、俺はヒステリアモードを警戒して目を逸らす。

かなめとの会話もあり今気づかされたが、どうやら俺は太ももにも弱いらしいしな。
女子の香りと、太もも。これは要注意だ。今後しっかり警戒しよう。

「おとなしくしてる場合じゃないよ、お兄ちゃん。せつかくの『ごちそう』なんだから、食べなきゃ非合理的だよ？」

「ごちそう……？」

今度は俺が『解せぬ』という顔をする——

かなめはピンと人差し指を立てて、説明します、という顔になる。

「生まれてからずっと離ればなれだった妹が、急に現れました。兄は高校生、妹は中学生

です。しかも、妹はとっても可愛い女の子です」

「……？」

「2人は2人つきりで、一つ屋根の下に暮らす事になりました。妹は前からお兄ちゃんを写真や映像で見えていて、とても好みだと思っており——実際、会うと、すぐお兄ちゃんを大好きになってしまいました。好きで、好きで、たまらないのです」

「……？ ……？」

「こういうの、『ちそう』って言われるシチュエーションなんですよ？ 『妹ゴス』では何度もそう呼ばれてたよ。だから『食べる』って隠語で——」

「それはッ。俺も正しくは分からないが、それこそ理子^{りこ}がやってるようなゲームとか青年マンガでの話だ。俺には理解できない世界の出来事なんだよ」

「違うよ、お兄ちゃん。それは今、お兄ちゃんの身に現実^{じつ}に起きてる事なんだよ」
自分の存在を否定されたかのように、かなめは声に熱を込めて反論してきた。

「ゲームでいえば、もう終盤だよ。お兄ちゃん。もう日常シーンを経て、双方の好感度は上がりきってる。イベントも消化して、かなめルートに入ってる。なのに、お兄ちゃんはフラフラして——あたしに何もしない。これじゃあ、バッドエンドになっちゃうよ？」

そう言って、かなめは俺の手を取り——

自分の胸に、あててきた。俺が反射的に手を退けないよう、胸の、少し上部に。

「ほら……あたしはもうこんなに熱くなってる。だからお兄ちゃん、男の人がしたいこと、していいんだよ。きつと、お互い、上手にできるから」

「気持ち悪いことを言うなってッ。前も言ったが、お前、俺の事を兄貴^{にいさま}だって言うくせに……どうして、その、そんな事をしたがるんだよッ」

俺が手を外しつつ睨^{にら}むと、かなめはここで——

隠し持っていた強力なカードを、一枚切るような表情になった。

「これができれば、お兄ちゃんとあたしは『双極兄妹^{じうきくけい}』——理論上存在し得るとされた、この世で最も強い兄妹になれるから——」

「最も強い、兄妹……？」

「お兄ちゃんとあたしが相互^{さうご}をHSSにできる関係になれば——2人は、向かうところ敵無しになる。地上最強のパートナーになれるんだよ」

「待て、HSSって……ヒステリアモードの事を言ってるのか……？」

「それがお兄ちゃんのHSSの呼び方なんだね。そう。あたしも持ってるんだよ。HSS——ヒステリアモードになれる、遺伝子^{いでんし}を」

「な、何……？」

「だって、妹・だ・もん」

……ッ……

「あたしは、まだHSSになれたことはないの。だから本当になれるかどうか、不安だった。でも、お兄ちゃんに出会って、一緒に過ごして、確信したよ。なれる。なれるよ。あたしたちは、地上最強のペアに」

そこまで言ったかなめは、もう一枚カードを切るような目をする。

「お兄ちゃんは今、『極東戦役』を戦ってる。あたしと一緒にHSSになってくれるなら、その戦いにも手を貸してあげるよ。自由自在にHSSになれる2人が揃えば、どんな相手でも血祭りに上げられる。お兄ちゃんが戦役で欲しい物、必要な物だって、手に入る」

——どう？ いい案だと思わない？

と言うように、かなめは目を細める。

必要な物、という言葉に……俺の脳裏を……

『殺金』——いま半数以上が眷属の手に堕ちており、取り戻さないとアリアが破壊しかないあの紅い石の事がよぎる。

「いや、だが、そんな……お前、ヒステリアモードってのは……あれのトリガーは性……いや、その、恋愛感情というか、そういうものだ。人間として、軽々しく扱っていいものじゃないんだぞ。いくらお互い男女だからって、それを意識的に弄ぶなんて——」

俺がたどたどしく語るのを、クスツ、というかなめの笑いが遮る。

「そう、あたしたちにとって、恋は遊びじゃない。恋は戦いのためにある。」

そこで——ようやく、なんとなくだが——

コイツが俺に付きまとってきた理由が、見えてきた。

ある『仮定』さえすれば、このワケの分からないシチュエーションにもスジが通るのだ。

その仮定とは、したくない仮定ではあるが……

かなめが自分の主張通り、俺の血縁者である事。

それなら、コイツは……ヒステリアモードの遺伝子を持っている可能性がある。女版があるなんて、聞いた事もなかったけどな。

そして、かなめは通常でもアリア達を蹴散らす戦闘力の持ち主だ。

つまり、何らかの理由により——多分、ワトソンが言っていた『ロスアラモス』で——戦闘能力を高めてきた。そこからは脱走したそうだが、アメリカが背後にいる辺り、まだ縁が切れてない様子もある。

その辺が原因で——

かなめは、自分の力を更に高めたいと思っているのだ。ヒステリアモードで。

だが、かなめはヒステリアモードになった事がないらしい。俺の女嫌いとちょうど逆で、男嫌いな一面があるからだろう。

そのかなめが、どういうボタンの掛け間違え方をしたのかは知らないが、俺の事は気に入ったらしい。

それで、俺を使えばヒステリアモードになれると踏んだのだ。
だから……こうやって、俺に近づいてきた。

この世でただ一人、自分を一騎当千の存在——ヒステリアモードにできる相手として。さらには俺とパートナーになって、二騎当千？ のペアにもなりたらしい。

これは……真偽はさておき、危険な話だぞ。いろんな意味で。

——という俺の思考を遮るかのように、かなめは俺にしなだれかかってきた。
まるで理子りこのような、上手いタイミングで。

「HSSを持つ人間は、戦闘において強者になる代わりに——恋愛において弱者になる。この体質は、異性に理解なんかされつこないから。特に、性的興奮しやすい若い内は」

「こ、こら……」

たじろぐ俺の顔の下から、深海色の瞳が見上げてくる。

「異性に愛されたとしても、それはHSSで変化した『本当じゃない自分』への愛情——間違った理解に基づく、間違った愛だよ。つまり、お兄ちゃんの事を正しく理解した上で、正しく愛せる女の子は……どこにも、いないの。同じHSSを持つ、あたし以外には」

その誘うような声はまるで、弱者同士——

傷をなめ合おう、慰め合おう、と言うかのようにだ。

お兄ちゃん——あたしとしか、お互いを理解し合った上でのノーマルな恋ができない。

お兄ちゃんはあたしとの接触をアブノーマルな事に言ってたけど、それは反対だよ。あたしはこの世にただ一人の、お兄ちゃんとノーマルな恋ができる女の子。お兄ちゃんの恋人になるべき女の子は、あたししかない」

と、かなめが出してきたのは……『妹ゴス』の、ケースだ。

「あたしはお兄ちゃんに愛されてる。けど……恋してもらえては、いないのかも。だから、どうしてもお兄ちゃんに抵抗感があるなら……それは、後回しでもいいって割り切るよ。あたしはもう、待ちきれないの。だから……こういうことだけしてくれば……初めは、それだけでも……いいの」

と、かなめが『妹ゴス』のパッケージを裏返すと——

(う……ッ)

興味が無かったから、今までちゃんと見てなかったが……

パッケージの裏面は、かわいこぶりつこしてる表面の画像とは裏腹に——ゲーム内での画像だろう——なんというか、割と、どぎつい画像が羅列られつされてるぞ。

「な、何言ってるんだ。こ、『こういうことだけ』って。非倫理的だぞ、お前ッ」

俺が慌てて、こまごま並んだそのアニメ調イラストから視線を逸らすと——

「お兄ちゃん、それは非合理的だよ。倫理観は、HSSを持つ人間を苦しめるだけのもの。教えてあげる——恋愛と、ヒステリアモードのトリガーは別物。人間は、やろうと思えば、

分けて考える事ができるんだよ。恋愛と、それとを。こういうことだけでも、できるの」
 かなめは、俺が考えもしなかった新説を説いてくる。

「お兄ちゃんはお兄の人だから、きつと今まで性的な衝動との戦いが日常的にあったよね。それを抑えなきゃいけない日々は、辛かったよね。でも、もう抑えなくてもいいんだよ。あたしをオモチャだと思って、代償行為をして。それがあたしにも、必要な事だから」

「お、オモチャって……」

「妹は、兄のオモチャ」

と言つて、体の柔らかい部分をあれもこれも一気に俺に密着させてきたかなめには——
 ここが勝負所、という勢いがある。

「だから今は、お互いを利用し合うだけの関係でもいいの。順序は逆だけど、そういう事から芽生える恋もあるって——テラナにも、あった」

微笑んだかなめから、ふわ……と、キャラメルのような甘い香りがして……

この話の進め方や色っぽい仕草に、ふと理子の事を思い出した俺は——
 今まで分らずにいた、かなめの知性に気づかされた。

以前『お兄ちゃんが愛したアリア、白雪、理子の機能を取る』と宣言していたかなめは、自己流にはいるものの……アリアのように強引で、白雪のように甲斐甲斐しく、理子のように甘い迫り方をしてきた 俺に、気に入られるために。

コイツはその3人の特徴を、この室内にあった——持ち物や書籍・ゲームといった痕跡
 だけから類推し、学び、自分に合うようアレンジして、身につけたのだ。あのテラナとか
 いう情報インターフェースの助けがあったにせよ、僅か、この2週間足らずで。

だとしたら——ヘンな子のように見えて、いや、実際ヘンな子であつても——
 人へ天才の名に恥じない、極めて高い知性の持ち主だぞ。この子は。

——危険だ。知性が高い相手は、危険なのだ。彼らは知性を隠すこともできる。そして
 往々にして、対話だけで人を陥れるのが上手い。話すだけでも危ないのだ……と、かつて
 探偵科で習った事がある。

——ここは多少強引にでも話を打ち切っておかないと、次第に言いくるめられて——
 あのロツカールームで実際させられたように、また何かさせられかねないぞ。

「……ッ」

俺は首を左右に振り、かなめを押しつける。

「あつ……」

小さく声を上げたかなめを置いて、俺はソファから立ち上がり——
 逃げることにした。

この家から、もう出ていこうとする。

(それに……違う)

かなめは、ただ——ヒステリアモードで自分を強めようとしているだけじゃない。ただ、俺の事を好きになったというだけでこういう行動をしているんじゃない。かなめは——何か別の理由もあって——焦っている。何かに、焦っているのだ。

説明されたワケでもないのに、そんな内側まで女子の心の中が分かるなんて——生まれて初めての経験だ。

だが説明されなくても、かなめの事は分かる。なんとなく。

どこか俺と似た仕草や口調から、彼女の心は分かっているように思うのだ。なぜか。

きつと、本当に……俺の事を、心から……病的なほど、好きなことも。

——だが、許せ。

「……かなめ。お前が何者だろうと、どういう目的があるうと、悪いが俺には関係ない。ヒステリアモードなんか、俺にとっては危険を呼び込む導火線ではないんだよ。生まれつきの性質だから捨てられずにいるってだけの、いらぬモノだ。それを——お前が言うような背徳的な事までして使いこなしたいとは思わない。お前も自分を粗末にするな」そう言つて、今日は武藤の部屋にでも泊まろうと——廊下の方へ向かう。

そこでふと、きつき岸くつていた拳銃が腰に無いことに気づいて振り返った時——

「——お兄ちゃん、非合理的イ——」

かなめが低い声でそう言い、ぱつ！

スカートを翻してソファから台所に駆け、がしッ。

荒々しく、出刃包丁を手にとつた！

「——おい！」

叫んだ俺の逃げ道を封じるように、かなめは台所から廊下に飛び出る。

電氣を付けていないので暗い廊下の中に、光る、その、双眸が——

いきなり、完全に、据わっているッ……！

「お兄ちゃん、もう、スリーアウトした——スリーアウトは、『チェンジ』だよ？」かなめは瞳孔をカッ開き、ギリ、ギリギリギリ、と歯ぎしりの音を立て始める。

——ど、どういうことだ。突然キレやがった。

まるで二重人格者のような豹変っぷりだ。

話してもムダだと悟り、暴力でなんとかしようつてのか。

いや、それだけじゃなさそうぞ。

何か、かなめがずっとずっとガマンしていたものが……

今の会話がうまくいかなかったことで限界を迎え、爆発したような感じがする。

「ところで、お兄ちゃん」

廊下の暗闇から、かなめの低い声と——

ひた、ひた、と、フローリングの床を裸足で歩いてくる音がする。

闇の中で微かに見えるその顔が、にいッ——と、引きつるように微笑む。

これも……さっきまでの愛らしい笑い方とは全く異なる、背筋の凍るような笑みだ。

「な、なんだッ」

「お兄ちゃん、あたしの約束、破つてない？」

「や……約束？」

あ、ああ。

あれか。前、かなめが『人を無闇に襲わない』と誓う代わりにと言ってきた——

——『あたし以外の女子のことは、触ったり抱きしめたりしないこと』。

あれのことか。

「——正直に謝れば、破った回数だけ刺して許してあげるから。でも、隠したら、隠した回数の10倍の回数、刺す。さあ、何回破ったか言ってみてよ」

ひた、ひた。

歩いてくるかなめが両手で持つ、包丁の切っ先が——キラッ——
かなめ本体より先に、暗い廊下の闇から、明るいいりびんぐへと出てくる。

「言ってみてよ。さあ、言ってみてよ」

白色灯に鋭く輝く先端は、突き上げるつもりなのだろう——俺の首に向いてるぞ。

距離は、4 mほど。

あいつの運動神経から考えて、もう殺傷圏内だ。

戦わないと——殺られかねない、本気で……！

（——拳銃は……!?）

腰のホルスターには無い。背後のソファーにあるハズだ。だが、もし無くて、かなめが隠してしまっていたら。ダメだ。そこに銃があるという確証がない。振り返って確認するのも危険だ。隙を見せた瞬間、後頭部を刺してきかねない。

……となると、即応できる武器はポケットにあるバタフライ・ナイフだけだ。

だが、それを抜こうにも——その仕草を見ただけで、飛びかかってくるかもしれない。それにアイツはジオ品川で、アリア・白雪・レキを刀一本で倒している。

あの刀には何か科学的な細工があったのだろうが、それを差し引いても……その技術は流だった。今の、この俺では……分が悪すぎる。

良くて、一度切り結べるかどうかというぐらいだろう。

とにかく、宥めるような事を言わないと——

「や、約束は——守ってる」

俺は、ジリ……と退がりつつ、説得を試みる。

「お前だって守ってくれてるんだろ。つまり、俺たちの間には、なんの問題も無いんだ。だから刃物を放せ」

言いながら、額に汗が滲む。

「今、隠したね」

ジリッ……

と、かなめが距離を詰めてきた。

「お兄ちゃん、3回分隠した。じゃあ30回刺すよ」

リビングの灯りに照らされたその顔から——今度は、一切の表情が消えている。マシンのように、俺を狙っている。

「よ、よせ……ッ！」

「あたしも、愛してる人を刺したくなんかない。でも、お兄ちゃんが、ウソつきだから。お兄ちゃんが、いけないから。これは愛する人への、お仕置きだから。お仕置きは、痛くないと、いけないから……！」

ダ、ダメだ、対話で懷柔できる状態じゃないぞ。完全に、頭が沸騰してやがる。だが——

それは逆に、チャンスかもしれない。唯一の。

あの猛獣のような日。あれは、正気を失ってる人間の目だ。

フーツ、フーツ、という、興奮しきった息づかいも聞こえる。

ああいう状態になると、人の戦闘力はむしろ下がる。力は籠もるものの、攻撃の精度を著しく欠くようになるのだ。しかもかなめが持っている物は、きちんとした武器じゃない。グリップのさかない、ただの出刃包丁だ。

だから——か八か、俺は賭けに出る。

「刃物を放せッ！」

叫んで威嚇すると同時に、俺はポケットのバタフライ・ナイフを出した。

チャキッ——！

手の中で素早くそれを展開し、

「——どうして!？」

叫びながら飛びかかってきたかなめの——

突き上げる包丁を振り払うように、ナイフの破壊峰を振るう。

ギインッ——！

と、刃同士から火花が上がり——去年、強襲科で何百回も繰り返した訓練のお陰で——俺は、包丁の刃を凹字形の峰で嚙るように食い止める事に成功した。

そして——ガキンッ！ 力任せに、その刃をヘシ折る。

だがかなめは、初めから包丁なんかには頼るつもりはなかったらしく——

「どうしてお兄ちゃんは分かってくれないのッ!？」

——バスッ!

「ぐあッ!」

う、撃たれたッ……!!

防弾制服の上からだったが、至近距離から撃たれた。

それも、先日かなめに蹴られて調子が悪かった、右膝を……また……!!

見れば、かなめは俺のベレッタを手に入れている。

——包丁に注意を向けさせておいて、銃で俺を動けなくさせる手だったのか。

一枚上手だったかなめの前で、俺は——どさつ、と、仰向けに倒れてしまう。

「あたしはあれもこれも話したのに! なにもかも譲ったのに! お兄ちゃんは!」

引き金に指を掛けたまま、かなめは虚空に向かって絶叫している。

その目と口は興奮のあまり見開かれ、今にも銃を乱射しかねないムードだ。

俺は無事な左足と両腕の力だけで、菌を食いしばりながら後退しようとする。

ドアへ続く廊下は、かなめが寒いでいる。そこからは逃げられない。

(ベランダ……へ……!!)

そこへ這ってでも出て、敢えて転落する。そして海へ逃げるんだ。もうそれしかない。

狙いを読まれないようにと、俺は室内にある鏡を見てベランダの様子を確認した。

すると、そこでは……ひゅん、ひゅん……

ジオ品川の映像で見た——

あのX字型をした浮遊する布が、竹トンボみたいに回転しつつ舞い降りてきている。

あれは攻防一体の、かなめの武装の一つ。

かなめはどうやらずつと、あれを男子寮の上空に配備していたらしい。

それが……ベランダで『行き止まり』を必ずように滞空する。

逃げ場を失った俺に、かなめは——

「——逃げられるとも思ったの?」

にやあー、と、据わった目を細めて笑ってきた。

まるで手負いの獲物を見下ろす、狩人のように。

「今、逃げようとしたよね。悪い足だね。お兄ちゃんの心はあたしを愛してくれてるのに、どうして足が裏切るかなあ。あつ、そうだ。お兄ちゃんが歩けるからいけないんだあ」

かなめの裸足の左足が、いま撃たれた俺の右膝の上に乗ってくる。

「お兄ちゃん、あたしは、全部見てたんだよ。風魔陽菜、神崎アリア。それと——油断してたなあ、エル・ワトソン。あいつも女だったんだねエ。非合理的イ」

「……ッ……!!」

ここ数日の記憶が、俺の中に甦る。

風魔と会った時に――

少し離れた所の竹藪が、噛まれたり折られたりでメチャクチャになっていた。

アリアに屋上でキスされた後――

ラジエーターの裏にあった『ウラギリモノ』の文字。

そしてワトソンとのリハビリを鍵穴から覗いていた、目。

あれは全部……

(この……ストーカーめ……ッ！)

かなめが、俺をストーキングしていた痕跡だったのだ……！

「ねえ、お兄ちゃん。あたし、どうしたらいいのかなあ。これ……お兄ちゃんの足、壊しちゃおうか。そうして、歩けなくして、この部屋に閉じ込めて――」

ピアノでも弾くかのように、かなめは俺の膝を足の指でくすぐってくる。

「そうだね。それが合理的だね。そのソファァにずっと寝かせたままにして、ゴハンもそこで食べさせて……身の回りの事は全部、何もかも、お世話してあげて……」

お、俺を――監禁するってのか。

かなめはそんな空恐ろしい話を、なぜか実に幸せそうな顔で語っている。

「そこで――あたしがお兄ちゃんを、ムリヤリにでもヒステリアモードにさせてあげる。よし、そうしよう。そうすれば、きつと分かってくれる。分かって、くれる、よねえ？」

す……す……

と、かなめは左膝を上げ……

俺の右膝に、踵を踏み下ろそうとしている！

「……！」

ヤバイ……！

この、かなめの目。右膝を折るだけじゃ済まない感じだぞ。次は左膝も折るだろう。それでも怒りが治まらなければ、両腕だつて折りかねないムードだ。

そうしたらもう、文字通り、手も足も出なくなるッ……！

痛みに脂汗を流しつつ、完全に追い詰められた俺は――

「かなめッ……もう……分かった！ お前の話を、試すッ……！」

膝を手で庇いつつ、呻くように叫んだ。

握っていたバタフライ・ナイフも捨て、投降の意思を表す。

「た、め、す……？」

「そうだ、好きな時に――俺に、何でも、好きな事をしろッ。俺も、それには応じるッ」
正直、こんな美少女が相手とはいえ……あのゲームのパッケージにあったような過激な行為がリアルに自分の身に降りかかると思うと、気が遠くなる。

だがここで監禁され、かなめに生殺与奪の権利を握られるよりはマシだ。

だから、そこは譲る。

だが、この話には——その後、かなめを俺から遠ざける事ができる可能性がある。

「お兄ちゃん……」

かなめは俺の言葉に——ふっ、と、力が抜けたような顔をする。

足も……俺の膝ではなく、床に下ろした。

「よかった。分かってくれたんだね。やつぱり……お兄ちゃんは優しい人。あたしを理解して、受け入れてくれる人……愛して、くれてる人……うれしい……」

そう呟きながら、虚空を見つめるかなめに——

俺は嚙んで含めるような喋り方で、付け足す。

「ただし——それで俺がヒステリアモードにならないければ、もうあきらめろ。お前、俺と一緒にヒステリアモードになるのを……実戦に使うような話をしてた。不能のリスクがある武器なんか、実戦じゃ使えない。しくじれば、2人の命にかかわるんだからな」

——俺は経験上、かなめではヒステリアモードになっていない。

ロッカールームであれだけ接触しても、ならなかった。

だからきつと……耐えられるハズなのだ。何をされたって。

そうすれば、かなめは俺から遠のくだろう。

つまりかなめを遠ざけるために、口敢えて近づける。そういう、苦肉の策だ

「それも……そうだね。分かった。いいよ。あたし、頑張るから。頑張ってお兄ちゃんをHSSにしてあげるから。今までお兄ちゃんがなったどんなHSSよりも、激しくなれるように——してあげるからっ」

かなめは早くもやる気が湧いてきたのか、片手を握りしめて鼻息を荒げている。

これはこれで、かなめの意欲に火を付けてしまったような気もするが——

やむを得ない措置だった、だろう。

手がつけれなかったからな。今さっきの、プチギレたかなめには。

「……」

俺が額の汗を手で拭い、痛む右膝を引き寄せるようにしていると……

「お兄ちゃん」

そこで急に、お面を付け替えたかのように——にこっ。

かなめが、可憐な笑顔になった。

まるで今まで俺を襲っていた事実なんか無かったかのように、日常的な雰囲気になっていく。きゅ、とその場に屈んで、ベレッタも床に置いてしまった。

そしてその、年相応の細さをした手で——

「じゃあゴハンたべよ。カレー、もう出来てるから」

明るく元気に、俺を引き起こしてくれるのだった。

——かなめのナイフ術は、軍人や白衛官のそれに似ていた。つまり、相手を殺害するための技術。それを身につけている。

(もし、また何かのきっかけで襲われたら……)

かなめにそのつもりは無くても、殺されかねないぞ。

アイツはキレると正気を失うらしいし、手元が狂うって話もある。

ちなみにあの後、かなめは「復習しとかなきゃ」などと言いつつ『妹ゴス』を持参して小部屋に閉じこもっていた。

そして俺が戦々恐々と明かした一夜の間、手出しは何もされていない。

俺も寝る前に『妹ゴス』とはどんなゲームなのかネットで調べたところ……恐ろしくてサンプル画像までは見られなかったが……なにやら、妹が兄に手錠をすとかムチで叩くとかそんなものもあるみたいだった。なんちゅうゲームだ。

かなめがこれを参考にしており、今まで俺が間違った選択肢ばかり的確に選びまくってしまっただけの所から考えるに……

いざ事に及ぶとなった際、アイツから何が飛び出すかは、もう予測不能。

さっきの一件とほとんど変わらんイベントが待ち受けるかもしれないぞ。

(今のうちに、こっちも身の安全を確保する防備をしておかないと……!)

と、俺は翌日——

上曜日の朝、かなめの目を盗んで台場の海浜公園へ出た。

前は海、後ろは広い芝生という見晴らしのいい場所にあるベンチで……人を待つ。

俺には全く似合わない、バラの花束なんか抱えてな。

まあ一応、花は見えないように紙で包まれているから恥ずかしくはないんだが。

……なぜこんなものを抱えてるのかと、言くと、それには割と入り組んだ理由がある。

まず、この待ち合わせは——

俺の『護衛役』を雇うための密会である。

かなめは、俺の部屋に『誰も一緒に住んではいけない』と言っていたワケではない。

——『家族なら一緒に住んでもいい』。

そう言っているのだ。最初から。

そこで俺も考えた。

誰か高い戦闘力を持つ仲間を『家族』という事にして、俺の部屋に常駐させれば——かなめと恐ろしいイベントが起きてても、バッドエンド寸前で助けてもらえるだろう。

そこで師団のメンツを中心に、戦闘力の高い者を頭の中でリストアップしてみたのだが……これがなかなか、俺の家族という設定にするのが難しいヤツらばかりだった。

というのもまず、俺は家系的にも見た目的にも100%の日本人。

アリア、ワトソンは、そもそも家柄的にムリがある。ジャンヌは検討以前の問題。レキは源氏の末裔らしいが、演技がヘタだからすぐボロが出るだろう。玉藻は惜しいが、ダメだ。俺にはキツネ耳が生えてないからな。

そこで白羽の矢が立ったのが――

――白雪、である。

アイツは俺同様、前から見ても横から見ても純血の日本人丸出しの見た目してる。

幼なじみだし、俺の腹違いの妹だとかそういう事にしても口裏を合わせられるだろう。

名字が違うのは……そうだな、巫女になるため星伽家に養子縁組した。それが遠山家に帰ってきたという設定にしよう。

つまり白雪は今、遠山白雪。家族の一員である、とする。

いや……これだつて極めて、すこぶる、超ムリのある話だつてことは重々承知だが……
(……今は状況が状況なんだ。強行突破するぞ、ここは……！)

そして――

折しも今日、11月14日は白雪の誕生日でもある。

それを俺は忘れていたというか覚えていなかったのだが、今朝、青森の星伽神社から、粉雪の名義で漆塗りの巨大な葛籠が届いたのだ。

なので抗議の電話をしたところ、誕生日のプレゼントだという話と『お姉様はお部屋を

留守にされる事が多いので、郵便局の方に再配達のご迷惑をおかけせぬよう――遠山様のお部屋にお送りしました。お渡ししておいて下さい』と俺をバシり扱いするようなことをはざきやがった。ので、『俺の迷惑も考えろッ！』と怒鳴って電話を切っている。

だが、ここは災い転じて福と為すの精神で……

俺は『家族を演じてくれ』という無茶な依頼を承諾してもらいやすくなるために――白雪の誕生日を祝い、友好度を上げておこうと考えたのだ。かなめのせい、白雪も俺に最近よそよそしいからな。

とはいえ女子の誕生日を祝うなんてアリア以来で自信が無かったのだ、女子カスタマーサポートセンターことジャンヌに『どうすればいい』と電話したら『花だ。花をもらって喜ばない女はいない。これは世界の法則だ』と、キリッとした声での回答をもらった。

で……今朝早く家を出た俺は、学園島の今まで一度も入った事のない花屋でこのバラの花束を買ってきている。花なんか菊とチューリップぐらいしか知らん俺だったが、花屋のお姉さんが『女性へのプレゼントならバラに限りませう』と自信ありげに言うので……俺はいま真紅のバラの花束を抱えて、白雪を待っている。

と、いうワケだ。

花屋のお姉さんは『サプライズで出してあげてくださいね』と大きな包装紙で花を隠すように包んでくれたのだが、どのタイミングで出せばいいんだろう。分かん。

まあ、適当でいいか。相手は白雪だし。

にしてもデカいなこの花束。花の相場なんて分からなかったから、なけなしの、最後の万札を叩いたんだが……重たいくらいだ。半分ぐらいにしようと思ったよ。

——などと今朝のあれこれ思い出して、俺は右膝を少し触る。

(やっぱり痛むな……鞭帯までいってるかもな、これ……)

かなめに撃たれた所には手当てをしたから、普通に歩けるは歩けるのだが……

強襲科で習ったサポーターの巻き方がウロ覚えだったせいかな、痛みが抜けないな。

(もう、こんなの外しちゃおう。やっぱケチンないで救護科で診てもらうか)

イライラした俺はズボンの右裾を上げ、サポーターを外してしまふ。

そして、膝をさすりつつベンチに座っていると……

「キ、キンちゃん。こんにちは」

芝生の方から、なんか少し緊張した感じの白雪がやってきた。

俺と目が合った白雪は、はにかむように微笑み……

ベンチの横に立ち、風にそよぐセーラー服のスカートを小さく押さえている。

「——電話でも言ったが、尾行は無かっただろうな」

「う、うん。確認しながら来ました」

うなづく白雪の前で、俺も改めて周囲を伺う。

かなめは……俺を、しつこくストーキングしてたみたいだからな。

探偵科で習った方法だが、尾行者を警戒しつつ、しかも誰かと密談しなければならない場合は——日、こういう見晴らしのいい場所に出ると良い。

あちこち身を潜める場所がない場所なら、尾行者がいない事を確認できるのだ。

さらに遠隔から監視されているケースも考えて……

ここから、どこか安全そうな屋内に入るのがセオリーだ。

「あの……重要なお話って、なんですか？」

「公園で適当に話せるような内容じゃないんだ。場所を移そう。そうだな……」

と、俺は紙で包まれた花束を持ったまま周囲を見回した。

芝生の先に……ホテル日航が新設した、別館になっている真つ白なチャペルがある。

よし、あそこにしよう。

さすがのかなめも、神聖な場所まで襲撃したりはしないだろうしな。

「その教会だ。行くぞ」

と、立ち上がった俺の右膝が……ずきつ……と、痛む。

やっぱり、サポーターを外すべきじゃなかったかな。

だが、普通に歩けないわけじゃない。急ごう。

「は、はい。キンちゃん、あの、それは……？」

と、白雪は花束の包み紙を見て、早くも何やらワクワクした感じで聞いてくる。
 おいおい……もうネタバレ気味じゃねーかこれ。しかもよく見たらバラの茎、ちよつとハミ出てるし。花屋さん、もつとちゃんと包んで下さいよ。

チャペルは一般的な教会のように開放されており、中には誰もいなかった。

天窓から差し込む自然光が白い壁に反射して、明るく、暖かい。心地よい空間だな。

「わあ……キレイだね。すつごくロマンチック……」

などと、白雪もウットリした目で周囲を見回している。

巫女さんを教会に入れても大丈夫かな、とも思ったが……取り越し苦労だったようだ。それはそれ、これはこれ、つて事なんだろう。白雪の中では。

そうでなきゃ、あのトチ狂ったSSRなんか人居れんだろうしな。

さすがに警戒しすぎとは思うが、入口のドア、というか鍵穴というものに怖い思い出があった俺は……身廊を奥まで進み、金銀の燭台や花で飾られた後陣の手前まで行く。その後ろを、白雪も慎重しくついてくる。

「なんだかやつぱり、キンちゃんと一緒にいると……ド、ドキドキしちゃう」

あは、と笑いつつの白雪は両手をほっぺに当てて、くねくねと身をよじらせた。
 ドキドキ……？

ああ、今まであれこれ危険な目に遭わせたからか。
 俺と居ると、戦いの予感がするつてことかな。まあ、あなたが間違つてないぞ。白雪。
 「——じゃあ、これからは毎日ドキドキになるな。覚悟しとけよ」
 「これからは……毎日？ ……毎日？ ……！ そ、それって、どういう……」
 俺の『毎日』という言葉にヘンな反応をする白雪を引き連れて、一段、段になった所を上がると――

「……ッ」

右膝に痛みが走る。サポーターを外したのが、やつぱり良くなかったな。

――俺は仕方なしに、そこで片膝をついた。

転びそうになったので、バランスを取るために白雪の方を向いて右手を掴ませてもらおう。サブライズにも何にもなつてないが、花は、今渡そう。

そう思った俺は、がさ、がさ、と紙とビニールを剥がし――
 中から、真紅のバラの花束を出した。

「――キ、キンちゃん？」

「白雪、お誕生日おめでとうな。あとっておくが――これから俺がする話は、もちろん断りたかったら断つてもいいからな」

俺に大きなバラの花束を手渡されて、キョトンとする白雪……と、俺を、天窓から差し

太陽光が照らしている。

白雪のツヤツヤした黒髪に、天使の輪みたいな光が見える。

「とはいえ、俺もかなり考えた末の話なんだ。他の誰かじゃダメだ——もし断られても、他のヤツには頼まない。白雪じゃないと、ダメなんだ」

膝がズキズキする。早く済ませて、救護科へ行かないと。

前置きはこのぐらいいにして、詳細も後回しにして……

単刀直入に、シンプルに、要件を伝えよう。

と、俺は片膝をついた姿勢のまま白雪を見上げる。

「——白雪。お前、遠山白雪になってくれ」

その言葉と同時に、教会の鐘が——

リン、ゴーン……リン、ゴーン……

時報だろうか。ちょうど、鳴り始めた。

これは好都合だな。万一盗聴されていたとしても、鐘の音が誤魔化してくれるぞ。

思いがけぬ幸運に、小さく笑顔になった俺に対し——

円らなお日々を、まん丸に開いた白雪は——

「……はい……！」

あれ？

二つ返事で、快諾してくれたな。

お前、俺に従順なのにも程があるだろ。詳細すら話してないのに。というか……

なんだ、その顔。

——自分の身に、長年待ち望んでいた瞬間が来たような——

巨大な花束を抱える胸が、さらに感激でいっぱいになったような、そんな顔をしてるぞ。

「つまり、これからお前は俺の家族という事になる。だから改めて、俺の家に来てくれ。

準備するのに少し時間がかかるかもしれないが、それは、待つから」

「……はい……キンちゃん様……キン、ちゃん、さま……！」

光が眩しくなったのか、白雪はバラに顔を埋めるように——

うなずくように、少し俯く。

「まあ、いくら白雪でも——俺の家族として過ごすのは、すぐには難しいかもしれない」
ある種、これは警護と潜入の混ざったような任務になるんだからな。

その辺のスキルは、半年以上探偵科で勉強してきた俺の方が高いだろう。
なので、指示はこっちが出す。そこも伝えておかないとな。

「だが、その辺りは俺が何とかする。だから、黙って俺についてこい」

膝の痛みを押して立ち上がりつつ、そう言うところ……

「はい……ああ……キンちゃん、ありがとう……私……小さな頃から、ずっと、ずっと、待ってただよ……」

……っ

「あまりに突然に来ちゃったよお……！ 人生最大の、記念日……！」

白雪……さん？

バラを抱えながら手を合わせた白雪は、何かを召喚するかのように天を仰いでいる。
俺に依頼を受けたのが、どうして……そんなに嬉しいんだ……？

「……キンちゃん様……今日という日は、永遠に、国民の祝日に制定しましょう。旗日、旗日、旗日だよお……」

な、なんか、白雪の周囲にラッパを持った天使が降臨してきてるみたいな気がするぞ。
ホントに呼び寄せたのか。何でもできるな、巫女は。

俺は目をゴシゴシやってそれが錯覚だった事を確認しつつ、詳細の説明に入る。

「えーとだな。最近、俺の身の安全をかなめ……ジューフォースが脅かしている。かなめは

学校では猫を被^かつてるが、俺に対してちょっと頭がアレな所がある。妹を自称している所からも分かる通り、正直、病^やんでるレベルだ」

「はたびい」

「おい、聞いてんのか」

なんか、白雪の目が焦点を結んでない。

マタビのシャワーを浴びたネコみたいにな、ぼおっとしてしまっている。

「おい聞け」

「はひい」

「年かさ的には……そうだな、かなめから見ても、姉になってやってくれ。あいつは俺の妹って事らしいかな。あいつの中では。だからケンカするなよ、もう」

「はたびい……っ……い、いもうと増えてあふう……ッ！」

「でだな——どうもかなめの脳内では『家族』なら家に住んでもいいってことになってるらしいんだ。なのでそこを逆手に取って、お前を俺の家族にする。その上で、俺の身辺にずっといてくれ。それで、って——お、おいイ？ 白雪？——」

し……失神してるぞ……!? 白雪が。立ったまま。バラを抱っこしたまま。
それも、まさに天国にいるような幸せそうな表情で。

だ、大丈夫かな。これを警護に採用して。最初っから不安になってきた。

だが——お前の他には、できるヤツがいらないんだ。今回は頑張ってもらうぞ、白雪。

俺に背負われて武偵高に帰り、駅でようやく意識を取り戻した白雪は「でもキンちゃん、

私はいいけど、キンちゃんはまだ日本の法律上……」などと意味不明なことを言うので、

「法律なんか今は考えるな」と、喝して強引に味方につけておいた。

まだボケーツとしている白雪にそこはかとな不安を感じつつ、バス停で別れ——

救護科で膝の手当てを受けてから、7時頃、自宅へ帰る。

男子寮のエレベーター内では……銃弾をフル装填してあるベレッタの安全装置を外し、研ぎ直したバタフライ・ナイフを確認しておいた。かなめ対策に。

まるで暴力団の事務所に入る時みたいだな。自宅に帰るだけなのに。

「……ただいま」

がちゃ……とドアを開けて中に入ると……

リビングに電気はついていっているものの、かなめの姿はない。

まだどこかに行ったのか？　と思つたら、キッチンとリビングの間辺りから物音がした。

廊下を歩いた際、違和感に気づく。フローリングの床に、水滴がいくつも落ちてる。

何だろう？　と、リビングに入った俺と——

とこ、とこ。

キッチンから出てきたかなめが、ハチ合わせした。

「……！」

アイスバーをくわえたまま、キョトン、と俺を見るかなめは——

横にシマシマの入ったストライプの下着、それも、下、だけ……

という、姿、だ……！

どうやらシャワーを浴びて——下着だけはいいて、バスタオルで頭を拭きつつ——冷凍庫からアイスを取り出し、くわえた所だったらしい。ほ、奔放すぎるだろ。家の中とはいえ

そしてそこへ不幸にも——俺が帰ってきた、という事か。この状況は。

「……すッ……すまんっ——」

よく考えればパンツいっちょで歩いてる方が悪いのだが、慌てた俺はまず謝ってしまう。

かなめが首から左右に垂らしたバスタオルは、奇跡的に両胸の先端を隠していたが——

み、未成熟な胸の膨らみ、その緩やかな曲線が——み、見えちゃってる。

そこから目を下に逸らすと視界に飛び込む、下着。なんという上下幅の細さだ。いや、

その、構造的に女子の方が男子より少ない布面積で済むことはさすがの俺も知っているが、それにしてもそいつは細すぎる。昔理子^{りこ}が言っていたローレグとかいう種類のヤツか。

——ドクンッ……！！

俺の中で、あの血流が始まりそうになる。

お、おいおい……！　おい！

おい！　俺の中の俺よ！　なんでここで裏切るんだよッ！

俺はお前の、かなめに対する堅固な防衛力を信じてたのに！

い、いくらなんでも、それはないだろッ。こいつは中学生、それも妹ということにされている女子なんだぞ。それに反応するなんて——！

コイツが妹だとは思ってないが、万一、万々一、もし本当に妹だったら——
それにヒスった場合——

人生最大級の、由々しき問題になるだろうが！

先月理子に『最近お前、人間離れしてきたな』と言われた俺が、別の意味でも人間離れしちまう。ケダモノ方向へ。

——クスッ。

慌てる俺を小さく笑う、かなめの息づかいが聞こえる。

「……何を考えてもムダだよ、お兄ちゃん。頭と体は別だから」
べたべた、と、ほとんどハダカのかなめが歩いてくるので——

俺は逃げるように寝室に飛び込み、クローゼットから自分のワイシャツを取り出した。

「と、とにかくこれを羽織れ！　お前は俺を兄貴だと思ってるから平気なのかもしれないが、

いや、それでも、女が無防備すぎるだろッ！」

かなめの方を見ないようにしつつ、ワイシャツを突き出すと——

——受け取って、くれた。

そして、しゅる、しゅる。袖に腕を通してくれているようだ。

「……」

恐る恐る、振り返ると……

(うっ……！)

俺は、また……

やつちまったらしいぞ。失策を。

というのも、ワイシャツを羽織り、下はストライプの下着だけという姿のかなめは……

な、なんだか余計に煽情的になったような気がする。

なぜだ。着てないより着てる方がいやらしく見えるとか、ありえんだろッ。

さらにかなめは、

「もう、何も考えなくていいんだよ。だから何も考えないで。お兄ちゃん」

退路を塞ぐように、リビングへのドアを背にしつつ俺に近づいてくる。

俺は、さらにもう一つの失策に気づく。ここは、寝室。

クローゼットがあったからとはいえ、自ら虎穴に入った形になっちまってるぞ。俺。

——かなめはとうとう、ぼふ。

俺の胸に、寄り添ってきた。ほぼ全裸の状態で。

た、耐えろキンジ……!!

ここは一世一代の辛抱所だッ。

ここで耐えなければ、かなめ共々どこまでも堕ちていきかねんぞッ。

「イシスとオシリスは兄妹。イザナギ・イザナミも。スウェーデンの婚姻法では婚姻禁止となるのは傍系二親等とされてるから、片親の違う兄妹や姉弟は婚姻できる」

「——な、なんの話だッ」

「ガマンしてるんだね。あたしには分かるよ、お兄ちゃんの胸の鼓動……その血流の感じから。つてことは——可能性、やつぱり、あるって考えてもいいんだね」

かなめは、その美しい目で——

「お願い。お兄ちゃん——ぎゅって、して……」

まっすぐ俺を見上げて、頼み事してくる。

な、何やってんだ。俺たちは。

仮に普通の家なら、親が兄妹の不審な動きに気づいて厳しく注意してくれるんだろうが……この家では、俺とかなめは2人暮らしだ。歯止めになるものが、何も……

いや、それで思いついた

そのために、助っ人を雇ったばかりなんだ。俺は。

「——かなめッ。これからこの家には、お、俺の腹違いの妹が一緒に住むことになった」

「えっ、そんなの——」

「お前は家族だからって理由で、ここに住み着いたんだろ。もう1人家族が来るんだから、それは受け入れる。自分で言ったルールには従えよ、いいなッ？」

勢いでまくし立てたが、通るか、この話……？

と、内心ビクビクだったが——かなめは、この話を一笑に付したりはしない。相変わらず、俺の言う事は真摯に受け止めるらしいな。

そして少し、考えるような仕草をして——

こくり。

うなずいた。

「——じゃあ急がなきゃ。今しよう」

「何？」

という俺の質問と、ほとんど同時に——トン。

かなめは俺の袖をクロゼットの方へ小さく引つ張った。

本能的に、俺がそれを堪えるような——体を横に動かすような体重移動をした時——
くいつ！

柔術の技のように、かなめが俺のネクタイとジャケットを反対側に引っ張った。かなめ自身は俺を引き込むように、ベッドへと背中から倒れ込む。

「……」

ころんつ、と寝ころんだかなめの上に――

俺は、その華奢な体に自分が覆い被さっている事に気づかされる。

あまりにも巧みな、引き込み方だった。今のは。

「……」

俺はかなめをベッドに押し倒したような状態になっており――

かなめはかなめで、仰向けの姿勢で俺を見上げている。

き、来たのだ。その時が。ついに。

「お兄ちゃん。後戻りでなくなる前に、ほんとのこと言うね。聞いたら忘れて。誰にも言わないで。この発言は……ほんとの気持ちだけど、言うとな重大な違反になるから」

その目は、今までで一番シリアスで……

「な、なんだ」

「あたしね、ほんとはね……作戦なんか、どうでも良かった。ずっと、お兄ちゃんと……ただ、こうなりたかった。その願いが叶うなら……ホントは、それだけで、よかったの。

お兄ちゃん――あたしの初恋の……そしてこの短い人生の、最後の人だから――」

かなめの、深海色の瞳が……

深い海に沈んでいくその前に、水面から最後の言葉を告げるようにゆらめく。

「かなめ……」

お前……

どうしてそんな、悲しい目をするんだよ。

お前は何のために、どうして――

そんなに幼くて、かわいいお前が――

泣いてるんだよ、今。そんなに必死に、笑顔を作りながら。

「お兄ちゃん」

かなめの細い腕に抱かれて、俺は――

――分かつて、きた。

ヒステリアモードになりかけているこの頭で、かなめの事が、分かつてきた。

かなめは――きつと――

「お兄……ちゃん……」

きゅつ、と、かなめが小さく目を瞑る。

そして自分の中で何かの線を踏み越えるように、一呼吸した。

「ああ、もう、引き返せない。もう、引き返さない。今だけは、女として扱って……!」

意志の強そうなその瞳が、再び開かれる。

その瞳から、子供の殻が取れている感じがした。今の、この一瞬で。

かなめは、覚悟を決めたのだらう。今この時だけは——人上天才でもなく、妹でもなく、一人の乙女として俺に接する覚悟を。全ての思考を捨て、今までの関係をも越え……何もかもを理解し合おうと、俺に求めている。

俺はそれを——

さっき分かった想像を踏まえた上で、受け入れるような言葉をかける事にした。

「……緊張してるみたいだな」

半分ほどなったヒステリアモードに頼りつつ、俺はかなめに小声で囁く。

「それは、するよ。でも構わないで。お兄ちゃん、ちようだい」

「——それなら、リラックスするんだ。身も心もガチガチじゃ、何も始まらないぞ」肘をついて顔を近づけた俺は、かなめの頬と髪を左右から撫でる。

そして、かなめが物好きにも俺の見た目が好きと言っていた事を思い出し——両耳を塞ぐように回した手で、俺の方をまっすぐ向かせた。

「あ……あっ……」

言動の端々から——とうとう俺も乗り気になったと錯覚したらしいかなめが、恥じらいつつも悦びともたれない声を上げ始めた。

「ああ……お兄ちゃん、お兄ちゃんが、あたしだけを見て……お兄ちゃんの何もかもが、こんなに近くに……」

かなめの細い腕が、俺の背に回される。

深海色の瞳が、感極まったように潤んでいく。

「な……何、何なの。この、感じ……っ。体の中心、中央、真芯が……お腹の奥が、きゅんってする。こわい……こわいよ……」

始まるんだな。とうとう。かなめの人生初の、ヒステリアモードが。

切なげに身を震わせるかなめを、間近から見下ろしつつ——

俺は、これから起きる事を考える。

かなめは、望んでいた。夢見ていた。俺を使い、自分がヒステリアモードになる事を。その夢が今、ついに叶おうとしている。

おそらく——かなめが、予想していなかった形で。

俺の想像が正しければ、そうだった時——

かなめは、傷つくだらう。

事後、もしかすると……自らを消し去りたくなるかもしれない程に。

だとすると、この寢室に武器の類があるのは危険な可能性がある。過保護かもしれないけどな。

そう思った俺は、さつき安全装置を外していた腰のベルトに手を伸ばしていく。
都合、俺の指は……かなめの肌を……

白くて丸い肩、滑らかな曲線を描く胴体の脇、そして腰へと……
なぞるように、下りていく。

その動きを誤解したのか、かなめが期待と不安が入り交じったように眉尻を下げる。
俺の指が、ゆっくり、ゆっくりと――

かなめの腰骨の辺りまで下りた、その時。

「あっ………！」

涙の膜を浮かべて半開きにしていた両眼を、かなめは驚愕に見開いた。
そして急に――

「……ッ……ッ！」

さつきまで俺の背に回っていた手で、今度は胸に触れてきた。

――そう、俺が予想した通りに。

俺の胸に手をあて……

拒む、動作をしてきたのだ。

「あっ……だめ……だ、だめ……」



白説を確かめるように、ぐっ……と、俺が少し体を下げると——
「や、やめてっ——兄妹でそんな事しちゃ……ダメっ……!」

……ぼろ……っ……ぼろぼろっ……

かなめは、今までと矛盾する事を言いながら——

今までよりずっと愛らしい、愛おしさを感じさせる仕草で、潤んだ瞳から涙をこぼした。
俺を押し返そうとする力が……か弱い。

小動物のように儂く、俺がもう一押ししてしまえば簡単に崩れてしまいそうな、そんなわずかな抵抗しかできていない。俺の足に密着した小さな膝は哀れなほど震え、本能的に内股に閉ざされてしまっている。怯えて……いる。

これは……演技じゃない。演技で、ここまでではできない。

かなめは、変化したのだ。

(やっぱり……な)

俺が上体を起こすと、かなめは真っ赤になって両手の甲で目を拭いながら……
ひっく、ひっく……と泣き続けていた。

震え、怯え、男の征服欲を掻き立てるような——異常なほどの可愛さで。

今までのかなめより、今のかなめの方が……ずっと、狂おしいほど魅力的に思える。
普通の男なら、もうかなめの事しか考えられなくなってしまうだろう。

だが——

……服を着るんだ、かなめ——

俺は起き上がり、自分の襟元を正した。

かなめが俺の妹なのかどうか？ その問題はさておき——

一つだけ、俺には分かっていた。

分かってしまったから、彼女を傷つけないために自分を抑える事ができた。

かなめのこれは——ヒステリアモード。

その、女版だ。

自分のヒステリアモードに照らし合わせてみると、よく分かる。

恥ずかしい話だが、通常、ヒステリアモードの俺は『女にとって魅力的な男』を演じてしまう。女を守り、女心をくすぐるような言動ばかりするようになる。

そこから逆算して考えると——女版のヒステリアモードでは恐らく、その真逆の変化が心身に訪れるのだ。男が守りたくなるような女になり、男心をくすぐるような仕草をする。

……今の、かなめのように。

(それだけじゃないぞ、きつと……)

小さく震えながら上体を起こし、潤んだ瞳でこっちを弱々しく見つめるかなめ——
彼女のもう一つの変化にも、俺は同じ理屈で説明がつくことに気づいていた。

「……」

心配になって寝室のドアを見ると、少しだけ開いている。
このドアの開き方が巧妙で、入ろうと思えば簡単に入れる感じだし、そばを通るたびに
気になってしまう感じだ。

ドアの隙間からは……ベッドで膝を抱え、シクシクと泣き続けるかなめが僅かに見える。
これも、男なら気にせずにはいられない光景だ。

この辺、本人は意識せず、ヒステリアモードの本能でやってしまっているんだろな。
(強引に迫ったり誘ってきたりしても……いざとなると、気弱な受け身になるのか)

人のことは言えないが、罪作りのシステムになっているな。女のヒステリアモードも。
ヒステリアモードのカラクリが分かっている普通の男なら、かわいそうになって……
放つておけず、あの寝室に入ってしまうんだろ。そして慰めている内に、あれよあれよ
という間に——取り返しつかない事に、なるのだ。

普段のかなめ。怒りで別人のようになるかなめ。そして、ヒステリアモードのかなめ。
まるで二重……いや、三重人格者だな。

3つも、人格のチャンネルがあるのか。
同病相憐れむ、というのとは少し違うかもしれないが……
ヒステリアモードを持つ俺には、その苦悩がよく分かるよ。

ヒステリアモード時の男は——強くなる。中枢神経系の活動が亢進し、潜在能力を余す
ところなく使うようになる。戦い、女を守るために。

だが、かなめの様子を見るに、恐らく……女版のヒステリアモードは、弱くなる。
男を『この女のために戦おう』という気にさせる、守られるための変化なのだ。

ヒステリアモードにより、男は戦い、女は守られる。

その結果、男が外敵を打ち払い、女は無傷で生き残る。

これは……この体質がそもそも『子孫を残す』ために備わっているものという前提から
考えても、理にかなっているのだろう。

俺は、寝室を後にしながら胸の内を呟く——
——かなめ。

君はどうやら、失敗したようだな。

ヒステリアモードを持つ男女が揃っても、超人は2人発生しない。

強くなるのは、男だけだ。

君が言っていた、『双極兄妹』とやらは……机上の空論に過ぎなかったんだよ。

こっちのヒステリアモードは、やはりかなめでは掛かりが甘く——すぐに治まった。
一方のかなめは、ぐすん、ぐすん、という声は聞こえるものの、寝室から出てこない。

その後——夜9時頃ごろになって、ようやくかなめが寝室から出てきた。

俺がドアの前に置いてやったセーラー服に着替えていたかなめは……一言も喋らない。やはり自分のヒステリアモードの正体に相当ショックを受けたらしく、その両眼りょうめは光を失い、微妙に焦点を結んでいなかったが……

見たところ、もうヒステリアモードは解けているらしい。

女のヒステリアモードは、男より長く続くのかもしれないな。

もしくは、終わり方が曖昧あいまいなのかもしれない。

「……腹減っただろ」

と、声をかけてやると——

かなめはシヨンボリ顔のまま、俺と目を合わせなかったが……こくり。

うなずいた。

「食おう。お前が作ったカレーだから、俺が誘うのも何だけどな」

努めて優しく言いながら、俺はキッチンに入る。

そして温め直したカレーを皿に盛ってやり、2人でテーブルについて……

2人で、黙ったままカレーを食べた。

かなめも、まだ混乱しているんだろう。今はそっとしておいてやろう。話しかけていい

空気でもないしな。さっき強引に引き倒された事も、叱しかつたりするつもりはない。

ただ、こうやって……食事とか、日常のあれこれについては、構かまってやる。

無視しちゃいけないんだ。こういう時は。

そうして、かなめが話すのを待とう。

(……)

なんだか、小学校の頃に俺が些細ささいなことで近所の子供とケンカして……ボコったりボコられたりした末……自分でも重々反省して、シヨンボリ帰ってきた時の事を思い出すな。

あの時、兄さんはこうして——

ただ目を逸らし黙っていた俺と、一緒に、夕食を食べてくれたんだ。別に細かい話を何も聞かず、いつも通りの日常を送ってくれた。

それだけで、俺は……すごく安心したんだ。

俺には家が、帰る場所がある。

そこには兄さんがいて、こうやって、家族愛みたいなもので何もかもを包んでくれる。そう思うと、なぜだか涙が出て……ただ、ただ、本当に安心したもんだ。

俺は——かなめと黙ってカレーを食べ続ける。

あの時食べたのも、確か、カレーだったな。

そんな事を、思い出しながら。

Go For The NEXT! 即席姉妹



翌朝は、窓から差し込む日光がチラチラと動いたせいで——随分早く目が覚めた。目をこすりつつ、ワイシャツとズボンを身につけてリビングに出ると——

そこには真つ白なカモメが何羽か集まっており、かなめはエサをやるでもなく——鳥と戯れている。

青い空と海。白い雲と鳥。

そして——朝日の中で穏やかな笑顔をした、美しい少女。

……絵になるもんだな。キラキラしてる。少し、見とれてしまうくらいだよ。

「おはよう、かなめ」

ベランダに出ると——

かなめは、俺を見て飛び立とうとしたカモメたちに、

「大丈夫、怖い人じゃないよ」

と、優しく語りかける。

するとカモメたちは彼女の言葉を理解したかのように、ベランダに留まった。

「……鳥と喋れるのか、お前」

「ううん、なんとなくだよ」

波の音を背に、苦笑いで振り返ったかなめは——もう、落ち着いているようだった。

そのままだ俺たちは、しばらく朝日の中に佇む。

「お兄ちゃん——断り切れない性格だと思ってたんだけど、すっかりしてたんだね」

「……何がだ？」

「実は、昨日の事、途中からほとんど覚えてないんだけど——お兄ちゃん、あたしに何もなかったみたいだから。自分の体を調べて……すぐ分かったよ」

覚えてないのか。昨日のあの出来事を。

という顔をした俺に、かなめが振り向いた。

「——ヒステリアモード時には、大脳皮質が二重人格みたいに使い分けられることがある。程度は人によるみたいだけど、あたしはけっこうハッキリ分かれちゃうみたい」

そう言われて……俺は、兄さんの事に思い当てる。

ヒステリアモード時の兄さんは、カナになりきってしまう。その姿で俺に『兄さん』と呼ばれても、それが自分の事だと分らないほどに切り替わってしまうのだ。

かなめのヒステリアモードにも、そういう一面があるらしいな。

だが……兄さんは兄さんの状態ではカナになった時の記憶がハッキリしているらしく、

俺にカナの話をされると真ッ赤になって俺をフルボッコにする。

かなめのはその記憶すら、曖昧になるらしい。兄さんのより、もっと不便そうだ。

「……お兄ちゃん、ごめんね」

恥ずかしげに海を見た、かなめの深海色の瞳は――

もう、何かを諦めた人間の目だった。

「気持ち悪かったよね、きつと。あたしみたいなのが突然現れて――好き、好き、なんて言われたら」

――その美しい顔が、自嘲気味に微笑む。

「昨日、あたしは初めてHSSになって……あの数十分で、何年分も思考が進んだようになった。それでお兄ちゃんの事をずっと考えてるうちに、ようやく分かったの。あたしは、お兄ちゃんにとって……知らない子だったんだなあ……って」

「かなめ……」

「あたし、恋愛って……どうすればいいのか分からなかったから。他の女を遠ざけて独り占めすれば、愛してもらえんだって……思いこんでたの。そして、HSSを自由自在に使える兵になって、サードの下で『役割』が出来れば――ロスアラモスに戻らなくてもよくなるんだ、って……必死だった」

――ロスアラモス――

ワトソンが言っていた……

ジーサード、ジーフォース――かなめたちの生まれ育った、研究所の事か。

「『ロスアラモス・エリート』って……お兄ちゃん、知ってる?」

「まあ、多少はな。こつちでも調べたんだ、お前たちの事は。科学的な方法で育成された天才だろ? 確か、人工天才とかいう……」

「それは表向き名称だよ。ロスアラモスが作ろうとしていたのは――『人間兵器』――新しい、最終兵器の一つだよ」

「……最終兵器……?」

「超人的な戦闘力を持つ人間。1人で1個大隊とも渡り合える人間。それを何人も作って、敵国に送り込んで――死ぬまで破壊工作・要人殺害の限りを尽くさせて、その国を滅ぼす。そういう生きた兵器なんだよ。『人工天才』の実態は」

国を、滅ぼす……? 正気かよ、アメリカさん。

おたくが戦争好きなのは知ってるけどよ。

しかし、ワトソンの話によれば――ジーサードが格付けされていたRランク武偵とは、やろうと思えば小国なら1人で滅ばせるレベルの化け物だとか。

それを100人、1000人と量産できるなら、ガチで大国でも潰せるんだらう。アメリカ流の、新しい集団自爆テロみたいな戦術なんだな。きつと、それは。

「核軍縮とか軍備費の切迫——そういった政治的な煽りもあって、アメリカではいろんな新兵器の開発が盛んなんだよ。研究機関だけでも92機関あって、ロスアラモス・エリートはその1つに過ぎないの」

ぷら……と、片足で宙を小さく蹴るような仕草をしつつ、かなめが語る。

「あたしはその機関で遺伝子から造られた『G』ってシリーズのIV号……兵器、製品なの。物心ついた頃には、もうナイフを握らされた。戦争映画がお遊戯に見えるような訓練が、あたしにとっては日常だった。『人』には許されないような事が、それこそ、『物』にするみたいに行われたよ。毎日、毎日——」

車輻科の立体駐車場前で暴発事故が起きた時、かなめが言っていた……

『対衝撃訓練ぐらい何百回もされたから』という言葉が俺の脳裏をよぎる。

「そこから……逃げ出してきたのか」

「サードが逃がしてくれたんだよ。他の人、天才と一緒にね。逃げた人、天才は、開発に失敗した故障品ってことにされて……所外で『破棄』するか、連れ戻して『修理』するかって事になってる」

破棄、修理……

普通は人間には使われないその言葉に、俺は眉を寄せる。

「サードを中心に戦い続けて、あたしたちは生きてきた。あたしは開発途中の素体だった

から役に立たなかつたけど、それでもHSSで強くなる可能性が——兵として役に立つ可能性があつたから、サードはあたしを捨てなかつたの」

「HSS……ヒステリアモードか……」

「その価値を——自分の遺伝子に組み込まれていたHSSを、扱えるようにしなかつたの。そうしないと、サードにとってあたしは無価値。無価値な人間は、彼の下にはいられない。いては、いけない。それが、サードのルールだから」

「……」

「あたしはサードのことを知りすぎてる。だから、無価値だつて分かつたら……サードはあたしを殺す。そして……あたしは、それを受け入れるよ。あたしは自分より強い者には絶対逆らわない。それは、非合理的だからね」

「ジーサードは……ジオ品川で、武偵を気取つてたぞ。人を殺さないような話もしてた」と言う俺に、かなめは小さく笑う。

「——あたしは人間じゃないから。それに殺されなくても……サードに捨てられたら……あたし1人じゃ、アメリカの追跡者たちと戦いきれない。研究所に戻るしかなくなつて、

『修理』される……それに、ずっと怯えてた。でも……」

そこでまた、かなめは自分を笑うかのように微笑んだ。

「でも、あたしは強くなれなかつた。お兄ちゃんも昨日、見たよね。あたしのHSSは

『弱くなる』HSS……これじゃあ、HSS目当てで作った人工天才としても失敗作だよ。だから、修理不能。『破棄』コースになるんじゃないかな』

「破棄、って……さっきも言ってたが、それは……」

「——殺されるんだよ。毒ガスか何かで、安上がりにな」

「お、おい……」

「そんな顔しないで。これは、運命だったんだよ」

八方ふさがりな自分を笑うような、ムリに作った笑顔を保って海を眺めるかなめに——俺は……

沸々と、怒りが湧いてくるのを感じていた。

かわいそうだ、とは思う。

だが、それ以上に——怒りが湧いてくる。

教務科の綴にも昔言われたが、俺は他人に対して少し距離を置く傾向がある。本来は、他人の事で怒ったり悩んだりするタイプではない。

だが……かなめに対しては、感情が熱くなる。

まるで、ヒステリアモードという力のせいで戦い続けなければならない俺——自分自身を見ているような、気持ちになるから。

「かなめ」

その感情を込めて名前を呼んだ俺に、かなめが振り向く。

「お前——俺に名前をもらった時、泣いて喜んでただろ。それは、自分のことを人間兵器じゃないって思えたからじゃないのかよ」

「思いたかったからだよ。幻想にすぎりたかったからだよ。本当のあたしは、研究機関で生まれた、軍事利用される運命の——」

「どこでどう生まれたかなんて関係ないッ。そんな事で人間の運命は決まらねえ！」

今の俺はヒステリアモードじゃない。

女に対して、優しく気を遣いながら話す事なんかできない。

だが、今は——

それでいい。そう思う。

だから、素のままで言わせてもらうぞ。思った事を、全部。

「そういう……くそったれな運命だつて変えられるのが人間なんだッ。お前、さっきから聞いてりゃ——研究機関がどうの、サードのお役に立つの立たないのって——生き死にがかかった事まで他人任せじゃねえか。お前は見た目も……その、人に好かれる感じだし、頭もいいし、運動神経だつて並外れてる。お前ほど優れた人間なら、ジーサードの手助けなんか無くても生きていけるだろッ」

「1人じゃダメなんだよ。どこの国籍も無くて人権もないあたしには、誰かの助けがいる。

助けてもらうには、存在価値を認めてもらえなさいけない。あたしの事を認めてくれた人は——サードだけなんだよ。もう、その価値も無いって分かったけど……」

「——お前は、あれもこれも順番が逆だ！」

なぜか俺を叱る時の兄さんみたいな口調になってしまいつつ、俺はかなめに怒鳴った。
「逆……？」

「人が認めるかどうかより、まずは自分が自分を認めるかどうかだろ！そこは人としてはき違えるな。それに……俺も、お前を認めてやるよ。さつき色々言っただろ。頭とか。運動神経とか。あれはお世辞じゃない。本音だ」

と言った俺に向けられた、かなめの円らな瞳が……

きゅん……と……

微かに、見開かれた。

「——お前もご存知の通り、俺は後輩に命じてお前を調べさせた。それで分かったが——お前は優秀な人間なんだ。1年には可愛がられてるみたいだし、2年じゃ俺とお前の事は『賢妹愚兄』とかって呼ばれてるぐらいなんだぞ」

と、かなめぐるみで作られた新しい不名誉な呼び名を、つい自分で出してしまい——俺は一つ咳払いをしてから、続ける。

「……誰か頼る人間がいるのはいいけどな。いなくちゃいけないってワケじゃないんだ。

依存っていうんだよ、そういうのは。誰しも、1人で歩かなさいけない時がいつか来る。お前の場合は、それが——今なんだ。きつと」
そう言いながら、俺はこの『放っておけなさ』に……昔のレキを思い出していた。
まあ、これはさすがにかなめも無意識なんだろうが……かつて俺が油断して、危険な所まで踏み込まれてしまった女子——アリア、白雪、理子に加えて、レキの一面まで彷彿とさせてくるとはな。どんだけ俺の弱点を的確に突いてくるんだ。この子は。
「お兄ちゃんが言うこと、正しいと思うよ。でも——」
頷くように俯き、声を小さくしたかなめは……
小さく、震えていた。
まるで帰る家もなく、頼る人もなくした、孤児のように。
カモメたちが、そんなかなめを心配そうにのぞいている。
「……あたしにはもう、分らないんだよ。サードから離れたら、あたしはどこへ行けばいいの……？ あたしは、どうして生まれてきたの？ あたしは、誰なの……？」
かなめは、その白い指で顔を覆い……
……ぐすつ、ふえ……と、泣き出してしまった。
年相応の、中学生の、女の子らしく。
あ——……

こいつはほんとに、泣き虫だよな。

いや、今のは泣かせた俺が悪い。ちよつと、年下の女に厳しいことを言い過ぎたかもしれん。ほんと、普段の俺は女子の扱いがド下手だからな。

……などと後ろ頭を掻きつつ思っていたら、チラッ……
顔を覆う指の間から、かなめが上目遣いに俺を見てきた。

「……」

それでなんとなく、言いたいことが以心伝心してしまった俺は……

まあ……しようがない。

こいつの事は何度も泣かせちまったからな。

その詫びだ。詫びぐらひは普段の俺でもできるし、しなきゃいかんだろう。人として。

「じゃあもうちよつと、ここにいろ。答えが出るまで」

そう言っちまったのは、流れで言われた感もあったが――

泣いてる女子に、甘いんだよなあ俺は。アリアの時もそうだったな。そういえば。

この日々で、かなめから改めて学んだ。俺の女がらみの3つの弱点は……涙と、香りと……あと何だっけ……ああ、ふとももか。これらには今後も気をつけよう。

などと考えていた俺に――

「お兄ちゃん――お兄ちゃん……!」

かなめが、抱きついてきた。

あのロツカールームでも同じ姿勢になったが――あの時とは違う、もつと――

純粹無垢な、一切の汚れを知らない少女に生まれ変わったような手つきで。

そのピュアさに……ニオイとかふとももとか、少々変態的なことを考えてしまっていた俺は赤面してしまう。

「お、お前のヒステリアモードの事は、黙っておいてやるから。というか、そもそも俺はヒステリアモードのこと自体隠してるんだ。昨日の件は、俺とお前だけの秘密だぞ」

「お兄ちゃんと、あたしだけの、秘密……」

なぜかそこを嬉しそうに繰り返してきたかなめは、うん、うん、と頷きながら俺の胸に埋めた顔を離さない。

コイツは、ハグと呼んでいたが……この、抱きつく姿勢が好きなのかもしれないな。

今度は嬉し泣きしているらしい泣き虫かなめの背を、ぽんぽん、と落ち着かせるように撫でてやると――

「……お兄ちゃんは……やつぱり、優しい人。お兄ちゃんは、お兄ちゃんだけは、あたしの存在を否定しないでくれる……あたし、あたし……」

感極まったような表情で俺を見上げたかなめが、少し赤面していた俺の顔を見て……

……かあ……

自分も、赤面した。

……やばいぞ。

これはコイツの心にあるというナントカ・スイツチがONになりかねんサインと見た。

「——お兄ちゃん……」

「なんだ。ほら、もう離れろ。部屋に戻って朝メシでも——」

「あたし——片思いだった分かってる。分かってるけど、お願い。もう一度だけ、言わせて。もう一度だけ、させて」

出たぞ。かなめさんお得意の、この話術。

コイツの『一度だけ』は、危険なんだ。

何を言って何をするつもりかは知らんが、早々に切り上げないと。

そう思った俺が「じゃあ早く——」と言いかけると、言い終えるより早くかなめが、

「——ほんとは、ほんとに、好きだからね？」

その言葉に続けて……鼻と鼻がぶつからないよう、少し顔を傾け——

背伸びはアリアと同じだったが、アリアよりずっと自然に——

また、キス——してきた。

「……ッ！」

すぐには振り払いたい空気があったので、俺は何秒かしてから——

離れて、『はい終わり！』と宣言するように口を片手で覆^{おお}う。

その仕草に、かなめは「お兄ちゃん、真っ赤。かわい——」などとクスクスと笑い……

いちやつく2人をもう見てられない、とても思ったのか……朝日の中へ、カモメたちが飛び立っていく。

拍手するように羽ばたくカモメたちの白い羽根が舞う中で、

(ああ……やつぱり、今回も……)

俺は、自分がヒステリアモードになっていない事を悟る。

かなめでは、絶対にならないというワケではないらしいが……

なりにくい。どんな女子よりも、なりにくい。こんなに愛らしい女の子なのに。

かなめも、なっていないようだ。かなりの所まで踏み込まないと、ならないのだ。それは確かだろう。

俺たちの、これは——どうしてなんだ？

まだ俺たちの間に残るその謎を考えようとした、俺の思考が——

がしゃがしゃしゃッ！

中断させられた。大型の鉄器がバネ仕掛けで、気に組み上がるような、激しい金属音に。

「いい、いいいいッ、一度ならず、二度までもオオオオオオオオオオ——！」

——オオオオオオオオオオ——！！

荒ぶる猛牛のような声が、火災報知器みたいに響く。

ぐわっ！ と、室内からベランダへ謎の熱風が吹いてくるような錯覚が俺を襲う。

「……………ッ！」

わ、忘れてた……………ッ！

ていうか呼んでたんだ。俺が。それを早くも忘れてましたよ！ かなめさんのせいで俺の身辺に、もう1人いる——かなめ同様、キレると人が変わるヤツの事を！

油の切れたロボットのように、俺が、声の方を、向くと、はい、案の定、

「……………ッ！ 白雪……………」

仁王像みたいな顔をした白雪が、リビングに仁王立ちしていた。

こ、こないだ台場に呼び出した時とは全く別人モードだ。言うなれば、黒雪の方。

その全身から立ち上るドス黒いオーラにも引きまくる俺だが……

セーラー服の白雪が右腕一本で抱え、かなめと、かなめに抱きつかれた俺にもついでに向いている——M60汎用機関銃！ に、ドン引きする。

「キンちゃん様と、二度も！ わっ私より多くエー！ うらやまけしからん回数うエッ！」
じゃきつ！

と白雪が腰だめに構えた機関銃の給弾口からは、ぞろろろろおおっ——ッ、と——
1発ずつ金具で連結された762mm NATO弾が、広げた巻物みたいに伸びている。

ベルト状に並んだ銃弾の大行列は、弾詰まり防止のために水平近くで白雪が構えた手のひらを経由し——だらんと足下まで続き、床でグルグル蛇局を巻いたあと、純白のソックスに沿うように上……………スカートの中へと続いている。

い、一体何発、いや、何百発あるんだよその弾！

（……………!!）

そこでさらに俺は——

自分のそばから立ち上り始めた——

第二の、ドス黒オーラにハッと気づく。

「……………おいカマトト」

ギロツ。

俺に抱きついたまま、かなめが白雪を睨みつける。

もんのすごい、ナイフみたいに鋭い三白眼で。

「お前、あたしから、お兄ちゃんを横取りするつもりだな？」

こ、こ、こっちも——裏返った！

これはあの、包丁振り回してた、ヤバい方のかなめだぞッ……………！

言うなれば3つの人格の内、チャンネル2のかなめ。一番キワドイかなめさんだ。

「——それはこっちのセリフです！ いくら私の義妹とはいえ、家庭内の風紀を乱す行為

は嚴重に処罰！ 処罰！ 処罰しますッ！

し、しかし白雪も——これだけ取り乱してるのに、やっぱり武偵ぶていだな。今のセリフを聞くに、俺の依頼通り『双子の妹』は演じてくれてるらしいよ。

「あたしとお兄ちゃんのジャマをしないで！ お姉ちゃん、この家から出てけッ！」俺の身を守るように立ちはだかったかなめが、ボブカットの髪を振り乱してわめく。不意に奇妙な影が差したので、振り返ると——くる、くる、くるる。

X字形をした布状の……縁が刃物にもなっている、あの防弾盾が背後に舞い降りてきた。な、なんか家族戦争みたいになってきたぞ。我が家が。

——ぐぬぬぬ……！

と、白雪・かなめの即席姉妹が、憤怒ふんぬの形相同士で睨み合う。

「お姉ちゃん、いっぺんあたしに負けたくせに。勝てると思ってんの？ 非合理的イ」

「かなめ。あなたには教育が必要だね。璃璃リリ粒子の濃度ぐらい、毎晩測定するべきだよ」

「だってえ、夜はお兄ちゃん様が寝かせてくれないんだもん」

悪魔の笑みを浮かべ、白雪の二重接尾辞をマネたかなめに、

「なん……ですって……？ シ……C……シイエ——ッ!?」

謎の絶叫と共に、M60の銃口をブルブルブルル！ と震わせた白雪が——カッ！
己おのれの中の何かが覚醒かくせいするように、両眼りょうがんをカッ開いた。怖い！



その桜色の唇が、痙攣するようにびく、びく、と動いていて……ああ、読唇するんじゃないやなかった。コ・ロ・スって言ってますよ白雪さん。もう怒りの余り声出てないけど。

「かなめツ！ 人の世には、きよ、兄妹でしていい事と悪い事がありますッ！ いっいつ、犬猫じゃあるまいし！」

人ん家で機関銃振り回すのはしていい事なのかよ白雪！

「けッ——決闘ですッ！ 決闘なら事故死も有り得るッ！ 抑々遠山家の安定を確保し、以て日の本の平和に寄与する為、此の決闘、海に己むを得ざるものありッ！」

ぎやり！ と銃弾ベルトを掴み、口から火を吐くように叫んだ白雪は——

「か、かかかッ、かなめ！ あなたに決闘を申し込みます！ キンちゃん様の婚約者として、決闘を申し込みますッ——ッ！」

え……？

(こ、婚約者……？)

あ、あの。白雪さん。俺の依頼を受けて、身内を演じてくれるのはいいんだが……

そこ、大幅に——設定、間違えてませんかッ！

Go For The Next!!!

あとがき

アニメ版『緋弾のアリア』、ご好評いただきありがとうございます！ 赤松です。

ですが！ 着替えシーンなどを撮影した時——カメラ前をスカイフィツシュという光るUMAが飛んじやいました。そのせいで、TVではちよつといいとこが見えなかった……と、お嘆きのそのあなた！

実は——アリアのアニメは、BD&DVDにもなっているのです！

そちらでは、そのスカイフィツシュが特殊捜査研究科・UMA狩りチームの手によつて全て駆除されております。なので視界はとってもクリアー！

それをお手元に置いて、あの可愛いかった・カッコよかったシーンを何べんも見てもいつでも脳内で再生できる超能力を覚醒させちゃいましょう！ これぞアリア充！

もちろん俺はとくにアリア充だぜ！ と、両手をサムズアップされているお方。

アリア最新情報の中で要チェックな、『AA』というキーワードをご存知でしょうか？

実は、『緋弾のアリア』には……同じ時間軸を追いかける形で進む、もう一つの物語があるんです。それが、『緋弾のアリアAA』（ヤングガンガンコミックスより既刊2巻）。

A Aは、武偵高に通う4人の個性的な女の子たちが織りなすストーリー。
 かわいい女子高生がキャッキャウフフしてる日常系かと見せかけて……そこは武偵高。
 格闘・剣劇・銃撃戦、そしてやっぱ『何か持ってる』女の子たちの必殺技も乱れ飛ぶ、
 アリア的要素をしっかりと持った武装日常マンガに仕上がってます。

内容がこの小説と時間的・空間的にリンクしているので、アリアやキンジたちも登場し
 —小説では描かれなかった、キャラクターの裏事情も見ることが出来ます。

制作は、こぶいち先生がキャラクターデザイン、バトルも美少女も巧みに描きこなせる
 橘 書画子先生が作画、そしてストーリーを私が書いてます。

雑誌・ヤングガンガンにて連載中ですので、小説の新刊をお待ちいただく間もこちらで
 アリア分が定期補給できちゃうワケです。いやーこれは私も嬉しい！

—原作とアニメの他にも、緋弾のアリアにはまだまだ楽しい世界が広がっています。

A A未体験の皆さんは、ぜひA Aで新鮮なアリア・ワールドを広げつつ……

このX巻を上巻とするなら下巻となるXI巻を、楽しみにしててくださいね！

ちよつと予告しておく——大変な事が、ついに、キンジの身に起きてしまうのです！

2011年7月吉日

あかまつちゆうがく
 赤松中学

アリア10巻
 おめでとう

アリアもついに10巻！
 表紙は白雪です。

M60持ってる絵は
 初めてだったので
 結構苦戦しましたが
 その分がっこよくなってる
 といいなと思いつつ。

本編は新キャラも登場して
 目が離せませんね！

アニメの方は10巻が
 発売される頃には
 終わってますが
 動くアリア達を観れて
 すごく楽しかったです。